

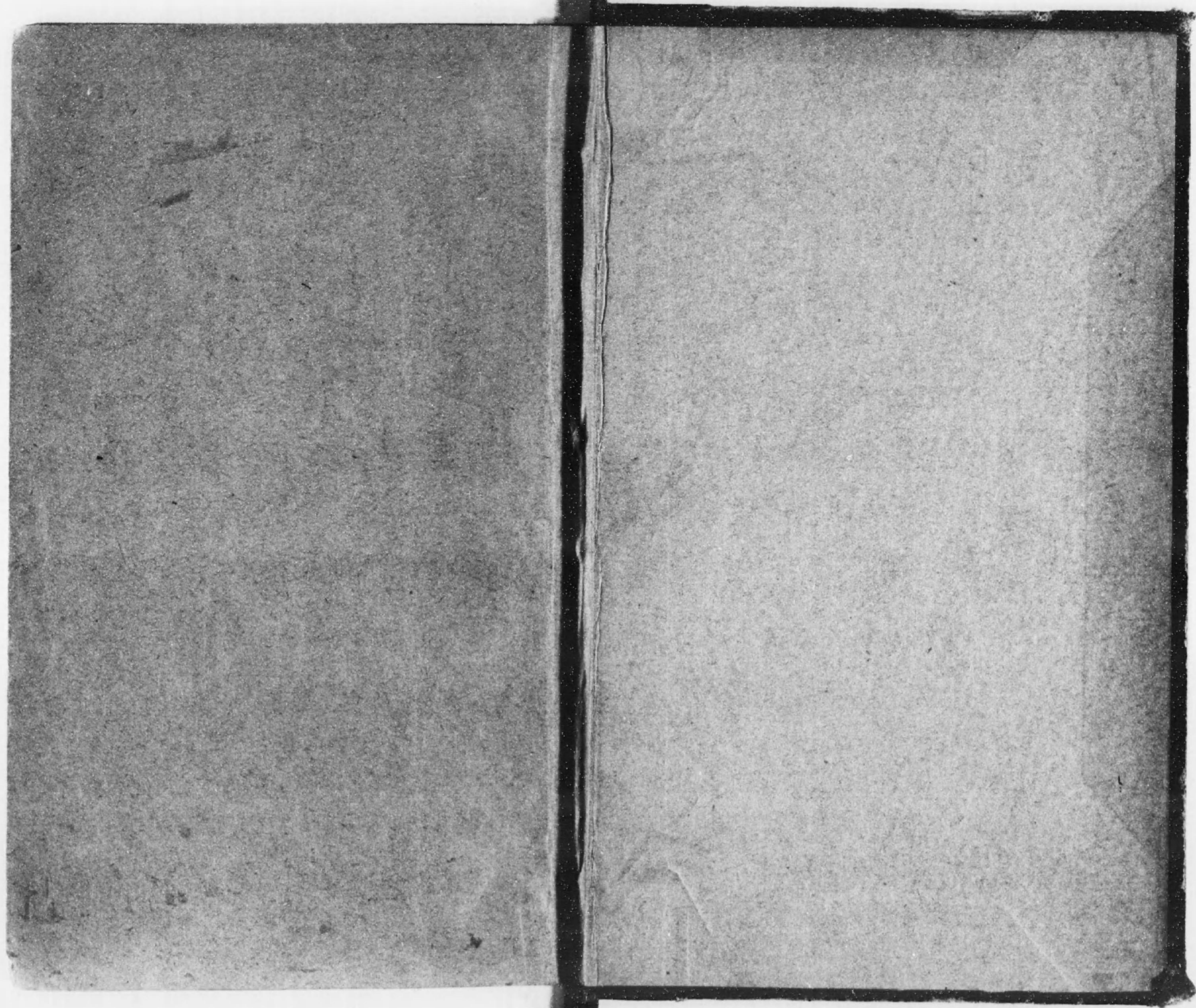
504  
131



始









504-131



生及死  
來世の哲學

大正  
11. 12. 22  
内交



この書起稿の途中にして逝  
きし亡き姉の靈前に捧ぐ

序 言

この大地に生れてきて、いちばん厭かな、いちばん大切な、いちばん誠實なことは、衷心の自己を育て、ゆくことである。否、それが人生のすべてであるから、我々がこの一念に生きることによつて、すべての生活が意味をなして行くのである。といふよりも、そこに人生の意義があり生き甲斐があるのである。だから、我々が若し自己を育て、ゆくことを忘れたその時には、人生の意義は失はれてしまひ、すべての生活が、それごと、たわごと、いたづらごとになつてしまふのである。爲めに、我々にとつて最も危いこと、不眞面目なこと、怖ろしいことは、育て、ゆかねばならないその自己を見失つてしまふことである。といふことは、早くから口にもし、思ひもしてをつたことでありましたが、近頃になつて、一層そのことをはつきりと味識し、はつきりと信ずるやうになりました。それがために、このことをすべての方々にも、はつきりと信じていたまきたい、といふ私の念願は益々白熱化してまわりました。また、この念願を果したいといふことは豫て前者「最新科学より観たる佛教の批判」にも申しておいたことでありますから、一日も早くと思つてをりましたが、何をいつても東奔西走南船北馬の身のことゝて、つひまゝくられてしま



ひました。しかし、おくれながらも、一ヶ年後の今日、やうやくにして讀者諸兄弟の前に呈し得ることは、私としましてはこの上もないよろこびであります。それとともに、この一書を公にするについて、多大の御盡力を下された今井氏に對して、深く感謝いたす次第であります。

大正十一年三月二十三日

播磨白鷺城畔の草堂に於て

長谷岡唯見誌す

## 生死及來世の哲學 目次

### 總論

死生觀を論じて來世の眞義に及ぶ……………一

### 本論

#### 生活篇

一 眞實の生活に目醒よ……………三

喚はねば死ぬ喚つても死ぬ——物質の奴隷生活——感情の奴隷生活——心と宇宙との關係——肉體と宇宙との關係——生の實務——生の無常——生の矛盾と錯誤——靈的生活に目醒よ——

二 自己とは何ものぞや……………三〇

眞實の自己に觸れるには——肉體の分解——人間の一生はフィルム回轉なり——死の現象に二種あり——

三 自己とは何物ぞや……………三六



生滅の原則——變化狀態の靈魂——不生不滅の靈魂に着眼せよ——眞の自己を育てよ——

四 意義ある生活とは如何ん……………四五

未來主義の誤謬——現實主義の誤謬——生活には二種の態度が必要なり——人生五十年を經濟的に使用せよ——

五 宗教的生活……………五三

宗教的生活の道場——衷心の念願に生きよ——善導大師の宗教的生活表現——生の道程——生の眞實道——生の懺寂——病的宗教生活——眞の宗教的生活——處世の誘惑に墮ち入る勿れ——

六 魂に糧を與へよ……………六八

人生の旅路——人生の行路病者になる勿れ——魂の糧とは何か——宗教は骨董品にあらず——活宗教——

## 靈魂篇

一 靈魂に對する誤謬的の見解……………七八

原始時代の靈魂思想——唯物論者の靈魂論——進化論より觀たる唯物論者の

靈魂論——物理學より觀たる唯物論者の靈魂論——死は斷滅にあらず——

二 宗教哲學による人間の解剖……………九〇

□不生滅的靈體の分解

宇宙魂——靈性靈魂——靈魂の本質——靈的進化退化の起る原理——人間の二重性——如何なる生活を靈的生活と云ふか——

□生滅的靈體の分解

肉體の性能——生理的認識作用——靈氣體——生滅的靈體の本素——二重の靈體——唯物論者の靈魂論も一面の眞理あり——

三 佛教に於ける人間の組成觀……………一〇九

物質組成の原理——受蘊(感情)——想蘊(思想)——行蘊(爲作造作)——心識による我執——心の作用(心所)——心の自體(心王)——五識の性能——第六意識の性能——末那識の性能——阿賴耶識の性能——

四 佛教の心理學より觀たる靈魂……………一二二

言葉の不完全——靈魂といふ語は一つの記號に過ぎず——阿賴耶識と靈魂——アラヤ識と無我——靈的生活の本領——現實生活の尊き所以——

## 轉生篇



一 宇宙の必然性……………一六一  
因果の原理——因縁——増上縁——等無間縁——所縁縁——因果は宇宙の必然(性)なり——

二 Karma 業とは如何なるものか……………一七〇  
業の作用——物理学上より観たるカルマ——勢力消散法の原則より観たるカルマ——業の定義——二種の業因——業の時間的分類——同時に二種の應報は起らず——境遇の千差萬別なるは如何なる原理によつてか——

三 生より死へ死より生へ……………一八九  
有機的過程と心的過程——意識が死後存続するものと假定して——轉生は自我の再生にあらず——生の世界は二種の力によつて構成せらる——カルマの精選に努力せよ——

四 如何なる原理によつて再生の現象は起るや……………一八六  
萬物を創造する不可思議力——不可思議なる創造力は如何にして造らるゝか

五 主觀と客觀との交渉關係……………二〇六  
客觀の二種類——不可思議なる創造力の種類——外境的客觀の二種類——内境的客觀の二種類——佛教に於ける客觀説は眞理なり——自己の世界は他人

六 哲學に於ける再生論……………二二七  
人我と眞我との性能——哲學に教へたる再生の原理——哲學と佛教との再生論の相異——

七 運命の眞意義……………二三三  
運命の字義——因果の原則と運命——カルマの持續と運命——自己の運命は自己が開拓せよ——

八 信仰の力と未來の運命……………二四四  
主觀の化學變化——聖道門の精神的化學變化の方法——淨土門に於ける精神的化學變化の方法——淨土の候補者——吾人は佛力による主觀の淨化法によるべきである——

九 吾人は何故前世のことを記憶せざるか……………二五〇  
記憶の種類とその意義——生の過程を知るには何れの記憶作用によるべきか

境界篇



一	他動的方面より觀たる佛教の十界説	三三七
	人間界の進化現象——境界別——佛教の十界説——佛教の十界説は靈的進化論なり——	
二	自動的方面より觀たる佛教の十界説	三三七
	自我の愛——無我の愛——境界の苦樂は愛の擴張淺深によつて生ず——	
三	十界の説相を現實的に觀る必要	三六〇
	吾人は何故十界の説相を信じ得ざるか——十界の説相は構造的物語りにあらざ——	
四	地獄 Naraka	三九七
	各宗教の地獄の説相が異なる所以——佛教の地獄の説相は世界的である——釋尊が今日出世して地獄の物語をせられたならば——無間地獄の狀相と地獄の種類——退化現象の具體的表現——地獄の獄卒及び熱火は何を表現したも のなるか——地獄を知らんとせば現實の生活を翻り下げよ——	
五	餓鬼道 Pretas	三〇九
	流行餓鬼——有財餓鬼——名譽餓鬼——餓鬼の生活者に苦しみのある所以	
六	畜生道 Tiragyoni	三一六
七	阿修羅道 Asura	三三八
	畜生道の苦相——吾人は畜生の生活をせざるや—— 阿修羅の生活狀態——闘争の世界——吾人の胸中に修羅の世界あり——	
八	天上界 Deva	三二九
	天上界の社會組式——天上界の生活とその苦相——現實的に觀たる天上界の生活——	
九	聲聞 Cravaka 緣覺 Pratyeka	三三六
	聲聞緣覺の精神的化學變化(小乘)——智的信仰者の生活——情的信仰者の生活——	
十	菩薩 Bodhi Saltra	三四六
	菩薩の精神的化學變化(大乘)——堅實なる信仰の生活者——	
十一	佛陀 Buddha	三五二
	大乘極地の説法——佛陀の字義——佛陀の異名——佛陀の三身——歴史的に觀たる佛陀の三身——	

結 論



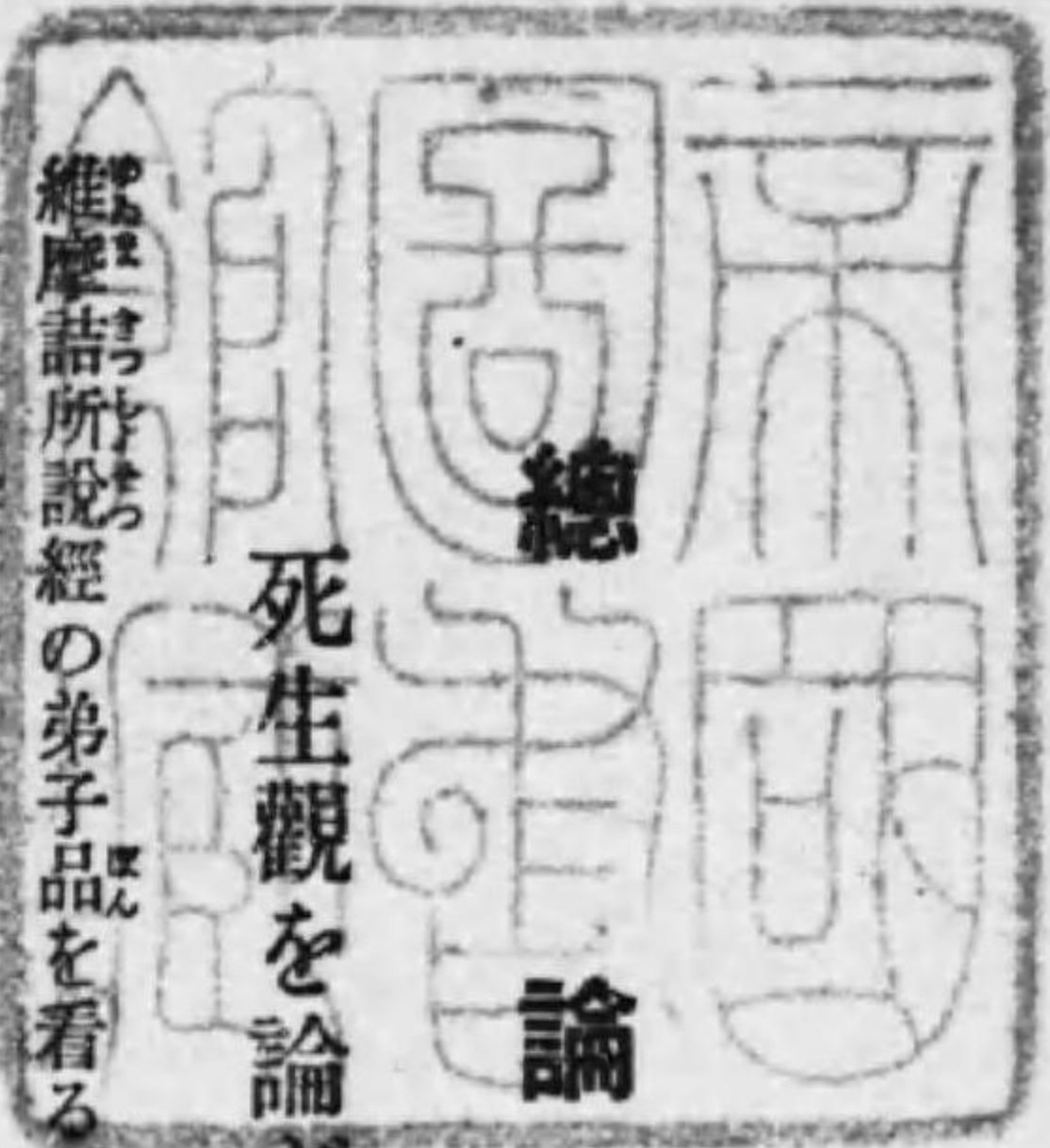
自己を見失ふ勿れ……

……  
總の生活者——悟りの生活者——實に汝自らを知るべし

三六

# 生死及來世の哲學

長谷岡唯見著



生死觀を論じて來世の眞義に及ぶ

維摩詰所説經の弟子品を看ると、總明多智神足第一の大目犍連尊者を在家の居士維摩詰が一呵して居る語が面白い。法には壽命無し、生死を離れたるが故に。——省略——法には去來なし、常に不住なるが故に。』と、之は全體どういふことを言つたのかと申しますと、一口に言へば、眞理の世界の生活者には壽命といふやうなものはない、即ち無量壽である。従つてその世界には三世の區別なんか無いといふことであります。之を聞くと死を恐れてをる我々、一分一秒を争ふ現



代人にとつては持つてこいの世界であります。尤も事實に於て其世界に到ることが我々人間生活の根本の目的であり、それを基調とした生活でなければ此人生五十年は意義を爲さないのです。併し、果してさういふことが言へるのだらうか。また實際に於てさういふやうな世界があるのだらうか如何ん。といふことは我々にとつては一の疑惑であります。けれども、事實さういふことが言へ、さういふ世界があるから仕方ありません。

普通我々が壽命と言つてをるのは、生と死との中間、即ち生が始つて次に死が来る迄の時間を指してそれを壽命と言つてをるのであります。そこで、その中間の時間の長短によつてアノ人は短命な人であつたと言ひ、アノ人は長命な人であつたと我々は言つてをるのであります。ところが、維摩詰に言はせると、そんな壽命なんか云ふやうなものはない、従つて長命だとか短命だとかいふやうなことも云へないといふのですから面白い。尤も之は維摩詰が無茶を言つてをるのでなければ、暴論を吐いて居るのでもなくて、眞理を物語つてをるのであります。横鎗を入れるどころか、その説には頭を下げねばなりません。何ゆゑなれば、壽命對生死の關係は先き程云つたやうなものですから、生死のきづなから脱しきつてをる生活者には、勿論生もなければ死もないのですから、其中間といふものは見出せない譯です。すれば、壽命といふものがあるべき筈はあ

りません。故に維摩詰が「法には壽命なし生死を離れたるが故に。」と言つてをることはよく解つてをります。けれども、若し維摩詰が無壽命論の一天張りで、生死のきづなから脱してゐない者にまで壽命がないといふのでしたら、それは所謂暴論といふものであります。併し、さうでないのですから維摩詰のこの語は充分に味はつてみる必要があります。かう申しますと、卓上の空論とは所謂維摩詰のその語なり、と反對論をとなへてくる人があるかも知れませんが、併しどちらが卓上の空論だかモウ少し話を進めてみれば解つてくることでもあります。全體我々は生死を離れるとか、生死から脱するとかいふと、すぐに何んだか神秘的な世界を連想して、その世界に到らなければ實現できないことのやうに思つてしまつて、我々には不必要論なり卓上の空論なりと片付けてしまふ悪癖があつて困ります。併しそれも無理ならんことで、この肉體を持つてをる限りにはどうしたつて死なずにすまないのですから……。併し、いま假りに支那の誰かのやうに不老不死の靈藥を探し廻つて、萬ヶ一にも探しあてたならば死なずにをれるかも知れません。それだけでなく、近頃若返り法とか云ふ醫術が発見されたさうですから、年が寄れば若返り法の手術を受け、また年が寄れば若返り法の手術を受けしてゐたら、或ひは死なずに済むかも知れません。マアさういふことはどうでもよいとしておいて、いま假りに、我々が何等かの方法によつて死を



脱れることが出来たとしても、亦またきるとしても、モウ一つの生から脱れることは一寸むづかしいやうに思はれます。昔印度に、二言目には自分の父親を徳者だと言つてほめてゐた一人の息子がありません。それが或る集會の場所へ行つて世間話の後で何時ものやうに、自分の親はかつて一度も女の肌にくれたことのない程な徳者だと言つてほめたさうです。餘りそのほめやうが面白いものですから、その中の一人がそれではお前はどうして生れてきたのかと尋ねたので、その息子は二の句がつけなかつたといふ話があります。尤も之は訓話ですから、いまの場合用ふべきではないのですが、一寸拜借して話をすゝめますと、これですて假ひ不老不死の薬をのんで、或ひは若返り法の手術を受けて死なすにすむやうになつたところが、俺は生死から脱した人間だなどはウカツに言へません。何ぜんれば現に飯を喰つて生きてゐるのですから、それではお前は五尺の身體をどうして得た、と云はれたらそれこそ一言半句の答もできません。よく／＼生も脱し得た俺は聖者だと云ひたければ、何んとかして此五尺の身體を片付けてしまはねばなりません。それには焼いて灰にしてしまふより外に良い方法はありますまい。ところがそれです、假ひさうして生から脱れ得たと云へるやうになつたとしたところが、今度は死を脱れ得たと言へなくなつてきました。斯のやうに、五尺の身體を持つたお互ひは生を脱れ得たかと思へば死から脱

れ得ず、死を脱れ得たかと思へば生から脱れ得ずで、どうしても生死二つ乍ら離れることは不可能事であります。それもこの五尺の身體があるためで、未だその上に飯も喰はせねばならず、着物も着せねばならず、何んと厄介なものを持ち合せたものではありませんか。ところが、釋尊は此肉身があればこそ生死から離れることができるのであると云はれるのだから面白い。何んだか耳をつまんで鼻をかむやうな話ですが、茲が佛教の味ひのあるところであり、有難いところでもあります。

全體この生とか死（滅）とかいふことは、佛教の堂奥に遣入つてゆくとあり得べきことではないといふのです。あり得べき現象でないからして脱れることができると言はれるのでして、事實あり得べき現象であるのにそれから脱れることが出来るといふのは所謂暴論であつて、佛教では決してそんな暴論は吐きません。仍で、佛教の堂奥に進入して大乘で説くところの無常觀を伺ひますとこのことがよく解ります。が、先づその前以て大乘の教へを伺ふ階梯として説かれたところの小乗の無常觀を伺ひますと、一切の萬物——人法——は念々に生滅（生死）の現象を繰り返へして寸時も住まらぬ、その現象を無常といふのだとかう申します。ところが、この小乗の無常觀を大乘の立場から批判しますと、同言異意と申しまして、その言ひ詮はすところの語は



と同じであるけれども、その意義内容が異つてくるのであります。尤も小乗の教は大乗の教を同  
ふ準備として説かれた教へですから、さうなくてはならないのですが、と云つて、小乗で説くこ  
ころの無常觀は間違つてゐるといふのではなくて、その意義がモウ一つ徹底しかねてをると云ふ  
に外ならないのであります。所謂方便説とはこのことです。いま少時その批判の内容を紹介しま  
すと、念々にして住まらずといふことは、住の状態から不住の状態へ、實在の状態から不實在の状  
態へと念々にその相を變へてゆくといふことですから、所謂一切の萬物——人法——は常住不變  
なものでないといふことです。ところが、よく考へてみるとこの説には穴があります。即ち念々  
にして住まらずといふその語の中には、不住の中に住を見留め、不實在の中に實在を是認してを  
ります。しかし、そのやうなことは理論上許されないことであつて、この一念に住——實在のも  
のが、次の一念に不住——不實在になるといふやうなことはどうしても考へられませんか。この一  
念に住——實在してをるものなれば、次の一念にもやはり住であり實在でなければなりません。  
この論法でゆけば、一切の萬物——人法——は常住不變の實在性をもつたものでなければならな  
いことになります。尤も之は理論としては筋道が立つてゐるかも知れないが、事實と錯誤してき  
ますから一寸ハイと言ひかねるのであります。こゝへくると、どうしても大乘へ足をふみ入れね

ばならないことになつてくるのです。丁度魚が餌にひかされて網の中へ這入つてゆくやうに、自  
づと大乘へ志すやうに釋尊といふ人は甘く仕組まれたものであります。すれば、大乘に於てはど  
ういふ意義のもとに無常觀を説くかと云ひますと、念々にして住まらずといふことは住のものが  
不住に、實在のものが不實在になると云ふやうな淺薄な意義をもつた語ではない。併し、一寸考へ  
るとさういふ意味に考へられるのみならず、一切の萬物——人法——はさういふやうに變化して  
ゆくやうに事實みえる。けれどもそれは妄想の然らしむるところであつて、それは丁度影法師を  
本當の生きた人間であると思ふやうなものである。全體一切の萬物——人法——は因縁所生の故  
に空なるものである。だから、その本質は不實在——無住なものである。言ひ換へると住は眞實  
の住でなく、有は眞實の有ではなく、實在は眞實の實在でなく、假住、假有、假實在なのである  
影法師であればこそ消える如く、假住——假有——假實在のものであればこそ滅（死）するので  
ある。滅があればこそ生があるのである。尤も之は生滅の原則の然らしむるところであるが、それ  
を妄想の眼からして看ると如何にも住から不住に、實在が不實在に變化するやうに見えるのであ  
る。故に一切の萬物——人法は念々にして住まらずと説かれるのであるが、斯く説くのは畢竟第  
二義門で、第一義門に於ては念々にして住まらずといふところか一切の萬物の眞實相は無住——無實



在のものであると説くのである。無住——無實のものであれば滅（死）のあるべき譯はない、滅がなければ従つて生のあるべき筈もない。故に「諸法は畢竟じて不生不滅、是れ無常の義なり。」（維摩經）と説くのが所謂大乘の無常觀であります。

故に、この大乘の無常觀は空の原理に立脚して説かれてゐることが解ります。ところが、またこの空といふことが誤解を招きやすいことなのであります。何ぜなれば、たゞけば痛い、水は冷たい、それは事實ですからどうしたつて空なりとは考へられません。仍で、佛教で説くところの空の原理が卓上の空論のやうに思はれるのですが、併しそれが誤解といふものでして、いくら佛教でも事實眼の前に在るものを無いといふやうな無茶は言ひません。いま佛教で説くところの空といふことは無物の空ではなくて無性の空といふことであります。無性の空（一定の永久不變の性質のないこと）なるものであればこそ水は熱すれば湯となり、それを更に熱すれば蒸氣となるのであります。若し無性の空なるものでなければ、水は幾等熱したところがやはり冷い流動物である譯であります。即ちその性質が永久に變化せないといふのですから……。また我々の此身體に就て言つても同じことで、無性の空なるものであればこそ、子供は青年となり、青年は老人となり老人はやがて死ぬといふやうになるのですが、若し無性の空なるものでなければ、子供は何

時までも子供で大きくなる試しはありません。故に佛教で説くところの空教は正しい眞理——諸法の眞實相を物語つてをるものであつて決して卓上の空論ではありません。尤もこの空教に就て論じかけると際限のないことですから、之で一先づ打ち切つておきますが、この空教に立脚點をもつてゐればこそ、無常とは一切の萬物——人法——が念々にして住らざる現象を言ふのであると云ふことが言へるのであります。尤もこの語の意義内容に就ては既に精しく申しておいたことです。再び茲では繰り返へしません、斯のやうに一切の萬物——人法——の眞實相は不生不滅なるものであればこそ、その天地には三世の區別が成り立たないのであります。何ぜなれば滅を過去と云ひ、當に生ぜんとするのを未來と云ひ、存在してゐるのを現在と我々は言つてをるのですから、滅がなければ過去はなく、生がなければ未來はなく、不生不滅なれば存在はなく存在がなければ現在はない譯であります。故に「法には去來なし、不住なるが故に。」と維摩詰が言つたのも之また眞理を物語つてをるのであります。

已上に於て、諄々しく申してきた第一義諦の世界即ち説明の天地でなく悟入の妙境に我々が到るならば、換言すると、一切の萬物の眞實相に別しては自己の眞實相に大悟徹底するならば、生死を見留める譯にもゆかず従つて壽命の存在をも見留めません。しかし、その見留めないと云ふ



語の一面には生死の存在があることを物語つてをります。故に我々が悟入の妙境に入つたならば生死がないと云ふのではなくて、幾等自己の眞實相に目覺めることに依つて悟入の妙境に到つたところが、この肉身のある限りには客觀的には生死を受けるでせう。しかし、自己の主觀にそれを見留めなければ何等の束縛をも感ぜず、何等の恐怖をも感じません。生死の束縛、恐怖を何等感ぜないならば、それは生死を離れたものであり、解脱したのであります。生死を離れ、生死から解脱したのなれば、維摩詰の語のとほり眞理の世界の生活者となつて無量壽を獲得したのであります。この意味に於て、この五尺の肉體があればこそ生死を離れ、生死から解脱することができるのであります。故に、この邊の消息を維摩詰所説經には「解脱の相は則ち諸法なり。」と言つてあります。

斯く説くところの大乗の無常門は、やがて空門の堂奥に入る入門として説かれたものであります。言ひ換へると、絶對平等の世界に參入する一の階梯として説かれたものでありますから、小乗に説くところの無常門もやがては絶對平等の悟入の妙境に引入せんが爲めに説かれたものに外ならないと云ふことになります。何ぜなれば、小乗の无常門は大乗の無常門を伺ふ豫備の爲めに説かれてゐるものでありますから……。依つて、釋尊は一切の生類を絶對平等の悟入の妙境に引導

せんが爲めに、少時第二義門に下つて無常には大の無常と小の無常とがあることをお仰せられてをります。尤もこの二通りの無常に就ては本論に這入つてから精しく申しますが、要するに、小の無常といふのは我々は刹那々に生死を繰り返へしてをると云ふことであり、大の無常といふのは、この人間世界に於ての刹那的生死の連續が斷絶する現象を云ふので、普通我々が束縛を感じ恐怖をいだいて居るところの所謂死であります。この意味に於て、來世には二通り解釋がある譯であります。即ち大の無常に依つて來る來世と、小の無常に依つて來る刹那的來世とであります。ところが、來世とか未來の世界とか後生とかと云ふことは、普通には大の無常に依つて來る來世の意味にのみ解せられてをるやうであります。併し、この來世觀は餘り感心できません。といふのは、我々が物事をかうであると斷言し得るのは現在の刹那の世界に於てだけであつて刹那以前のことはかうであつたと云ひますから、それはもはや過去の世界であります。ところが、次に來る刹那に對しては、我々は過去と現在との既知から想像して、かうであらうとだけは云へますが、かうであるとは斷言できません。想像はできても斷言ができなければ、假ひその間刹那であつても、それは既知の世界ではなくて未知の世界であります。故に之から假ひ十年生きやうが二十年生きるとしたところが、それは總て未知の世界に屬すべきもので既知の世界に



繰り入れるべきものではありません。故に現在の一刹那の世界だけにしか住み得てゐない我々にとつては、既に過ぎ去つた過去の一刹那の世界、當に過ぎ去らんとして居る現在の一刹那の世界に對して、その十年間なり二十年間なりは當に來らんとする一刹那の集合でありますから、それはすべて來世であります。この刹那々々の來世は、總て大の無常が招くところの來世なのであります。何ゆゑなれば、それが我々にとつては未知の世界である限りには、刹那々々の生死の連続が何時どの刹那をもつて断絶するかも知りません。若し次の一刹那に於てその生死の連続が断絶すれば、それで人生は終局をつげるのですから、その刹那的來世そのものが即ち普通に考へられ思はれ言はれて居る來世である譯であります。この意味に於て、一應は來世を二通りに解釋しますが、現在の一刹那の世界にしか住み得てゐない我々にとつては、十年乃至二十年先きに來世があるのではなくて、刹那々々が來世なのであります。依つて、私はこの來世觀のもとに釋尊にまねるではないが少時第二義門に下つて本論に進入し、總ては悟入の妙境にまで説き及ぼさんとするのであります。

## 本論

### (生活篇)

#### 一 眞實の生活に目醒よ

人間を靈と肉との二つにはつきりと分けることができる限りには、その靈を生かす生活とその肉を養ふ生活と、その生活に二通りあることは今更いふまでもないことであります。

#### □喰はねば死ぬ喰つても死ぬ

仍で、肉を生かすためには、飢ては喰はなければならず、寒ければ着てゆかねばならず、疲勞すれば睡眠もせねばならないが、併し只これだけの生活では、假令肉を生かすことができても靈を育てることはできません。また只これだけの生活ぐらゐなれば、彼の豚も生きんが爲めに食物泥の中にあさり、犬も生きん爲めには骨肉の一片を奪ひ合つてをるのでありますから、只單に



肉體的の生命を養ふことだけをもつて、生活の全部として居る人は、お氣の毒ながら他の動物と少しも違つたところはないと云はねばなりません。

かういふと、喰はねば死ぬぢやないかといふ人があるかも知れないが、しかしそれは餘りに淺薄な言ひ分ではなからうか？ 成る程生きんとして生きて居る一切の生物は、みな肉體的生命慾のために食物をあさつて居るのでありますが、しかし、そのやうに外的にいろ／＼な食物さへ攝食すれば果してそれで死なゝいでありませうか？ もし食<sup>た</sup>べて居りさへすればそれでこの肉體の生命が何時までも限りなく持續してゆくものであるならば、路傍<sup>みちわたり</sup>に佇んで居る乞食でも毎日の食事はかりは缺かさなからうと思ひますから、世界中に誰れ一人として死ぬものはありません。さうなると、今日でさへ彼方でも此方でも住宅難で騒いで居るのに、これからさき幾百年幾千年の年月がたつ間には、この地球上にはいろ／＼の動物が繁殖し、人間が増殖して最早<sup>まづ</sup>身動きもできないやうになつて、今度は住宅難どころの騒ぎではない身動難<sup>みどうがたがた</sup>といふ騒ぎが持ち上るかも知れない。しかしマアさう云ふ社會問題はまづ起らなからうと思ひます。その證據には、今日世界人類の死亡平均數をとると一分間に約六十二人の人間がコロリ／＼と死んでをるといふではありませんか、しかしその死んでゆく人々はみな喰つてゐたけれども死んだのであります。すれば私共が

毎日死なゝいためにと思つて喰つて居るけれどもそれは大變なあて違ひであつて、何時かはその六十二人の仲間入りをせなければならぬ時節がくるのであります。即ち三度の食事を缺かさないうやうに食べて居つても、私共はやはり火屋の煙とたち上らなければならぬ運命の所有者であります。かうなると最早「死なゝいたために喰ふのだ」と云ふことが言へなくなつてきました。されば、我々は全體何がために喰つてをるのであらうか、と云ふ疑念は當然起るべきであります。

### □物質の奴隷生活

ところが、この當然起るべき筈の疑念を大抵の人々には起らないのだから仕方ありません。しかしその様な疑念が起らないのも無理ならんことでせう。今日社會の生存競争は日一日と劇しくなつてくるものですから、そんなことを考へて居るところか、パンを得ることに相當注意を拂つてゐてもどうかすると生活難に追はれなければならないのであるから、最早人々は只パンの一方のみに心を專注して了つて、これが人生唯一の目的であるかのやうに迷溺してをることは、下層階級のものばかりではなく、政治家も法律家も教育家も宗教家も學者もみな同一様であります。

以上は只パンの問題のみに止まつて了ひましたが、私共の物質的慾望はこんな可愛らしいもの



ではありません。釋尊は大無量壽經に、

「……然るに世の人薄俗にして、共に不急のことを評ひ、此劇惡極苦の中に於て身の營務を勤めて以て自ら給濟す。尊となく卑となく貧となく富となく、少長男女共に錢財を憂ふ。有無同じく然なり。憂思適に等し。屏營し愁苦して念を累ね、慮りを積み、心の爲めに走せ使はれて安き時あることなし。田あれば田を憂へ、宅あれば宅を憂ふ、牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食什物、また共にこれを憂ふ。思ひを重ね息を累みて、憂念愁怖す。

横さまに非常の水火、盜賊、怨家、債主のために焚漂し劫奪せられ、消散し磨滅すれば、憂毒松々として解る時あることなし。憤りを心中に結んで憂惱を離れず。心堅く意固くして、適に縱捨することなし。或ひは摧碎によりて身亡び命終れば、

これを棄捐して去る。誰もしたがふものなし。尊貴豪富も亦この患あり。憂懼萬端にして勤苦することかくの如し。衆々の寒熱を結んで痛と共に居す。

貧窮下劣は困乏にして常になし。田なければまた憂て田あらんことを欲ふ。宅なければまた憂て宅あらんことを欲ふ。牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食、什物、なければ亦憂てこれ有んことを欲ふ。

たま／＼一あればまた一をかく、これあればこれをかく、齊等に有らんことを思ふ。たまたま欲して具にあるもすなはち復糜散す。かくのごとく憂苦して當にまた求索すれども、時にうること能はず。思想して益なし、身心俱に勞れて坐起安からず。憂念相ひ随ひて勤苦することかくの如し。また衆々の寒熱を結んで痛と共に居す。或るときはこれによりて身を終へ命をほろぼす。肯て善をなし道を行じて徳に進まず。壽終りて身死して當にひとり遠く去る。趣向するところあれども、善惡の道よく知る者なし。』

とお仰せられてをるこのお言葉は、洵に物質の奴隷生活者の生活表現ともいつてよからうと思ひます。

### □感情の奴隷生活

また私共は、恰も浮草のやうに人生の波のまに／＼に翻弄せられてはゐないでありますか？即ち或時は僥倖にも花の咲き匂ふて居る綠草の磯邊に打ち上げられて百鳥が囀る聲を長閑な歌と聞いて春の氣分を讚美したり、また或時は悠々閑々と清い流れに舟を浮べて清月を眺めるやうな氣持の時もあり、または滔々たる飛瀑懸河のやうに自分のおもはくがかなつてゆくのを喜んで樂



天主義に走ることもあります。しかし人生の波は時々刻々に流變しつゝありますから、何時どんな處へ運び去られてゆくかも知れません。即ち時には淺瀬に打ちあげられて身動きもできない破目に落ち入り、また或時には深淵の渦中に捲き込まれて底知れない深みに沈んでゆく時などには、その苦しさ切なさに悶え泣き悲しんでそれが爲めに厭世主義に走ることもあります。このやうに、私共は人生の荒波にもあそばされて、只無闇に或時は悲哀の泣き悲しんでゐるかと思へば、少し都合がよくなると先きの悲哀をうち忘れてしまつて、只無闇に己を忘れて歡喜に躍るといふやうに、一の感情の奴隷になつて生活をしてゐないでありませうか？

若し、已上に述べたやうな生理的生活そのものが私共の生活の全部となつてゐるならば、私共人間の一生も亦彼の鳥や獸が飢ては食物をあさり飽いては林間に歌翔して自然的慾望に支配されて一生を終るのも、その生活の點に於ては少しも違つた處はないと言はねばなりません。と云つて、私共がこの五尺の肉體をもつてゐる限りには、喰つてもゆかねばならず、着てもゆかねばならず、寝てもゆかねばならず、泣いてもみねばならず、笑つてもみねばなりませんから、どうしても生理的生活を離れきることはできません。しかし、その離れきることのできないところに生理的生活の意義があるのではあるけれども、それが生活の全部であるといふことはどうしても受

け入れることはできないのであります。

### □心と宇宙との關係

いまこの理由を明かにするには、「生の責務」と「生の無常」といふことをお話しせねばなりません。その以前に先づ私共の心と宇宙との關係、肉體と宇宙との關係について少時申してみやうと思ひます。

仍で、私共の心はこの無限大の宇宙とは如何なる關係をもつてゐるか云ふと、佛陀は華嚴經に

『心は工畫師の如し、種々に山水を畫く。』

と、お仰せられてありますが、全くそのとほりであつて、この宇宙の時間と空間との無限大の比較すると、私共人間は僅かに五尺足る足らずの肉體と五十歳前後の壽命としかもつてゐないのですから、お話しにも何にもならないやうなものですけれども、その實は私共の身邊に存在してゐるありとあらゆる生物無生物及び一切の現象はもとより、この無限大の宇宙そのものが最早私共の起伏によつて存在して居るのであります。また彼の榮西禪師、



「大なるかな心や、天の高きは極むべからざるなり、而して心は天の上に出づ、地の厚き測るべからざるなり、而して心は地の下に出づ、日月の光踰ゆべからざるなり、而して心は日月光明の表に出づ、大千沙界極むべからざるなり、而して心は大千沙界の外に出づ。それ太虚か、それ元氣か、心は則ち太虚を包み而して元氣を孕むものなり。天地我れを待つて覆載し、日月我れを待つて運行し、四時我れを待つて變化し、萬物我れを待つて發生す。大なるかなや、吾やむを得ずして強てこれを名くるなり。」

と、言はれてをるやうに、私共の心は大にしてはこの無限大の宇宙を覆ひ、小にしては一微塵の中に隠れるべき神變不可思議の働きと、また自然界人事界を支配するところの偉力とをもつてをるのでありますから、この宇宙の運命如何んは偏へに私共の心の動きやう一つによつて確定せられることが分るであります。

#### □肉體と宇宙との關係

また、次に私共のこの五尺内外の肉體と宇宙との關係について考へてみますと、少し理窟臭くなりますが、幾何學では點の集合は線であり、線の集合は平面であり、平面の集合は立體であ

ると云ふことを申しませう。ところが、この宇宙はその立體の合成體でありますから、私共のこの五尺の肉體が一つの立體であるからには、宇宙の無限大なのに比較しては何等の價值も見留められないやうな小ぼけなものではありませんが、小さければ小さいながらやはり宇宙を構成してをる一分子であります。されば、今若し私一人がこの宇宙的存在から離脱して了つたならば、この宇宙は存在することができないで必ず瓦解して仕舞ふべき道理であります。假令私が中央政府に在つて國家の政治を議する身分であつても、亦紙屑拾ひの微職であつても、そんな境遇、職業身分といふやうなものは何んの關係もありません。只私のこの五尺内外の肉體が一つの立體であるといふことだけで、私は宇宙が存在するについては非常な重鎮の位置にあるのであります。しかし、その位置が重鎮であるだけにそれだけその責務は大きい譯であります。

#### □生の責務

さて、右に申したやうな關係を、この無限大の宇宙とは私はもとより誰しもみながつてをるのでありますから、自分一人の墮落は自分一人ではすみません、この宇宙全體を墮落に曳き入れるのであります。またその正反對に自分一人が向上することは、宇宙全體を向上せしめる所以で



あります。斯の様に、宇宙そのもの、全體の運命が各自一人々々の雙肩に懸つてをるのであります。敢て、宇宙といふやうな大きなことを言はなくとも、世界全體の運命はもとより國家そのもの一縣そのもの一郡そのもの一村そのもの、運命が、最早各自の雙肩に懸つてをるのでありませんか？ さうなると國家の興亡は偏へに各自の進退如何んに依つて運命つけられる譯であります。であるからして、私共は決して物質の奴隷となり、また感情の奴隷となつて自然的の慾望に支配せられながら、あたり十生涯を醉生夢死するため生れてきたのでは本末、この大責任を担ひてそれを爲し遂げんために生れてきたのであります。故に私は世の人々にこの生の大責務を自分をもつて居るのである、それを爲しとげねばならない義務をもつてゐるのである、といふ自覺を裏心から促したいのであります。(論理イオレ)

かう申しますと、そんな責任ぢやとか義務ぢやとか言つて居るのは、お前が勝手に理窟をつけ、こしらへたのではないか、と云はれる人があるかも知れないが、果してそんな責務や義務を私が勝手な理窟をつけて拵らへたものであるか、どうかといふことを明かにしてゆきませう。

さて、私共が今日かうして生存してをることのできるのはそも誰れのお蔭でせう？ こんなことぐらゐは馬鹿でない限りには、狂人でない以上には誰れでもよく承知してをることでありませう。

から、何も經文なんかをひきずり出して論究する程に難問題ではありませんが、先づ私共がかうして生存し得るについて第一番にお蔭を蒙つてをるのは父母の恩恵であります。即ち釋尊が父母恩重經に、

「人生れて世にあるや、父母を親となす。父あらざれば生れず、母あらざれば育たず。」

と、お仰せられてをるやうに、私共は若し父がなかつたならばかうして生れてくることができませんでした。また母がなかつたならばかうして大きくなることができなかつたのであります。されば私共がかうして生存するまでには、早や一つの大きな父母に對する恩恵を受けて居るではありませんか。ところが、また我々人間は只ひとりぼっちで生きてゆくことができるかどうかといふと、決してできるものではないといふことを私は斷言しておきます。その證據には、この世をはかなんで自殺をする人達は、自分の悶先を慰してくる人がなく、力になつてくれる人がなく、なつて、只自分ひとりがこの廣い世界にひとりぼっちになつて仕舞つたからして生きて居ることができなくなつたからです。何ぞこの惜しい命を、慰さめてくれる人があるのに、力になつてくれる人があるのに、無闇にする氣になれませう。それも二つも三つも命のかけがへがあるのならば、物好きで一つぐらゐは棄てる人もありませうが、後にもさきにもかけがへのないたつた一



つの惜しい命ですのに、それをすて、了ふといふことはよく／＼ひとりぼっちになつて生きてゆくことができなくなつたからだらうと思ひます。すれば、私共が内に在つては心を慰さめてくれ力になつてくれるものは兄弟でせう。また外に出ては心を慰さめてくれ力になつてくれる者は朋友でありますから、私共は兄弟にも亦朋友にも大きな恩恵をうけて居ると云はねばなりません。ところが、私共は只慰さめてくれたり力になつてくれたりする兄弟や朋友があれば、それで生きてゆく事ができるかと云ふと、そんなことぐらゐでは逆も生きてゆくことはできません。どうして喰つてゆくのです、どうして着てゆくのです、どうして住ひをしてゆくのです。若し私共が喰ふものもなく着るものもなく住ひをする家もなければ、死ぬより外に仕方がありません。すれば、私共にお米を賣つてくれる米屋があればこそです。ところが假令米屋がどれほど私共に米を賣つてやらうと思つたところが、そのお米を作つてくれる百姓がゐなければ米屋から米を賣つてもらふことはできません。すれば百姓があればこそです。ところが、假令百姓でも無いものを作り出すことはできませんから、お米といふものがあればこそです。かう言つてきますと、私共が毎日喰つてゆくためには、米屋にも百姓にも米そのものまでにも、大きな恩恵をうけて居るではありませんか。また、私共が着てゆくことのできるのは、呉服屋があつて反物を賣つてくれ、ばこそ

織物屋があつて、反物を織つてくれ、ばこそです。ところが、いくら織物屋があつても原料が無くては反物を織る事はできません。すれば、原料になつてくれる綿があればこそ、また原料を作つてくれる蠶や羊や駱駝等が居ればこそ私共は寒い思ひもせず済むのではありませんか。されば、私共が着物を着ることのできるのは、呉服屋や織物屋や蠶や羊や駱駝や綿等のお蔭があればこそではありませんか。また、私共が住ひをする家だとしてこれと同じことです。若し大工がなければ家は建てられません、また假令大工が家を建てやうとしたところが、原料もないのに家は建てられません。すればその原料になつてくれる木があればこそ、私共は雨露をしのぐことができるのでありますから、私共は大工にも亦木その物にも大へんなお蔭を蒙つて居るのではありませんか。以上はほんの氣慰めに申した迄に過ぎませんが、斯のやうに段々とおしひろげてゆきますと、私共が今日かうして生存してゆくことのできるのは、直接的にまた間接的にあらゆる現在社會の人々や、または今日宇宙間に現存してをる一切の有情物及び非有情物の恩恵と親切とがなければこそであります。言ひ換へると、私一人を生存せしめるために現在社會の人々は血を流し、涙をこぼし、汗をしばりだしてゐてくれるのであります。また一切の生物無生物が存在してゐてくれるのではありませんか？ ところが、斯のやうに現在私共を生存せしめてくれて居る、親、兄



弟、朋友及び現在社會のあらゆる人々、または一切の有情物非有情物等が現在かうして生存し存在してゐてくれるその原因を、過去幾億萬年否この宇宙が構成せられた無始のはじめにさかのぼつて回顧してみますと、それこそ數へても數へても數へつくせない無量無數不可計の恩恵や、親切や、血や、涙や、汗が凝り固まつて今日私共を斯のやうに生存せしめてをるのであります。このやうに時間的にも空間的にも何れの方面からして考へてみても、私共が今日かうして生存することは容易ならざる一大事件であつたことが知られるのであります。されば、私共は當然その後を受けつぐべき責務があり、また私共を生存せしめ或ひは生存せしめたところの無量の恩恵と苦心と犠牲とに對してでも、その責務を全うせなければならぬ義務があるではありませんか。かう生の責務といふことに氣付いてみると、只鳥や獸と同じやうに自然的慾望に支配せられて、この意味深長な價値の尊い人生五十年を無意識にお目出度的に終ることができなくなるではありませんか。

### □生の無常

斯のやうに、生の責務といふことについて衷心から自覺をしてそれを遂行しやうとすると、そ

の使命の無限大なるを思ふと共に「生の無常」と云ふことについて心を悩まさずにはゐられなからうと思ひます。「満つれば開る世のならひ」とかいつて、人生は實に無常であります。自分も他人も、社會も、國家も本太川の流れが晝夜不斷に流れて少時も留まらないやうに、國家、社會等は興廢存立があることは、彼のバビロンの榮華も過去の夢となり、ローマの強大も今日では只虚しく旅人の追懐の種となりはてしまつてをるやうなものであります。また無限大の時間と自分の生命とを比較して考へてみると、蘇東坡の言つてをる如くに、

### 「滄海一粟、悲我生須臾」

の感じが起つてくると共に、眞宗の存覺上人の法話集に、

「——老少不定のさかひなれば、さかんなる人も多くゆく、生者必滅のことはりなれば、老ぬる人はましてとどまらず、鳥部山のけぶり、峯にも上り籠にもたつ、われも何時かその數に入らん、あだし野の露、朝にも消え、夕にもおつ、誰とてもよそにや思ふべき。」

と、記されてある文が非常に感傷的に味はれるではありませんか。また、漢學者の語をかりていふと、三更夢さめて萬籟寂たるの時に、自分の友達の身の上について考へてみたならば、今日幼年時代の竹馬の友として語り合ふ者が幾人ありませう？ その多くは既に黄泉の客となりはて、



了つてをるではありませんか。かう考へてきますと、洵に佛陀が大無量壽經に、

「生死の常の道うたゝ相ひつぎてたつ、或ひは父は子を哭し、或ひは子は父を哭す。兄弟夫婦かはるがはる相ひ哭泣す。顛倒して上下して無常根本なり。みな當はすぎまゐりし。常はたもつべからず。」

と、仰せられてをることは、不可動の事實であり眞理であります。

### □生の矛盾と錯誤

ところが、先きにも申したとほりに、今日自分に智を與へ、愛を與へ、希望を與へ、靈を與へるためには無始の過去からして量り知ることのできない多くの犠牲と恩恵と苦心とが拂はれてきたことは、私共に一生涯を醉生夢死せしめるためではなくて、大きな生の責務を果し遂げさせんがためであり、また果し遂げんがためにかうして生存して居るのであります。しかし、心靜かにその責務について考へてみると、逆も五十年や百年の壽命ではその萬分の一も果し遂げることができません。と云つて、宇宙的に大きな恩恵を享けてをることを衷心から自覺すると、その恩恵に對してでもその大責務を全うして了はねばなられません。併し壽命が足りません。されば全體

どうすればよいのでせう？ 茲に於て、私共は「生の責務」と「生の無常」との間に起る矛盾と錯誤とに迷はざるを得ないのであります。言ひ換へると、私共は限りのある壽命をもつて限りのない大仕事をしようとして、其處におこる矛盾と錯誤とに迷ふて居るのであります。

### □靈的生活に目醒よ

しかし、よく考へてみると私共が限りのあるこの肉體的生命——生理的生活——に拘泥してをる限りには、何時まで経つてもこの矛盾と錯誤の迷路から脱することはできません。ですからこんな大きな矛盾を起すやうな生理的生活は眞實の生活でないといふのであります。仍で、私共はそのやうな矛盾が起つてくるところの生理的生活の外に、猶もう一つ矛盾を起さないところのそれ以上に尊嚴な然も限りのない生命をもつてをる靈的生活がある事を思はねばなりません。即ち、生理的生活を生活の本領とせずして靈的生活をもつて眞實の生活であるとする、假令生の責務は無量大であつても生命が無限でありますから、矛盾を起したくとも起るものではありませんからして、私共の生活には肉を養ふ生活と靈を育てる生活と、その生活に二つあるなかで靈を育て、ゆく靈的生活こそ私共の眞實の生活であらねばならないのであります。



## 二 自己とは何ものぞや

措て、「自己とは何ものぞや」といふことは、私共としては大いに決定しておかねばならないことであらうと思ひます。それはまた何ぜであるかと云ふと、若しも私共がこのことを未解決の儘に放つておくと、いつまでも生理的生活に憧着してゐて、人生の根本義に目醒ることができず、只一生涯を昏々朦々として醉生夢死して了つて此意義ある人生を無意義に終つて了はねばなりません、又随つて自分の來世の世界を開拓してゆくと云ふやうなことは全然にできなくなつてしまふからであります。よしまた生理的生活が生の本領ではなくして、靈的の生活が眞實の生活であるといふことを知つたとしても、それは只單に理論の上の知りかたになつてしまつて、靈的生活の何物であるかが一向知りません。

### □眞實の自己に觸れるには

扱て、人間は何をつかまへて我といつてをるのでありませう？ 魂！ 否この魂といふものに

つては、古來から學者の手によつて微より微に、細より細に穿つて日と共に研鑽されてきました。が、まだ未解決のままに放置されてありますから、この魂については矢張普通一般の人々には原始人類が想像してをつたやうな極めて幼稚な程度に止まつて居るために、自我的觀念の根底をなして居ると云ふことはできなからうと思ひます。されば、人間の自我的觀念の根底をなして居るものは何んであらうか？ 頭！ 否さうでもなからう、手足！ 否さうでもなからう、矢張それらの四肢五體を總括したところのこの五尺内外の肉體が、その根底となつてをるやうであります。そこで、眞實の自己に觸れようとするには、どうしても先づ第一にこの生理的肉體の觀念を打ち破らなければなりません。さうしておいて次ぎには、その肉體の生理的作用からして現はれてくる所の意識そのものに對する觀念を、言ひ換へると、生理的作用の副産物として生じるところの意識そのものに對する間違つた觀念を打ち破らなければならぬのであります。

### □肉體の分解

扱て、人間は我れといふ一つの實體が存在してをるものと思つておますけれども、佛陀は人間は Skandhas 五蘊の一時的結合體であると云はれ、また宗教哲學では七性本因によつて假りに組



織せられて居るものであると云つてをります。しかし、この原理は何れも一個の人間全體（靈體と肉體）についての所説でありますからして、後に精しく述べることにして、今は只この肉體 Rupa のみについて話しを進めてゆきますと、全體私人間は毎日何を食べてをるか云ふと、それは人種を異にすると共にその食物も幾分かは相違してをりますが、先づ私共としては毎日米、野菜、魚肉、獸肉等を常食として居るでありませう。ところが、その毎日食べて居る食物は、生理的作用によつて血となり或は肉となつて、私共の身體が刹那々に消耗していつて居るのを補充していつてをるのでありますから、それらの食物によつて私共の身體は出來上つて居る譯であります。ですから、私共のこの肉體のうちには米の部分もあれば、野菜の部分もあり、また魚肉獸肉等の部分もあるといふことになります。故に實際のところは、自分の身體ではなくて半ば以上は米であり、残りの半分は野菜や魚や牛であると云ふべきであります。また人間は誰も裸體で居るものはありません、即ち羊や駱駝の毛で織つた洋服を着て居る人もあれば、蠶の吐き出した絹絲で織つた絹物を纏ふて居る者もあり、また綿で織つた木綿着物を着てをる人もあります。そこで、洋服を着て居る人に、お前さんは羊だ！ 駱駝だ！ と云ひ又絹物や木綿着物を着て居る人達に、お前さんは蠶だ！ 綿だ！ と云つたならば人々は屹度怒つて、それぢやそんな

もの、御厄介にならんと云つて着物を脱ぎ棄てるかも知れません。併し假令着物を脱ぎ棄て、見たところが矢張米や野菜や魚や牛などで出來上つてをる身體がヌツト現はれてくるでせう。そこで、またお前さんは米だ！ 野菜だ！ 魚だ！ 牛だ！ と言はれたらどうします。又人間は直接空氣中から酸素を呼吸すると共に間接的にも豆を食つて空氣中の窒素を吸収して生活を營んで居りますから、人間の身體には空氣の部分もあるといふことになります。恙う云ふと、そんな莫迦なことはないと云ふ人があるかも知れないが、若し人間に空氣の部分がなかつたならば人間が死んでその死骸を焼いたならば火葬場の煙突から人間の身體が舞ひ上るべき道理であります。併し、實際は煙りとなつて空氣中に消え去つてしまひます。それが人間の身體には空氣の部分がある證據ではありませんか。またその際、空氣中に消えそなつた焼け残りの骨の主成分は石灰質でありますからして、人間の身體には石灰質の部分もあると云ふことになります。また私共が常食としてをる米や野菜は土中からして加里とか或は磷酸などを吸収して、それ等が化學的變化を起して米や野菜となつてをるのでありますから、それ等のものを常食として居る私共の身體には磷酸や加里の部分も含まれて居る譯であります。

斯の様に、私共人間の身體を一々分解してゆきますと、「我なり」と云ひ得る資格をもつた部



分とては一つもありません。しかし、それ等の米であらうが牛肉であらうが又野菜であらうが磷酸であらうが加里であらうがみな悉く原素 Element の結合體ですから、それ等の結合體によつて更に出來上つて居る人間の身體も、その根元に遡ると矢張原素 Element の一時的結合體であると云ふことになります。

ところが、結合の現象によつて生じたといふことがあるならば、必ず解體の現象によつて滅するといふことのあるのは生滅の原則によつて明かなことでもありますから、吾々のこの肉體も生滅の原則によつて何時かは滅する時節がくるものであります。かういふと、そんな解りきつたことを言はなくとも、人間が死んで焼いて了へばこの身體は灰になつてなくなつて了ふ事は當然ぢやないか、と云ふ人があるかも知れないが、そんなことを思つてゐては大變な間違ひであります。即ち、この身體は死んで焼いた時ばかりに滅するのであつて、それまでは常に同一の身體であると思つてをうては大變なあて違ひであります。

### □人間の一生はフィルム<sup>の</sup>回轉なり

いまその理由を彼の活動寫眞に譬へて申しますと、畫面に映寫されて居るところの人の姿が、

さも生きて居る人間のやうに動作をするのをみて誰も不思議がるものはなからうと思ひます。即ち、あれはフィルムが回轉して居るから人が動いてをるやうに見えるのであるといふことは、今日の子供でしたら説明をして聞かせなくともよく知つて居ります。言ひ換へると、刹那々々の連續であるといふことを……。これと同じやうに、人間の一生もフィルム<sup>の</sup>回轉であつて、私共が産聲<sup>うぶごゑ</sup>をあげてから火屋の煙と立ちのぼるまでは、人間の一生と題する一大活動寫眞であると思へばそれでよいのであります。その譯は、刹那々々の姿、即ち未來刹那の姿が現在刹那の姿となつて人生の畫面に現はれると同時に、現在刹那の姿は過去刹那の姿となつて消え去るのであります。實にその間一髪を入れずして刹那の連續は或期間（人生五十年）持續されるのであります。言ひ換へると、私共が斯うして活動してをるのは各自の一生のフィルムが回轉して居るからでありますから、現在刹那の身體は次ぎの刹那の身體とは全然根本的からして別なものであります。斯の様に、人間の身體は刹那的連續のものであればこそ、人間が生れて少時母親の膝に抱かれて乳房を弄ぶ嬰兒の時代からして、幼年の時代、壯年の時代、老年の時代と時日を経過するとともに、外面的にも亦内面的にも即ち肉體的にも精神的にも變化してゆくのであります。その變化してゆくことは誰しも否定することのできない事實でありませう。にも拘らず、人々は



嬰兒の時代からの身體が老年に至るまで常住してゐて、それが時日の經過すると共に外面的から内面的に變化してゆくものであると思つてをるのであります。しかし、事實は先き程からも申しますとほり、肉體的にも將たまた精神的にも根本的に時々刻々に生滅の現象をくりかへしてをるのが私共人間の肉體の當相なのであります。之をまた一つの川の流れについて言つてみますと、川の水は少時も同一處にとどまつて居るものではなくて時々刻々下流に向つて流れ去つてをるのであります。しかし下流に流れ去つた水と同量の水が絶えず上流から流れてきてその空處をみたしますからして、川の流れは依然として常住の如くに見えるのと同じことでもあります。されば全體人間はどの刹那の身體をつかまへて「我なり」と云つて居るのでありませう？ かう問ひを發すると、そりや！ その刹那々々の身體をつかまへて我と云つてをるのであると答へる人があるかも知れないが、さう澤山な我があつてはそれこそ大變であります。

### □死の現象に二種あり

この意味からして釋尊が小の無常、大の無常といふことをお仰せられてをるのを考へてみるとその意味が明瞭になつてくることであらうと思ひます。即ち、私共のこの肉體が刹那々に根本

的から生滅しつゝあるその現象が小の無常なのであります。言ひ換へると、人間は刹那々に死に歸しつゝあるのであります。併し、人々はこの刹那々々の死を恐れないで否氣付かないで、遠き未來に死の現象がおこるやうに思つてその遠い未來の死に對して恐怖の念を懐いて居るのであります。けれども、死の内容そのものには少しも違ひはないのでありますから、それは大へん矛盾してをる考へであると思はねばなりません。もしも今現在刹那の身體が過去に消え去つて、今度順調に未來刹那の身體が現在刹那の身體となつて人生の舞臺に現はれてこなかつたらそれこそ大變であります。言ひ換へると、私共の一生のフィルムが休止したならば、私共がたえず恐怖の念をいだいてをる大の無常、即ち死が到來したのであります。ですから、私共の一生のフィルムが何時どの刹那をもつて終局をつけてをるや分らないのであります。即ち、私共の一生のフィルムは間斷なく回轉してをりますから、不意にその終りがきてびつくりさせられるのであります。この現象を釋尊は大の無常と仰せられてをるのであります。思つてみれば我れなりと思つて居るこの五尺の身體も餘りあてになつたものでもないではありませんか。已上に申してきたことによつて私共は先づ肉體によつておこる自我の觀念を打ち破らなければなりません。



### 三 自己とは何物ぞや

偕て、私共は「生あれば滅あり」といふ原則、即ち科學上に於て不變化状態のものであると假定してをる原素 Element が、何等かの力によつて物理的結合か又は科學的化合をすると、その結合してをる時間には長短の違ひはあるけれども、必ず何時かは分解し去るものであると云ふ生滅の原則を知つておかねばなりません。

#### □生滅の原則

そこで、その生滅の原則に左右せられるところの物、即ち變化状態のものには何一つとして實體のある道理はありません。にも拘らず、人々は子供が生れるとお目出度など云つてよろこぶけれども、それが變化状態のものである限りには必ず生滅の原則に左右せられて何時かは死んで了ふものでありますから、人間の身體は決して實體のあるべきものでなくて幻影的のものであり

ます。この一時的の幻影である身體を人間は捉まへて我だとか彼だとかと言つて騒いで居るのであります。そこで、この生滅の原則に左右せられない永久的實在物は、生の現象がないものでなければならぬ、すれば随つて滅の現象のあるべき道理はありません。しかし、物質といふ名のついたものは必ず生といふ現象によつて存在して居るのであるから、滅の現象をのがれることはできません。されば、私共の五官に觸れないところのもの、言ひ換へると、非物質的のものはみな悉く生滅の原則に左右せられないところの永久的實在物であるかと云ふことになりましたが、それは先づ大體に於ては、非物質的のものは永久的實體を備へて居るといふことができるかも知れないが、一概に非物質的のものは生滅の原則を離れた永久的實在物であるといふことは断定できません。

#### □變化状態の靈魂

茲に於て、私共は意識的自我觀念を打ち破ることに依つて眞實の自己に觸れなければなりません。成る程一寸考へると非物質的のものであるならば、永久的なものであるやうに思はれるけれども、それを何ぞ非物質的のものは生滅の原則を離れた永久的なものであると断定することがで



きないかといふと、その理由を最も明白に物語つて居るものは私共の靈魂であります。されば、靈魂もやはり生滅の原則に左右せられるところの一次的幻影のものであるかといふと、私共が靈魂は生滅せないものであると思つて、これによつて自我の觀念をおこして居ることは大へんな誤りであると云はねばなりません。即ち、靈魂もやはり變化状態のものでありますから……。その證據には、人間が生れて母親の膝に抱かれて居る時分には、只泣くことゝ乳をのむことのほかに何事も知らないものが、段々歳をとるに随つて讀書により又社會の自然的教育をうけて、智識は向上し理智觀念は複雑になつてゆき、最早や青年の時代になればどれ程澤山に金をやるからと云つても、誰も母親の膝にだかれて乳を飲む者はなからうと思ひます。また、六七十の老人になると「モウ俺も長くはあるまい」などゝ云つて存外弱音を吐くやうになるではありませんか。斯の様に、人間の魂は非物質的なものではあるけれども、やはり變化状態のものでありますから生滅の原則を離れた永久的實在物であるといふことはできないのであります。しかし、靈魂は斯の様に變化状態のものであるからと云つて、肉體と同一視して全然一次的幻影のものであるといふことはまたできないのであります。實に人間の魂ほど複雑な組織になつてをるものは、他に一寸その類例がなからうと思ひます。それで、私共の魂には變化状態と不變化状態との二つの部分

即ち生滅的な部分と不生滅的な部分とがありますが、このことについては後の靈魂篇に於て精しく申しますから今は省略しておきますが、いま人間の靈魂は變化状態のものであつて生滅すべきものであると云つて居るのは、この變化状態にある生滅的な部分の魂について云つてをるのであります。

さて、この生滅的の靈魂は常に幻影的な一次的の肉體に隨從してその性能を現はすものでありますから、肉體の變化生滅が直ちに影響して共に變化生滅の現象をおこすのであります。昔から「健全なる身體には健全なる精神舍る」と云つてをるやうに、人間として最も身體の健全な青年壯年の時代にはその精神も随つて活氣にみちてゐますけれども、人から御老體ゴラウタイなどゝ云はれるやうになるとその精神もやはり薄弱になつてくるのであります。ですからして、生滅的な靈魂の能力は常に肉體の能力と正比例してをるものであります。ために、肉體が生理的作用を休止すると同時に、その變化状態にある魂そのものも活動を休止する譯であります。仍で、この生滅的の靈魂の作用そのものをさして普通一般には意識と云はれてをるやうであります。併し、假令この變化状態の靈魂——意識——は肉體の解體（死）と共に消滅してしまつても、未だ肉體と全然に關係のない獨立的不生不滅の靈性實體は依然として存在して居るのであります。人々は只一概



に靈魂とか魂とか云つてしまつて、即ちこの生滅的の靈魂と不生滅的の靈魂とを混同してしまつて、その不生不滅の靈體の存在することに着眼せないので、否氣付かないで變化狀態の靈魂の作用そのもの、即ち意識に拘泥して其處に自我の觀念を起すものでありますから、いまは一應その區別を明かにし私共が頼りにして居る意識、否その意識作用を司つてをる靈魂そのものは餘り頼りにする程のものではないといふことを申して、私共が意識作用によつておこす自我の觀念は根本的に間違つてをることを申した心積りであります。

### □不生不滅の靈體に着眼せよ

さて、世の心理學者は意識は「有機體を離れて存在し得べきものにあらず」と云つて、靈魂と意識とをはつきりと區別をしてをるやうであります。しかし一世の唯物論者は、只生理的肉體に隨從してをる生滅的の靈魂のみに拘泥して、他に不生不滅の靈體のあることを忘れて了つて居るためか、「精神は單に腦髓組織作用にして、腦髓組織と精神作用との關係は恰も太鼓とその音、薪木とその焰との關係の如きものにして、太鼓破れて鼓聲止み薪木盡きて火焰消ゆるが故に、人死して身體組織は解體し腦髓は相共に土に化し終れば何んぞ精神ひとり存するの理由あらんや。」

と云つて居りますが、しかしその精神と云つてをるのは何物をさして云つてをるのか知りませんが、もしも不生不滅の靈體そのものを意味してをるのであるとすると、餘り共鳴のできた言ひ分でもないやうであります。その理由は、假令太鼓の音は止んでも亦薪木が盡きて焰は消えたとしても、太鼓を打つ人、薪木に火を點する人は依然として存在して居るではありませんか。たとひ太鼓はあり薪木は山程に積まれてみたところが、人がゐなければ太鼓は鳴らず薪木は燃えないであります。この意味からして彼のゼームス博士の、「オルガンの音聲は機械より生ぜしものにあらずして、唯機械を備へて現はれたるに過ぎず、吾人の生命も生理機關より生じたるものにあらずして、唯生理機關を通じて働きたるなり。音聲はオルガンそのものにあらずる如く、生理的機關即生命と云ひ得べからず。されど腦髓組織が作用を休止すれば特別なる精神作用は休止すべし。さりながら生命の實在的領域には何等の影響も及ぼさざることは、恰もオルガンが發音を休止すれども音聲そのものには何等の影響なきと同一轍にして、假令腦髓作用は休止すれどもよく眞實の世界にあつて、我等が知り得ざる方法をもつて永久的に存續すべし。」との語はよく不生不滅の靈體の存在することが立證せられてをる語であると云ふべきであります。



#### □眞の自己を育てよ

茲に於て、眞に自己と云ふべきものは原素 Element の結合體であるところの肉體でもなく、またその肉體に隨從してをるところの魂そのものでもなくて、生滅の原則を離れて不變化状態にあるところの靈の實體そのものであります。ですからして、私共の生命慾は肉體の生命慾でもなくまた肉體に隨從してをる魂の生命慾でもなく、眞に不變化状態にある不生不滅の靈の實體を永遠に生かしてゆかうとする生命慾でなければなりません。この生命慾からして發露してくる生活そのものが、とりもなほさず靈を育てんとするところの靈的生活であります。この靈的生活によりますと先きにも申したとほりに、「生の責務」と「生の無常」との間に横たはる矛盾錯誤が端的に泯滅してしまふことは勿論であります。また假令その生の責務がどれほど大であらうともそれを果し遂げると云ふことについては何も難かしい方法はありません、只私共が靈の實體を無量劫に涉つて育てゆくことが、とりもなほさず生の責務を果し且無量の宇宙的恩恵に報謝する所以であります。故に私共は、肉的生活に憧着して只一生涯を昏々朦々と自然的慾望に支配せられて醉生夢死することが生の眞意義ではなくして、無量壽 Eternal-life を獲得することによつて

眞如の世界に住ひせんとすることが生の最大目的であると共に、人生はそれがための生の一階段であるとして意義ある生活を營むことが實に人生の根本義であります。

#### 四 意義ある生活とは如何ん

世間には、未來の世界を憧憬するあまり此人生及び社會を惡感視して、現實の生活をば一もとるに足らないやうに思つたり、また兒戲同然なものやうに口走る人々を往々聞くことでもあります。それ等の人々はどこまでも模倣の生活者でありますから、一寸みると如何にも衷心の自己に目醒めて、その自己を育てることによつて無量壽 Eternal-life を獲得しやうと努力してをる靈的生活者のやうであります。その實ははまだ衷心の自己に觸れ得ないで概念の自己に囚へられて居る人達であります。言ひ換へると、無量壽 Eternal-life の道樂者に過ぎないのであります。併し、一旦眞實の自己に觸れてみると人生は兒戲同然のものとして、さう現實の生活をみくびつて了ふ氣にはなれないものだらうと思ひます。否どちらかといふと益々現實の生活が尊く且つ必要であることが痛切に感じられるやうになるに違ひなからうと思ひます。



### □ 未來主義の誤謬

扱て、それについては百喻經の中に次ぎのやうな物語りが記されてあります。

昔、ある所に愚鈍な長者があつた。一日その長者が友達の長者を訪問したときに、三階にある見晴らしの好い座敷で御馳走になつた。ところが、その愚な長者はその立派な座敷と眺望のよいのがホト／＼羨ましくなつて、情ら思ふやうは……自分は此處の主人に劣らないだけの財産や寶をもつて居る長者であるからナニ敗けてたまるものか……と、それから早速と我が家に走せ歸つて大工を呼び寄せて云ふやうには、

長者「お前は、彼の長者の三階の座敷を知つて居るか。」

大工「知つて居るところではございません。あれは私が建てさせて頂いたのでございます！」

長者「それぢや、どれ程金がかゝつてもよいからして、あの三階よりもなほ立派なものを建てゝもらひたい！」

其處で、大工は早速翌日から建て始めた。ところが、それをみてゐた愚な長者は頓んと合點がゆかないので、

長者「大工よ、お前は三階を建てゝくれるのだらうねエ……」

大工「ハイ、三階を建てるのでございます。」

これを聞いて愚な長者はます／＼合點がゆかなくなつたものであるから、

長者「俺は三階を建てゝくれと頼んだし、お前も亦三階を建ててる心積りであらうに、何ぜそんな頼みもせない平屋を建てゝをるのか。」

これを聞いた大工達は可笑さをこらへて、

大工「先づ一階を建てなければ二階は建てられません、またその二階を建てなければ三階を建てることできません。」

愚な長者はまだ合點がゆかないとみえて、

長者「イヤ俺は一階や二階は入用でないから三階だけを建てゝ呉れゝばそれでよいのである。」

と斯う眞面目になつて言ひ張るものであるから、大工をはじめ傍にゐた人達はいづれも吹き出して大笑ひをした。

いまこの物語りを考へてみると、只未來の世界ばかりを憧憬して此人生及び社會を惡感視して



現實の生活の尊いことをまたは必要であることを忘れてしまつてゐる。未來主義者の心理状態は此百。經の中の愚鈍な長者と少しも異つたところはなからうと思ふのであります。この意味に於て眞宗の蓮如上人は、空想的に只未來の世界のみを憧<sup>あこが</sup>がれて現實の生活の尊さを忘れてしまつてゐる人々に對して、

「極樂は樂しきところと聞いて、參らんとねがひもとめる者は佛にはならず。」

と、喝破せられてゐるではありませんか。ですから、未來主義の人々は恰も空中に樓閣を築かうとする人々であつて、その理想は到底實現することのできない不可能なことであります。

#### □現實主義の誤謬

斯のやうに未來主義を排斥するからと云つて、何も私は現實主義に拘泥するものではありません。そもく人生唯一の目的は、只巨多の財産を蓄積して廣家樓臺に袖手安臥して逸樂を恣まゝにすることであると思ふことができるではありませんか。と云つても、やはり私共は澤山の財産も欲しい立派な家にもすみたい、安樂な生活もして氣持はわるくありません。すればどちらかと云へばやはり物質の奴隷となり感情の奴隷となつてもかまはない、彼の鳥や獸が山や野に飢ては食物を

あさり飽いては歌翔するやうな生活が、どうかすると望ましくなつて仕方ないのであります。しかし、よく考へみると先きにも申したとほりに、私共が今日斯のやうに生存することのできるのは無始の過去から無量の宇宙的恩恵があつたればこそであります。また生存して居る限りには宇宙的大責務をもつてをります。にも拘らず、それを忘れてしまつてその恩恵にも報いやうとせず、またその責務をも果さうとせないで、只現實主義に走つて無爲逸樂飽食暖衣して一生を醉生夢死することが、どうして人生の眞意義であると思へませうか。故に私は今、一時的の幻影の世界に醜態として現實主義に囚へられてゐる人々と、厭世的に只未來の世界のみを憧<sup>あこが</sup>がれて居る未來主義の人々とに向つて、大いに反省を促がしたのであります。

#### □生活には二様の態度が必要なり

すべて、主義の生活といふものは病的なものであつて最もいけないことでもあります。その譯はその主義のために衷心の自己を踏み躪り見失つて生活をせなければならぬからであります。即ち未來主義の生活者は空想的な未來の世界のために自己を見失ひ、また現實主義の生活者は物質を享樂するあまり、それがために自己は癡痺せられてしまひますから、何れの生活にした所が衷



心の自己は完全に發育しませんから病的の生活であるといふより仕方ありません。ですから、私共が無量壽 *Eternal-life* の獲得者とならうとするには、どうしても主義の生活を脱して衷心の自己を見失はないやうにし且つそれを育て、ゆくことに心懸けねばなりませんから、仍で私共の生活には二様の態度が必要になつてくるのであります。

しかし、その二様の態度と云ふのは決して二重の生活様式といふことではなくて、二方面に心を用ふる生活といふことであります。先づその一方面は、私共は不斷に自己そのものを反省の俎の上で調理することに心掛けねばなりません。もし私共にしてこの態度がなかつたならば、どうかすると物質の享樂にふけりたい傾向をもつてをりますから、不知不識の内に自己は物質のために癡痺せられてしまつて、終には物質享樂のために自己そのものは殺されてしまはねばならない破目に陥ち入るからであります。ですから、自己を反省の俎の上にさいなむといふことは自己を見失はないやうにするがためであります。

斯のやうに、自己を反省の俎の上にさいなむ一面には、どうしても無量壽 *Eternal-life* を獲得しやうとする高遠なところの欣求の生活がなければなりません。もし此欣求の生活がなくなつて只前者の生活のみであつたならば却つてそれがために悲感の生活に陥ち入るおそれがあり、また

欣求の生活のみあつて前者の生活が缺けてをつたならば、それがためにまた病的な未來主義に陥ち入るおそれがあるであらうと思ひます。ですから、私共の生活にはどうしても反省の生活と欣求の生活とがなければ完全に衷心の自己を育て、ゆくことはできなからうと思ひます。

#### □人生五十年を経済的に使用せよ

さて、茲に於て私共は一つの矛盾した感じが起らないでありませうか。それは、有限的の肉體的生命をもつて無限的の永劫の眞生命に生きやうとすることでありませうか。言葉を換へて申しますと、眞如の都に到る道程は遠く随つて無限の時間を要せなければならぬのに、肝腎の肉體的生命が存続する期間には長短の差異こそあれ、それはみんな有限的なものであるからであります。しかし、いま茲に二人の旅人があつて、その一人は一時間に二里の道を歩み得たとし、他の一人は同じ一時間に一里の道しか歩むことができなかったとすると、私共は果してどちらの旅人でありたいでせうか。全くこれと同じ譯のものであつて、限りのある時間をもつて限りのない道程をできるだけ多く歩んで、できるだけ早く眞如の都に近づくことを心懸けねばなりません。言ひ換へると、清き美はしい氣高い無限の眞生命に生きやうとして、有限的な肉體的生命の存続期間を



もつとも有効に、且もつとも経済的に使用するその生活をさして、私は意義ある生活であると申します。釋尊も、すべて主義に囚へられた病的の生活を誡められてをると共に、大いに意義のある生活を鼓吹せられてをるやうに見受けます。いま大無量壽經によると、

「——何んぞ力めて善を爲して、道の自然なるを念ひて、上下なく洞達して、遍際なきことを著はさざらん。よろしくおの／＼勤精進して、つとめて自らこれを求むべし。——往きやすくして人なし。その國逆違せず、自然のひくところなり、何んぞ世事をすて、勤行して道德を求めざらん。極く長生を獲て、壽樂極りあることなし。然るに世人薄俗にして、共に不急のこを諍そひ、この劇惡極苦の中に於て身の營務をつとめてもつて自ら給濟す。——」

と、お仰せられてをります。洵に、この語のとほりに私共は自己と云ふものを常に反省の俎の上にさいなんで、世の劇惡極苦のために誤聞化されず殺されないやうに心懸けて、それと俱にまた常に高遠なところの無量壽を獲得せんとする欣求の生活をするによつて、生の眞實道ができるだけ多く歩ゆんで、早く眞如の都に到達せんとする勇猛精進の生活者でなければなりません。言ひ換へると、生理的生命の存續期間を最も有効に、最も経済的に使用して、衷心の自己をできるだけ早く然も完全に育て、ゆく靈的の生活者でなければなりません。すれば必然的の原則として

無量壽 Eternal-life を獲得することのできるのは當然の結果であります。

## 五 宗教的生活

已上に於てくどくしく申してきました、靈的の生活とか又意義ある生活とかと云ふ生活は、とりもなほさず宗教的生活の意味してきたのであります。

### □宗教的生活の道場

ところが、宗教的生活と申しますと、何んぞか俗塵をはなれた山奥の樹下石上に端坐して、律法的な嚴酷な苦行をする聖者じみた生活のやうに聞えますが、私のいま申します宗教的生活といふのはそんな病的な生活を意味してをるのではなくて、この紅塵萬丈の巷にあつて且何物にも誤聞化されず殺されないで、眞の自己生命に生きやうとする勇猛精進の生活そのものをさして云つてをるのであります。言ひ換へると、人生の荒波の眞只中に衝き立つて然もその荒波に翻弄せられないで、却つてその波を左右せんとして闘つてゆく生活が眞の宗教的生活であり態度であり



ます。「坐禪せば四條五條の橋の上」といふ禪語がありますが、この語は洵に妙味のある語であつて、私共が宗教的生活をする道場は敢て深山幽谷の樹下石上のみに限られてをるものではなくて、往來頻繁車馬絡繹の中がどちらかと云へば眞の宗教的生活をするには、却つて相應ふさわしい道場であることを言ひあらはしてをるものではないでせうか。言ひ換へるならば、算盤を手にして忙がはしい店頭店頭に働くのも佛になる修行であるならば、また黒煙は漲たかがり機械の響こゑが轟々然たる工場に働くのも佛になる修行であります。もつと極端にいふと、禪家に、「喫茶喫飯是佛事」と云つてをるやうに、私共の淺ましい醜みにくい此現實の生活を離れては宗教的生活の存在は許されないのであります。只その生活が自己を生かすことに眞摯であるか否かによつてそれが確定せられるのであります。

#### □衷心の念願に生きよ

さて先きにも申しておいたとほりに、人間として只單に肉體的の生命のみに憧がれて靈的の生命を養ふことを忘れて生活をして居る人は、お氣の毒乍ら犬や豚と少しも違つた點はなからうと思ひます。只少々違つて居るところは、人間の專賣特許である人間皮を被つて居るぐらゐのもの

でありませう！ さうして没趣味のまゝに死んでゆくのであるかと思ふと、寧ろ憐愍あはれみの情に堪へません。しかし、世間には眞生命の渴仰者であるところの衷心の自己を惨めにも主義のために殺してしまつて、只物質主義に、將た又機械主義に、野獸主義に走つて偉大なる人格の作成者とならうとする念願に生きて居る人々の寥々さびなることは實に遺憾に堪へません。茲に於て、私共はどちらかと云へば寧ろ有肉體的生命を養ふ事よりも、靈的の生命を養ふことに全力をそゝがねばなりません。と云つて、何も肉體的生命を無視するのでもありません。もし此肉體的生命の資本がなかつたならば靈的の生命を養ふてゆくことができないのですから、大いに肉體的生命も養つてゆかなければならないが、併しそれは生活の全部とならない様に心懸けてゆかねばなりません。それが爲めには矢張り自己を反省の俎かまの上に絶えず調理してゆつて、自己の醜惡な姿とその弱々しい自分とを凝視してゆかなければなりません。ところがまた此處にその自己の醜くさとその弱々しさとをみつめて、只無闇むくらと泣いてのみ居る人が往々にしてありますが、しかし泣くことが衷心の自己を育て、ゆく所以でもなければ又泣くために自己を反省の俎上にさいなむのでもありません。嘗に泣いてのみゐたのでは何時がきたとて無量壽 ETERNAL LIFE の獲得者となる事ができないばかりではなく、慈悲深きみ親の救済の叫びを聞くことはできません。ですからして、



私共は自己の醜い姿に泣きつゝもやはり眞生命に生きんとする衷心の念願に勵まされつゝ勇猛精進して生の一路を辿るところの、眞善美の渴仰者であり憧憬者であらねばなりません。しかし、私共が欣求してをる眞善美の完全性は恰も水面にきらめく月影のやうに、それを攫まうとして一步を進むならばその理想も亦一步遠退くものであります。しかし、その理想が一步遠のくならばその時更にまた弱々しい自己に一鞭を加へて、また更に一步を進めるべきであります。茲に於て私共の久遠の理想は絶えず天の一方に目標となつて、私共に生の進路を示してくれます。ですからして、私共が毎日やつて居る蓄財・事業・教育・修養は何も肉體的生命を養ふためのものでもなく又物質の或ひは名譽の享樂に耽るためのものでもなく、また人を泣かせるためのものでもありません。只衷心の念願のまゝに生の一路を辿る生命の糧は外ならないのであります。

斯くして、生命の全力をプチ込んで生の一路を絶えず目標に向つて自己衷心の念願のまゝに精進して居る人の前には、悪は善と化され罪は轉じて愛行となり、困苦は轉じて幸福となります。又既に善であり幸福である人の前には、層一層にその善は益々善と化され幸福は益々幸福と轉ぜられてゆくのであります。親鸞聖人は自己の信仰を告白して、

「念佛者（念願に生きて居る人）は無碍の一道なり。そのいはれ如何んとなれば信心の行者（所

信に向つて生の眞實道を辿る人）には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずること能はず、諸善もおよぶことなきがゆへに無碍の一道なり。」

と、また「——しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきがゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに。」

と、お仰せられてゐますが、洵にこの文を拜承する度び毎に聖人が自己の信する久遠の目標に向つて只その念願の儘に、生の一路を精進せられた英雄的態度が忍ばれるのであります。言ひ換へると、人生の濁流の眞只中に衝き立つて然もその濁流のために弄ばれないで却つてその反對に自分からしてその荒波を左右して進まれたその宗教的生活の崇高であることに、寧ろ勵まされずにはゐられないのであります。ですから、只私共の生活の要は無量壽 Eternal Life に向つて Eternal の生活であらねばならないといふことになる譯であります。

#### □善導大師の宗教的生活表現

斯のやうにして、久遠の目標に向つて生の眞實道を辿る時には、その目標は常に一道の妙光を



放つて私共の進むべき道を照らすものであります。茲に於て私は善導大師の生活表現とも言つてよい、二河白道の譬喩を想ひ出すのであります。左にその全文を轉載しておきますと、

「人あり西に向つて行かんと欲するに百千の里ならんに、忽然として中路に二河あるを見る。一つは是れ火の河南にあり、二つには是れ水の河北に在り、二河各々闊きこと百歩、各々深うして底なく南北邊り無し。正しく水火の中間に一つの白道あり、闊さ四五寸許りなるべし。此道東岸より西岸に至るも亦長さ百歩なり。其水の波浪交々過ぎて道を濕す、其火焰も亦來りて道を燒き、水火相交々して常に休息することなし。

此人空曠の遙かなる處に至るに、更に人物なくして多くの群賊惡獸あり、此人單獨なるを見て、競ひ來りて殺さんと欲す。此人死を怖れて直に走りて、西に向ふに忽然として此大河を見る。……即ち自ら思念すらく、我今廻るも亦死せん、住るも亦死せん、去くも亦死せん、一種として死を免れざれば、我寧ろ此道を尋ねて前に向つて而して去かん、既に此道有れば必ず應に可度すべしと。

時に、東岸に忽にして人の勸むる聲あり、仁者但決定して此道を尋ね行かば必ず死難無し、若し住れば即ち死せんと。又西岸上に人有つて喚んで言く、汝一心正念にして直に來れ、我れ

能く汝を護らん、敢て水火の難に墮せんことを畏れざれと。

此人既に此遣彼喚を聞きて、即ち自ら正しく身心に當つて決定して道を尋ねて直進し、疑法退心を生さず。或は行くこと一分二分にして東岸より群賊惡獸等喚んで言く、仁者は廻り來れ此道險惡なり、過ぐることを得ずして必ず死せんこと疑はず、我等みな惡心をもつて相向ふこと無しと。

此人喚聲を聞くと雖も亦廻顧せずして一心に直進して道を念じて而して行く、須臾にして即ち西岸に到り永へに諸難を離れて善友と相見え慶樂やむことなし。

と、洵にこの二河白道の譬喩は生の眞實相が忌憚なく表現せられてをる物でありますから、私共は現實の生活から未來の生活へと及ぼして此二河白道の譬喩を味はつてみなければなりません。

### ■生の道程

さて、私共は久遠の過去を後にし永劫の未來を前にして、生の一路を辿つて居る時劫の旅人です。即ち現實主義、物質主義、機械主義、野獸主義、將た又宇宙的精神主義等とその主義目的か違つ



てをるに随つて、その道程に遠近のあるものであります。しかし、その目的の大小或は道程の遠近に拘らず、何等かの目的に向つて進んでゆく限りには其處にはどうしても苦痛、困難、煩悶のがれることはできません。ですからして、その希望憧憬が大きいければ大きほどに、またその道程が遠ければ遠いほどにそれに伴ふ困難、煩悶、苦痛は大きい譯です。仍で、無量壽の憧憬者にあつてはその目的は高遠でありその道程は無量劫に涉つて居るだけに、その途中で遭遇するところの艱難辛苦は又言ふべきであります。即ち、現實界より實在界へ、有限の岸より無限の岸へ迷の世界より悟りの世界に向つて眞善美の渴仰者として生の一路を辿つてをる宗教的生活者にあつてはその歩むべき道程は無邊際のものであります。いま「人あり西に向つて行かんと欲するに百千の里ならん」とは、正しくこの意味が表現せられて居るのではないでせうか。

ところが、また私共がその希望の彼岸に向つて進んで行く限りには、何時如何なる邪魔物のために妨げられ脅かされるかも分りません。よくあることですが、春先きなどになつて野道を散歩して居ると思ひもよらない處に川があつて、容易に先きへ行くことのできないことが往々にしてあります。人生も亦々斯くの如しで、私共の生の旅路には時々想ひもよらない邪魔物に遭遇することのあるのは、洵に「忽然として中路に二河あるをみる」といふ有様であります。ところが

その水火の二河は私共の胸の中に不斷に起つて居るところの貪慾と瞋恚との心の作用を表現したものでありますから、私共の處世上に起つてくる邪魔物は人がつくるのではない自分自らが作つてそれによつて自らが苦痛を招き煩悶をかもしてをるのであります。ところが、その邪魔物である「二河各々闊さ百歩各々深うして底なし」でありまして、私共が現實の岸に立つて理想の彼岸を眺めてをる時には、その理想は眼前近くに五色燦爛として輝いてをりますから、今にもその理想が勝ち得られるやうに思はれますが、それを勝ち得る程には私達の貪慾、瞋恚はあまりに深く根強いものであります。「又南北邊り無し」との言葉の如くに、理想の彼岸と現實の岸との間を無邊際に横たはつてゐて然も何處にも渉るべき橋は見出されない、だからと云つて無理からでも歩いて渡り過ぎやうとしても、河幅は僅か百歩しかないけれども底が限りなく深いためにとても渡ることはできません。

### □生の眞實道

と云つて、全然に渡るべき橋はないかといふとさうでもない。この現實の岸から理想の彼岸へ有限の世界より無限の世界へ一直線に僅か四五寸の白道が通じてをります。この四五寸の白道を



とほらなければ全然彼岸には達することはできないのであります。さればその白道とはなんであるか、曰く各自の宗教に生きることによつて作り出されるところの生の眞實道そのものであります。ですから、その生の眞實道さへ一直線に渡つてゆけば理想の彼岸へは到り得るのですが、それが私共には容易にできないことでもあります。どうかすると周囲の客觀的剌激に考慮するものですから、その生の眞實道は或る時は水に濕され或る時は火に焼かれるのであります。言ひ換へると、私共は順境に處すればそれ相當な、逆境に當面すればそれ相當な貪慾瞋恚がおこつて、それがために生の眞實道を踏み誤まつて水火の二河に墮するか、さもなければ見失つて苦痛煩悶の渦中に巻き込まれて了ふのであります。親鸞聖人は、「貪愛瞋憎の雲霧常に眞實信心の天を覆ふ。」とお仰せられてをりますが、それ等の意味が最も具體化して言ひ詮はされてあるのが「正しく水火の中間に一つの白道あり、濶さ四五寸ばかりなるべし。此道東岸より西岸に至る、亦長さ百歩なり、その水の波浪交々過ぎて道を濕す、その火焰も亦來りて道を燒き、水火相交々して常に休息することなし。」との言葉であります。

### □生の懺寂

さて、私共が周囲の事々物々に誤間化され或は殺されて仕舞つてをる間はいざ知らず、眞實の自己に觸れてみると私共お互ひの世界はやはり獨生獨死獨去獨來の寂しい世界であります。このものさみしい世界には私達お互ひを誤間化さうとし、又は殺さうとして、種々雑多の群賊惡獸は競ひおこつてきます。否、自分が誤間化され殺されてゐた間は善友であると力頼みにしてゐたすべてのものが、みな悉く眞實の自己に觸れてみるとそれが即ち恐ろしい群賊惡獸であつたことに氣付くのであります。仍で、それらの群賊惡獸の餌食にならうまいとして衷心の自己を生かしてゆかうとすればするほど、それらの群賊惡獸は益々左右後方から私をもものにしやうとして迫つてきます。もうかうなるとその恐ろしさに堪へられないで何れか一方に活路を得ようとしてもがくことはきまつて居ります。茲に於て私共は生の懺寂に泣かずにはゐられない絶對絶命の天地があらはれてくるのであります。しかし、人間は生の懺寂に泣くために生れてきたのでもなければ、また周囲の事々物々に誤間化され殺されるために生れてきたのでもないことを知つて、私共はやるせなくも亦更に弱々しい自分に一鞭を加へて、水火に濕され或は焼かれつゝある前方の四五寸の白道を、即ち生の眞實道を眞摯になつて慕進するのであります。曰く「此人既に空曠の迫かなる處に至るに、更に人物なくして多くの群賊惡獸あり、此人單獨なるを見て、競ひ來りて殺さんと



欲す。此人死を怖れて直に走りて西に向ふに忽然として此大河を見る。……即ち自ら思念すらく、我今廻るも亦死せん、住るも亦死せん、去くも亦死せん、一種として死を免れざれば、我寧ろ此道を尋ねて前に向つて而して去かん、既に此道あれば必ず可度すべし。』との文は、正しく私共が生きんとする努力に對して現はれてくる生の惱寂が表現せられてをるものゝやうに思はれます。

### □病的宗教生活者

さて、人々が衷心の自己を生かさうとしてその惱寂に泣き或は悶えて居る時が、その人にとつては最も危険な時であつて、只その寂しさ惱ましさのために自分を自分勝手に誤間化し殺して、さうしてその惱寂から免れやうとするから危険であります。否、誤間化し殺さうとはせないものであるけれど、その惱寂に堪へきれないために、之はかうすべきものなり、之はかう思ふべきものなりと律法的に又は思索的にすべてを解決して、そこに概念による安心立命の天地を構成して、それによつて生の惱寂から脱れ得たやうに思ふのであります。しかし、斯の様に概念の世界に安心をした時は最早や自分勝手に自分を殺し、又は左右後方から逼つてくる群賊悪獸の餌食となつ

てしまつた時であります。かう云ふ人々は、今の世にウヨ／＼として居る即ち骨董的宗教を弄んで居る宗教道樂者その人達であります。

### □眞の宗教的生活者

しかし、私は生の惱寂を癒する鎮痛劑として宗教を弄び、またそんなことをしてそれによつて安心立命をしやうとするのではなく、満足しやうとする骨董的宗教道樂者でもありません。自分が今現に生の惱寂に悶え泣いて居るのなれば何處までも泣き悶えて行かう、而してその弱々しい醜い私自身の上に佛陀所説の經典を凝視してゆかうとするのであります。言ひ換へると、佛陀所説の經典を道樂的に骨董的に弄ぶのではなくて、現實の生活の血となり肉となし得るまでにそれをかみ味はつてゆきたいのであります。その時寂しい世界の何處よりか、念願に生きよ、只念願のまゝに生の眞實道を慕進せよ、すれば必ず實在の世界に至ることを得て、久遠の憧憬を勝ち得ることが出来る、只汝は客觀的刺戟に考慮せないうで汝自身の念願のまゝに生の眞實道を辿つてゆくより外に死を免がれる道はないのである、との叫び聲が聞えて力づけられることは決つて居ります。即ち「時に東岸に忽にして人の動むる聲あり、仁者但決定して此道を尋ねて行かば必ず死



難なし、若し住まれば即ち死せん。」との言葉が正しく眞の宗教的生活者のみが聞くことのできる力強い釋尊の發遣の叫び聲であります。この叫び聲を聞いた私の生きんとする念願は層一層燃えに燃えますから、假令ひ生の惱寂に泣かうとも悶えやうとも、そのまゝで生の眞實道を慕進せずにはゐられないのであります。斯のやうに、自分の弱々しさに意氣地なさゝに醜くさに泣きながら、水に濡され火に焼かれつゝある四五寸の白道——生の眞實道——に一步を踏み出す時に「汝一心正念にして直に來れ、我れ能く汝を護らん、敢て火水の難に墮することを畏れされ。」との彌陀の喚び聲が聞えてくるのでありますが、この時のよろこびは逆も病的な宗教生活者には味ひ得ないよろこびであります。斯の様に、醜い姿をした弱々しい私自身が後ろよりおされ前より曳きづられながら、生の眞實道を一步々踏み出してゆくとともに、私自身の生命があるのであります。言ひ換へると、私共に生命のあるといふことは現實の生活の中に過去未來が攝せられてをる、そこに眞生命は活躍してをるのであります。

#### □處世の誘惑に陥ち入る勿れ

しかし、かやうになつたからと云つて決してお互ひは油斷をせないやうにせなければなりません。

ん。やはり人生の行路中にあるのですから數多の群賊惡獸は「かへり來れ、此道險惡なり、過ぐるを得ずして必ず死せんこと疑はず、我等みな惡心をもつて相ひ向ふことなし。」と喚びかへしてをります。洵にこの文はよく處世上の誘惑の聲色が描寫されてをるものと云はねばなりません。即ち私共は時々、人生は僅かに五十年ではないか、それも死んで了へばまるで火の消えたやうなものなのに、何もそんなに四角張つて道を求めるの、いや何んぢや彼ぢやと苦しんでまで騒ぐ必要はないではないか、それよりも思ふ存分愉快に日を送ることが人間に生れてきた所詮ではないか、モウよい加減にしておいてはどうです。僕等は決して悪いことは言はないから……。

などと云ふやうな誘惑の聲を往々にして聞くことあります。併し處世上の誘惑はそんな手柔かなものではありません。それこそ群賊惡獸は私共をものにしやうとして、私共のすきこのむ姿をして又はすきこのむことを言つて、外面からと内面からと兩方面から肉迫をしてきてをりますから、どうか油斷をしてもものにしやうとかゝつて居るその誘惑の掌中に陥ち入らないやうに氣をつけねばなりません。

ですから、私共は細心の注意を拂つてそれ等の魔の手に囚はれないやうにして、男子は男子として、女子は女子として、親は親とし子は子として、又貧乏人は貧乏人ながらに、富者は富者な



がらに、貴者は貴者ながらに、賤者は賤者ながらに、天上天下唯我獨尊の體驗者として否實行者として、また阿彌陀經の「青色青光、黄色黃光、赤色赤光、白色白光」のらしい生活者として各自に生の眞實道を眞摯にその所信に向つて力強く一步々々を踏みしめてゆく相こそ、眞の宗教的生活者の態度であり生活であります。このやうな生活者の前途には「永く諸難をはなれて、善友相見て慶樂やむことなし。」の生の世界が運命づけられてをるのであります。即ち、言葉を換へて云ふと「諸上善人俱會一處」の世界が實現せられるのであります。

## 六 魂に糧を與へよ

昔から人生を旅に譬へることは、最早や人々のよく知つてをる事柄でありますから、何も今更茲にこと新らしく述べる必要はないやうなものです。しかし現今の社會の混亂状態をみては層一層徹底的にこのことを力説しておく必要があらうと思ひます。

### □ 人生の旅路

さて、私共が旅びをしやうとするには先づ身體を丈夫にしてにおいてウント腹を拵らへ草鞋で足をひきしめて後、行く／＼山川の景色を稱美しながら旅をしてこそ旅も面白いのであります。若し身體が弱かつたり腹が減いてゐては道中の眺めも何もあつたものではない、必ず途中で倒れることは決つてをります。人生の旅も全くこれと同じであつて、私共は久遠の過去を後にみて永劫の未來を前にして今は人生の野中道を辿つてをる時却の旅人であります。さうして、その道は何時も平坦で且幅の廣い歩みよい道ばかりであればよろしいが、先きにも申しておいたとほり、時には險惡な道も歩まねばならず、又險阻な山路も越えねばならず、或時はまた底深い大河を渡らねばならない事もあるであります。ところが、また單獨なのをみて多くの群賊惡獸は競ひおこつてくるであらうし、又私共の行く先きには到るところに誘惑の魔の手がのばされてをるのでありますから、思へば人生の旅ほど私共にとつては恐ろしい且危険なものはありません。ところが、がもし靈體が弱かつたり魂の腹が減いてゐたならば、そんな危惡な道をどうして旅びすることができませう。必ず途中で群賊惡獸の餌食になつて了ふか、よし假令殺されなすんだところが不知不識の間に誘惑の掌中におち入つてをりますから、いづれにしたところが弱い靈體では逆も完全に人生の旅を終へることはできないのであります。



### □ 人生の行路病者になる勿れ

ところが、靈體が弱つてゐた爲めに人生の行路病者となつたり、また群賊惡獸の餌食となつて了つたり、又は魂の腹が減つてゐた爲めにマンマと誘惑の掌中に陥ち込んだ人々を、私どもは毎日の新聞紙上に於てみるばかりではなく、到るところでその悲惨事を實地みたり聞いたりするではありませんか。ですから、私共は平常に魂に糧を與へて靈體を丈夫に養ふてゆくことに心を用心なければなりません。にも拘らず、世間の多くの人は最後には火にくべて灰にして仕舞ふこの五尺内外の肉體ばかりを大切に可愛がつて、無量永劫に使つてゆかねばならないその靈體をそれ程迄に大切に可愛がる人の勘くないにおどろかすにはゐられません。言ひ換へると、世間の多くの人は肉體ばかりに糧を與へて養つてゐるが、靈體に糧を與へて養はないものですから、肉體ばかりは一人前に發育はしてゐるけれども肝腎の靈體は少しも發育をしてゐませんから、まるでちんばのやうな不具者かたわの人間が澤山にウヨウヨとして居るから困ります。ところが、誰もそんな不具者になることを好む者は一人もありませんが、しかし、人が不具者になつて居れば自分も不具者になりたくなるのか、それとも不具者にならなければ交際つぎあひがわるいのか知りませんが、

とかく成りたくもない不具者に自分勝手にして居るのであります。さうして、そんな不具者の人間がより集まつて、イヤ一村の充實ぢやイヤ一國の發展ぢやとか何んとか云つて騒いで居ります。が、逆もそんなことは言つて騒ぐだけのものであつて到底望み得られることではありません。それよりも先づそんな期待は止めにして、よろしく魂にウント糧を與へて靈體を一人前に發育させることです。言ひ換へると先づ各自に自分の不具者をなほすことです。すれば自然と一村の充實一國の發展は實現されてゆきます。敢て人のことを云ふばかりではない、先づ自分等が魂に糧を與へて靈體を完全に發育させることを心懸けねばなりません。

### □ 魂の糧とは何か

さて、世間では、教育家や將た又識者達が口角泡を飛ばして倫理道德を鼓吹して居るにも拘らず、世間の人心は段々と浮薄になり日と共に俗悪になつてゆき、みるも恐ろしい聞くも身の毛がよだつやうな大犯罪が續々と増加してゆきつゝあるのは、そも／＼何處に原因をしてゐるのでありませう？ いま心靜かにその起因するところを考へてみますと、それにはいろ／＼あるけれど先づ私の思ふところでは、世の倫理道德は私共が人生の旅に於て歩んでゆくところの既成の人間



道であります。しかし、どれほどに立派な道があつたところが又如何程完全な道を教へられたところが、肝腎の靈體が弱かつたり魂の腹がひもじいやうではどうしてその道を歩いてゆくことができませう？ ですから、道徳的にも亦法律的にも總ての犯罪者は靈體が弱かつた爲めに、又は魂の腹がひもじかつた爲めに、人生には倫理道徳といふ立派な既成の人間道があるにも拘らず、その道をよう歩み得ないで途中で行き倒れをしたところのお氣毒な人生の行路病者であります。また、世間の人心が日と共に浮薄になり俗悪になつてゆくのは、魂に食物を食べて靈體を丈夫に養つてゆくことを忘れてをる人々が多くなつてゆくために、それらの人々が自然と誘惑の魔の手にわき道へひきづられてゆく人々が多くなつてゆくからであります。ですからして、どれほどに教育者によつて又識者達によつて倫理道徳が鼓吹せられ、人間道が指示せられてみたところが、それが靈的生命を養ふ糧でない限りには何時の時代がきても人心の向上といふ現象は逆もみられなからうと思ひますが……。茲に於て、私は靈的生命の糧であるところの宗教が如何に人生には必要であるかを力説する次第であります。そうして此の宗教の糧によつて肉體を可愛がり養ふより以上に靈體を可愛がり養つて行くべきことを、私は力説するのであります。

### □宗教は骨董品にあらず

斯の様に、宗教の必要を力説する私は、何も古代の生産物であるところの骨董的宗教を紹介するのでもなければ、随つてその骨董的宗教をその儘に鵜呑みにせよと云ふのでもありません。即ち、宗教が靈的生命を養ふ糧であるからと云つて無闇に宗教を鵜呑みにしてをると、それが爲めに却つて食傷をしたり、又腐敗をしてをるものが中にはあります故、それがために却つて靈體は病氣にかゝるおそれがありますから、私共の現實生活に於て靈體の血となり肉となるところの宗教は最も新鮮な活宗教でなければなりません。と云つて、またそれを鵜呑みにせないやうによく噛み味はつてゆくことを心懸けてゆかねばなりません。

すべて、私共が創造進化の道程を辿つてゆかうとするには過去の進化の歴史が生み出したところの、釋迦の宗教も亦クリストの宗教も、それ等はみな過去の骨董品であるからして、そんなものが私共の現實の生活の周圍に幾百万幾千万と列べられたところが、創造的進化の道程を辿らうとする私共にとつては何等の價值も見留めることはできません。この意味からして釋尊の宗教は釋尊その人の眞理であり生命の糧であります。またクリストの宗教はクリスト自身の眞理



であり生命の糧であつて、私共にとつては眞理でもなければ又生命の糧でもなからうと思ひます。ですから、私共の現實の生活の血となり肉となるところの宗教は、釋尊の宗教でもなければクリストの宗教でもなく、又隣人の宗教でもなく私自身の宗教でなければなりません。言ひ換へると、宗教そのものは釋尊やクリスト等の專有物ではなくして、私自身も宗教をもつて居ります。かう云ふと、何んだか無意味に云つてをる様に又は奇を好んで云つてをるやうに聞えるであります。が、私は決してそんな氣持で云つてをるものではありません。その理由は、宗教そのものを釋尊やクリスト達の專用物かのやうに心得て、佛教を又は基督教を現實の生活から全然にかきはなして仕舞つて骨董品的に取り扱つてをる、否、骨董品的に取り扱ふことが宗教の本領であるかの如く心得て居る、宗教道業者に對して斯く言ふのであります。しかし、斯の様な誤解を惹き起す原因は、世の多くの人々が宗教そのものゝ眞意義を了解せない爲めに、只宗教と云へば一も二もなく先天的に骨董品的に取り扱はねばならないものゝやうに決め込み、また假令さう思つてゐない分が臨終にさしせまつた病人に醫者が注射する其注射と同様に心得て人間が死ぬ時に入用なものゝやうに思ひ、又葬祭をする一つの道具視してをるのが先づ多くの宗教に對する觀念であります。否、多くの人々と云ふよりも此の觀念は今日の青年人士に最も濃厚であらうと思ひ

ます。しかし、宗教はそんな注射や鎮痛劑や道具等と同一視すべきものではありません。此人生の舞臺に於てピチ／＼として活躍して居る私共お互ひが靈體を養つてゆくには無くてはならない生命の糧なのであります。即ち、肉體は米や麥で養つてゆくことができても靈體は米や麥では養つてゆくことができませんから、私共が現實に於て生活をしてゆくには肉體を養ふ米や麥も必要ではあるけれども、猶それ以上に必要缺くべからざるものは靈體を養ふ糧であるところの此宗教であります。言ひ換へると、宗教といふものは私共の現實の生活を離れて存在するものでもなければ、また存在し得るものではありません。若し存在し得たならばそれこそ無用の長物であります。

### □活宗教

先づ、その理由を佛教について申しますならば、佛教とは佛になる教、即ち私共が生の眞實道を通つて最後無量壽 Eternal-life を獲得することによつて光明の國の生活者となるところの實行方法が説き示されてをるのが佛教であります。換言するならば、佛教とは釋尊自らの現實生活に於て靈的生命的血となり肉となつた自らの宗教によつて無量壽 Eternal-life を獲得せられた、そ



の自らの實驗上からしてその實行方法を教へられてをるものが所謂佛教である。ですからその實行方法は、決して理論的に走つたところの假空的なものではありません。にも拘らずその佛教——佛になる實行方法——を釋尊その人の專賣特許のものゝやうに思つて、自分達の現實の生活には全然無關係なものゝやうに思つて、それを古代の珍品として弄んで居ることが佛教或は宗教であるやうに思つて居る人が多いやうであります。しかし、そんな佛教——宗教——が如何程澤山にあつたところが、私共の現實の生活はもとより來世の生活にも邪魔にこそなれ何んの益することもありませんから、そんなものならば寧ろ博物館の陳列棚にでもしまつておくのがよからうと思ひます。故に、佛教は決して釋尊の專有物ではなくして私自身の佛教でなくてはなりません。この私自身の佛教——文字の佛教言葉の佛教ではなくして佛になる現實方法そのもの——が現實の生活そのものとなる時にそれが即ち宗教であります。随つてその宗教は釋尊のものでもなければクリストのものでもなく、又親のものでもなく子のものでもなくて私自身の宗教なのであります。この宗教こそ眞に私自身の靈體を養ふ糧でありますから、喰へば血となり肉となるところの最も新鮮な活宗教であります。この意味からして私は佛教の經典その物に無限の價値を見留ることができるのであるけれども、只單にそれを經典としてみるとときにはそれこそ過去の進化の歴史

が作り出した一つの骨董品とにしかみることができないから、マア……そんなものは博物館行きとせなければなりません。

嗚呼、釋尊一代の說法は私共に靈體を育てる育兒法を教へ給ふたのであります。ですから、この方法によれば私共は最後眞善美の完成者となつて、久遠の憧憬——無量壽——を勝ち得ることができるのであります。



## 靈魂篇

### 一 靈魂に對する誤謬的ニ見解

前篇に於て申したとほり、私共人間は靈體と肉體との二つの部分から成りたつてをりますが、そのうち肉體と云ふ方の部分は靈體の部分の部分を育てるために或期間必要なだけであつて、その期間が過ぎ去つてしまへば最早や益にたゞなくなるからして焼いて灰にして仕舞ふより外に仕方ありません。だから私共は、肉體も成る程靈體を育てるためには必要缺くべからざる資本であるから充分に養つてゆかねばならないが、猶それ以上に靈體を育て、ゆくことに心掛けねばなりません。すれば、全體その靈體とはどんなものであるかと云ふことを、話しが少し學理的方面に互るけれども、それを本篇に於て聊か述べてみたいと思ふのでありますが、その以前に先づ靈魂と云ふものに對する間違つた思想が二つあることを申しておかうと思ひます。

### □ 原始時代の靈魂思想

さて、近頃は靈魂といふ問題について人々が大へんに心を傾けるやうになつてきたためせうか、最近になつて心靈哲學と云ふ一つの新科學が大へんに隆盛になりつゝありますが、しかし此靈魂といふ問題は未だに千古未決の懸案となつてゐて、東西古今の學説は區々まち／＼であります。即ち有なりといふ説と無なりといふ説とは、恰も幾何學の平行線のやうな状態にあります。しかし、これは無理ならんことであつて此問題ばかりは全然我々の經驗の圏外に投げだされてゐるところの一大神秘であるために、誤謬的な見解もおこし易いからであります。

しかし、いま我々の科學的憶測をもつてしますと、靈魂といふものは原始時代の人々が想像してゐたやうな、火の球の如き又は風の如き一の個性的な存在物でないと云ふことだけは論定しても差支はなからうと思ひます。併し全然に科學的な思想のなかつた原始時代の人々にとつては、人間が生て居る間は心の儘に言動しまた行爲してゐたものが、然も一旦死んでしまふとその身體の形態は生きてゐた時と少しも違はないにも拘らず、少しも言動せなければかりでなく今がいまゝで温かつた身體は冷たくなり、呼吸してゐたものが呼吸せなくなつたのをみては、靈魂といふ一



つの個性體が身體の中にあつたものがぬけ出したために少しも言動せなくなつたのであるが、しかしそのぬけ出した靈魂はやはり依然として思考したりまた言動したり等して、何處にか存在してをるものであると思はれたのも無理ならんこととあります。ところが、この思想は科學の進歩した今日の時代においてもやはり古代の遺物としてその命脈をつないでゐて、極く低級な思想の人々には相變らず信じられてをるやうであります。しかし、斯様な靈魂の存在は生理學の見地からして云つても先づ否定せなければならぬのであります。いま假りにこの個性的な靈魂が人間の肉體といふ殻内に存在してゐて、それがすべての精神作用の器官であると假定して推論してゆきますと、我々の眼は視力の器官であり心臓は血液循環の器官でありますから、それ等の器官が破壊してしまふと我々の視力作用も血液の循環作用も停止して仕舞ふであります。これと同じ理由であつて、ヘツケルは我々の精神作用の器官を大脳皮中にあるところのフロネマ細胞であると云つてをるからして、死によつてこのフロネマ細胞が破壊せられるならばその精神作用も消滅してしまふべき道理であります。またこの反對から云ふと、精神作用が休止したと云ふことはその器官が破壊してしまつたことであるからして、原始人類が想像してゐたやうに果して個性的な靈魂が精神作用の器官であるとすれば、死によつて精神作用が休止したのなればその器官

である靈魂もやはり解體してしまつたのでありますから、死はその個性的な靈魂が肉體の殻内からぬけてたものであつて、その脱出したところの靈魂はやはりその個性を保つて感覺し又は思考し行動するものであると云ふ迷信的な思想は最早成立せない譯であります。

#### □唯物論者の靈魂論

さて、靈魂といふものは個性的な存在物ではないと云ふ事だけは、先きに述べた道理によつて明かになつたことであらうと思ひます。されば、靈魂といふものは唯物論者が「人間の靈魂は有機的活動の副産物として生じたる自己意識に過ぎない。」と云つてをることが果して眞實なのでありませうか？ この事についても我々は一應考へておく必要があらうと思ひます。果して人間の靈魂がそのやうなものであるとするならば、人間の死は三世に亙つての萬事の終局をつける譯であるからして、死は丁度火の消えたやうなものであつて最早何物も残らないと云ふ結論になります。否結論と云ふよりも事實に於て唯物論者はそのやうに言ひ又思つてをるのであります。併しこの思想は現實の生活に影響することが尠くなからうかと思ひます。その譯は、人間の萬事が死によつて三世の終りをつけるならば、恰も葉末に舍る露のやうに何時死ぬか分らない脆い生



命を持つてゐて、學問をしたところがどうしやう、巨萬の富を積んでみたところがそれを墓場の穴にまでも持つて行けるものでもなし、又政治家となつて國政の衝にあつてどれ程な名譽を勝ち得てみたところが何んの益にも立つものではない。又四角四面になつてイヤ義理ぢや、イヤ人情ぢや、イヤ道德ぢやなどと云つて何も騒ぐ必要もない、却つてよい行ひの仕損である。よろしく自我的慾望の荒れ狂ふまゝに機械主義に走るもよし、また肉享樂主義に走るもよし、また物質的享樂主義に走るもよからう、只自分さへよければそれでよいのである。何も國家や、社會や、親や、兄弟や、朋友やと云つて何んの顧慮する必要があらう。と云ふやうな氣持ちに凡ての人が若しもなつてしまつたならば、人間社會は一つの修羅の巷と化するでありませう。果して私共はそのやうな社會を欲求することができるでありませうか？

### □進化論より觀たる唯物論者の靈魂論

次ぎに、この唯物論者の靈魂に對する見解を進化論の上からして推究してゆきますと、宇宙が今日かうして存在してをるといふことは過去幾億万年の進化の歴史によつて現存してをるものがあります。ところが、この宇宙を構成して居る地球のみについて考へてみても、この地球上に棲

一瞬も、三千方人

息して然も宇宙を構成して居る一分子である無数の生物は斷え間なく死に歸して居るだらうと思ひます。その譯は、單に人間のみについて死の統計をとつてみても一分間に世界の人間が六十人づつ死んで居ると云ふ事でありませうから、これをすべての生物の上についてその死の統計をとるならば、實に莫大な數字となつて現はれてくるであらうと思ひます。また更に之を全宇宙の生物について死滅の統計をとるとすると、僅かに一分間の間ではあるけれども到底數字に現はすことのできない程に澤山の生物が死に歸しつゝあるであらうと思ふのであります。仍で、いま若しこの事實を過去に及ぼして考へてみるならば、全宇宙にはどれほど澤山な生物が生存してゐたのか知らないが、過去幾十億万年の星霜を経て今日に到るならば最早宇宙には今日このやうに澤山な生物は生存してゐなからうと思ひます。随つて、進化の現象のあるべき道理はないけれども、併し過去の進化を説明するものは唯物論ではありませんか。すれば、事實がこのことを許さないばかりではなく唯物論者にとつては大きな矛盾的な持論であると云はねばなりません。

しかし、今一應この唯物論者の見解を事實と假定して未來に及ぼして今度は考へてみると、先づ今日宇宙間に現存して居る一切の生物は過去に於て死の毒牙をのがれ得たところのものであるとせなければならぬが、しかし死は矢張り過去と同じ勢をもつてすべての生物の上に逼つてき



てをるのであります。すれば、宇宙が茲幾千年か幾万年かの星霜を経る間には、この宇宙間の生物は悉く死によつて葬り去られるべき道理であります。さうなるとこの宇宙間には一として生物の影を見留めないからして、最早宇宙は進化の現象のあるべき道理はありません。しかし、進化の現象は宇宙そのもの、生命であるからして、その生命である進化の現象がなくなれば宇宙は最早死灰同然のものでありませう、否構成分子の生物が悉く死滅してしまふといふことは、最早宇宙の滅亡に外ならないのであります。しかし、事實に於ては宇宙は時間的にも空間的にも無限の生命をもつてをるものでありますから、茲に於て私共は一つの矛盾を見出すのであります。それは進化の現象は宇宙的原理であり宇宙的生命であるにも拘らず、唯物論者の見解を事實と假定して推論してゆくと、この宇宙は進化して居るのではなくて退化して居ることになるからであります。斯の様に、唯物論者の靈魂論を事實として過去に及ぼしても亦未來に及ぼしても進化の原則に違反するものでありますから、靈魂といふものは有機的活動の副産物でないことが分るばかりではなく、又未來の進化は靈魂の不滅によつて成立するものでありますから、随つて人間の死は唯物論者の云ふが如き火の消えたやうなものでないと云ふことも明白になりませう。

### □ 物理学より觀たる唯物論者の靈魂論

次に「人間の靈魂は有機的活動の副産物として生じたる自己意識に過ぎない。」と云ふ唯物論者の語を物理学の方面から考察してみますと、彼の心理学の大家であつたカームス博士は、人間の精神作用と腦髓との關係を太陽の光線とプリズムとの關係のやうなものであると云つてをりますが、このカームス博士の語は只單に精神作用と腦髓組織との關係に止まつてをるからして、人間の精神作用即靈魂であると云ふ誤譯を生ぜしめないとも限りません。しかし、カームス博士の實意は人々に靈性の妙諦を知らしめんためであらうと思ひますからして、今少時この語について説明を進めてゆかうと思ひます。

扱て、日光をその儘プリズムにあてると虹のやうに赤・橙・黄・緑・青・藍・紫(R・O・Y・G・B・L V)等の七色よりなつてをる色帯 Spectrum が現はれてくる此現象を、即ち單色光 Monochroma tic-light が種々なる色に分解することを物理学では光の分散作用と云つてをりますが、斯の様なことぐらゐは物理学を少し學んだことのある人ならば最早承知のことです。さて、この光の分散作用と云ふ現象が即ちカームス博士の云つてをる人間の精神作用であつて、唯物論者の云



つて居る自己意識と云ふものに相當するのでありませう。さうして、その光の分散作用に依つて現はれたところの色帯 Spectrum そのものが人間の一切の言語、思想、行爲等に相當するものでありませう。又そのプリズムは廣義に於ては人間の生理的肉體を云ひ狹義に於ては有機的腦髓組織に相當するものであると云ふことができるでありませう。而して、その單色光(日光)なるものが正しく靈魂に相當するものであると云ひたいのであります。ですからして、唯物論者が有機的活動の副産物として生じたる自己意識そのものが靈魂であると云つてをすることは、光の分散作用そのものが太陽の光線であると云ふのとその愚は少しも違ふところはなからうと思ひます。即ち假令光の分散作用を起さうとしても太陽の光線がないことには分散作用が起る筈はないからして、随つて光の分散作用は日光を離れては存在することはできないが、併し日光は假令光の分散作用を離れても嚴然として獨立的に存在し得るではありませんか？ 言ひ換へると、唯物論者は太陽の光線がなくてもプリズムさへあれば何時でも色帯 Spectrum は現はれるものであるといふのと、この靈魂論に對する見解は少しも異らなうと思ひます。しかし、このやうな持論は物理學に於てゆるされなければかりではなく、宇宙の眞理が許さないところでもあります。されば唯物論者はまた言ふでありませう！ 即ち、人間は頭腦が健康であればこそ意識も亦明

確なのであるからして、若し一度腦髓が犯されてその神經が破毀せられるならば、どれほど聰明利發な人でも意識は忽ちに昏迷感亂して狂人ともなれば又痴人ともなるからして、靈魂は有機的活動の副産物である自己意識を離れては存在し得ないからして、靈魂そのものも俱に昏迷感亂する道理である。と云ふかも知れないが之とても餘り感心した持論ではありません。その故は、スベクトルが完全に現はれないと云ふのはそのプリズムに故障があるためであるやうに、人間の言語思想行爲等が常規を失すると云ふことは、その腦髓組織に故障があるために意識作用が完全に行はれないと云ふところに起因してをるのであります。此處までは唯物論者の言つてをすることも少しの間違ひもないけれども、併し意識作用に故障ができたからして靈魂その物までにも故障ができたこととはできないでありませう。それは丁度光の分散作用が完全に行はれないと云ふのはプリズムに故障のあることは勿論、そのプリズムの故障と云ふことがそも／＼太陽の光線に故障があるからであるといふのと少しも違はないのであります。併し、光の分散作用が完全に行はれないと云ふのはプリズムの故障そのものに起因してをるのであつて、日光そのものは依然としてもの完全な日光であります。之と同じやうに、假令意識作用は狂亂して仕舞つてもそれは腦髓組織に故障ができたからであつて、靈魂そのものにも故障ができたこととはできない



のであります。であるからして、靈魂と云ふものは肉體には全然左右せられるものではなくて常住不變に嚴然として存在してをるものであつて、それが只腦髓と云ふ有機體を通じて現實界に現はれた時、其處にすべての意識作用が起つて人間がいろ／＼に思想し言語し行爲するのであります。であるから、假令プリズムは破壊してしまつても日光は依然として常住不變に存在してをります。しかし、光の分散作用とスペクトルの現象とはなくなるやうに、人間の肉體が死によつて解體してしまふと、その意識作用と一切の思想行爲言語等は肉體と俱にやはり消滅してしまふけれども、靈魂そのものはやはり依然として吾々の知り得ない方法をもつて何處にか嚴然として常住してをるものであります。この意味に於て、心理學では「人間の意識は有機體を離れては存在せず。」と云つてをることは眞理でありますが、併し唯物論者が「人間が死ねば火の消えたやうなもので何物も残らない。」と云つてをることは、どうしても眞理として受け入れることはできないのであります。

### □死は斷滅にあらず

成る程體制が解體してしまふと我と云ふ身體からだはなくなり、又活力が消失してしまつては意識作

用は残らないけれども、死は萬事の終りであると云ふことはできません。その譯は、物理學に於ける物質不滅の原理及びエネルギー不滅の原理によると、假令體制は破れてもその組成原形質は依然として存在し之と表裏してをる個々の活力といふものは依然として存在してをるものであつて、只その外形が變化するのに過ぎないのであります。又人間の身心が不滅であることはこればかりではありません。親より子、子より孫と繼續してゆくことは、實に私共人間の身心が永久的に持續されてゆく現象を物語つてをるものと云はねばなりません。また古代の英雄聖賢君子の芳名は人の心から心へと傳へられて、猶今日の人々を間接的に指導してをるではありませんか。これなども亦人間の身心の不滅を物語る一つであると云はなければなりません。故に「死は斷滅なり」と云ふ唯物論者の持論も成立せなくなる譯であります。

斯の様に、靈魂と云ふものは唯物論者の云つてをる如きものでもなければ、又原始人類が想像してをつた如き個性的な存在物でもないとする、果して靈魂と云ふものはどんなものでありませう？ 實に奇々妙々なものは私共の魂—靈體—であります。以下このことについて、聊か宗教哲學と佛教の心理學との二方面からして研究の歩を進めてゆかうと思ふのであります。



## 二 宗教哲學による人間の解剖

人間といふ宇宙間の一生物を宗教哲學の刀を執つて解剖研究してみると、宇宙的の幾等かの組成本因が過去世の行爲の情性力——業——によつて一時的結合して人間といふ一つの個性體を組織してをるのであります。而して、その組成體であるところの人間が斯の様に靈妙な働きをする事ができるのは、その組成本因が分業的に各個の本能性に基づいて秩序整然として活動をしてをる爲めに、それを外的に觀ると如何にも肉體の殻内に靈魂と云ふ一つの個性體が存在してゐるかのやうに、即ち常一主宰の實我ともいふべきものが内在してゐてそれが思想させたり行爲させたりするかのやうに思はれるのであります。併し、それ等の組成本因を一々分解し去ると云ふと、最早其處には人間といふ一個性體は存在せないのであります。随つて、人間と云ふものは幻影的なものであると云ふことが分るのであります。

扱て、この意味からして人間と云ふものを説明するのには一臺の機關車に喩へることが最も適當してをるだらうと思ひます。それは、先づ一臺の機關車が機關車としての完全な働きをする爲

めには、すべての部分の機械が完備してゐなければならぬことは勿論であるけれども、亦其處には原動力となるところの蒸氣も必要であればその蒸氣を機械に働かせるところの人間も必要であります。併し、假令それらのものが完全してゐたところが機關車が運轉する爲めには線路も必要であります。一個の人間も亦これと同じ原理によつて斯くは靈妙な働きをすることができません。所謂人間の廢物ができても先づ人間としての完全性は失はれてしまふ譯であります。所謂人間の廢物ができるといふことになりません。さて、先づ順序としてこれだけのことを申しておいて次ぎにはその組成本因、即ち人間を構成してをるところの諸要素を圖示しておきませう。





右に列擧したところの七種の組成本因によつて一個の人間ができ上つてをるのでありますが、それらの七種の組成本因を宗教哲學では七性本因といふ名稱をもつて言ひ詮はしてをります。仍で、いま此組織状態をみると私共人間は靈體と肉體との二つの部分から成り立つてをることが分ると共に、その靈體の部分は更に生滅的な部分と不生滅的な部分とから成りたつてをることが分るであります。

### □不生滅的靈體の分解

#### △宇宙魂

擧て、不生滅的の靈體を組織してをるうちの *Atma* —— 宇宙魂 —— と云ふ本因は、萬物の原動力となるところの一大生命力でありますから、誰とか彼とかの差別もなく又我々人間のみが専有してしまふべきものでもなくて、上は佛より下は最退化的の有情物はもとより、草木瓦石に至るまでが悉く具有して居るところの普遍的なものでありますから、随つて黒とか白とかの色彩もなく又方圓の形もなく、と云つて大かと云へば大でもなく小かと云へば小でもなく、然も有情物及

び非有情物に通じて嚴然として實在して居るところの神的な本因であります。それは丁度、太陽の光線が地球上の一切の萬物を平等に照らして、然もすべての生物が生きてゆくについての一大生命力であるやうな状態にあるところの宇宙的精神であります。故にこの宇宙魂の上からして一切の萬物を観るならば、萬物の靈長だなんて威張つて居る吾々人間も、牛も、馬も、草も木も、瓦も石も、亦空間に浮遊して居るところの一微塵もみな悉く宇宙を構成して居る一分子であると、にも、又宇宙魂を具有して居るのでありますからして、我々人間とは同等の資格を持つて居る譯であります。しかし事實は我々人間と路傍にころがつてをる瓦や石と、又は草や木等と同一視することができないのは勿論ではありますが、何ぞそれ等のものが我々と同じやうに宇宙魂を具有してゐながら各々その能力を異にしてをるかと云ふと、それは七性本因の結合状態が各々違つてをるからであります。

さて、それはとも角も今私どもが心靜かに自分と云ふものを内觀してみますと、先きにも述べたところの自己の價値と云ふことゝ生の責務と云ふことゝが最も痛切に感ぜられるであらうと思ひます。即ち如何に自分の身分が卑しいものであつても亦貧乏で何んの資力もない者であらうとも、その崇高な神の宇宙魂を具有してゐて然もこの宇宙的一分子として現存して居る限りには、



宇宙が存在するについては物の数でないやうな自分であつても何等かの爲めに必要缺くべからざるものであればこそ斯うして生存して居るのであります。故に、若し自分一人がこの宇宙的存在から脱してしまつたならば宇宙はこんな状態では存在して居ることができないで必ず瓦解してしまふに相異ありません。併しこれは一つの憶説に過ぎませんが、假令それが憶説にしたところが如何に自分と云ふ者が此宇宙が現存してをる事については大切な位置を占めて居るか、又價値のあるものであるかと云ふ事を知ることができ得るでありませう。又私が宇宙魂を具有してをるからには、大小の違いこそあれ宇宙は私であり、私は宇宙その物であると云ふことができるであらう。故に、私一人の向上は全宇宙の向上であり、私一人の墮落は宇宙そのもの、墮落となる譯であります。又これを小さくして考へてみますと世界、國家、一縣、一郡、一村そのものが皆悉く私一人の進退如何によつて運命が確定せられると云ふことになります。言葉を換へて申しますと、宇宙そのもの、進化向上退化向下は勿論のこと小にしては國家そのもの、興廢存亡は偏へに私一人の雙肩にありと云つても無理ではなからうと思ひます。併し、ほんたうに此處迄自分と云ふものを自重した然も責任觀念の厚い人が今日の世に幾人あるでありませう？ この意味からして釋尊の

### 『天上天下唯我獨尊』

のお叫びが滲々と味はれるではありませんか、よろしく私共はこの天上天下唯我獨尊の體驗者として、否實行者として大いに自重的生活の態度をもつて社會に奉仕すべきであります。

#### △靈性靈魂

扱て、次ぎには不生滅的靈體を組成してをる Buddha —— 靈性靈魂 —— について述べておきませう。この靈性靈魂 (Buddhi) は先きに述べておきました宇宙魂 (Atma) の機關であつてその性質は善でもなく悪でもなく所謂佛教で云ふところの無記性のものであります。して、この Buddha と Atma との關係は、恰も Atma が機關車の原動力である蒸氣に相當するものであるならば、この Buddha は機關車に備へつけてある機械に相當するところのものであります。併し、假令原動力であるところの蒸氣があつたところが又完全な機械が取りつけてあつたところが、その蒸氣を機械に働かせるところの人がゐなければその機械は機械としての働きをせないやうに、假令 Atma が Buddha と結合状態にあつても、その結合體がある他の本因によつて意識化されなければ Buddha はその本能性を發揮することのできないのは彼の機關車の機械と同じであります。併しこのことについては段々に明瞭になつてゆくことでもありますから、その性能と云ふことについ



てはこれぐらゐに止めておきます。

ところが、いま私共人間の靈體を組成してをる各本因について考へてみるのに、先きの *Atma* (宇宙魂) は普遍的な本因であり又次に述べるところの他の五本因は隨從的なものでありますから、全然獨立的な本因はこの *Buddhi* のみであります。故に、この本因が人間が靈體を組成してをるところの根本本因とも云ふべきものであります。言ひ換へると、私共の魂の本素とも云ふべきものでありませう！ されば、この *Buddhi* は生滅の原則に左右せられないところの永久の實在物であるか否かと云ふことになりましたが、人間を構成してをる諸本因のうち於て *Atma* は未來永久に持續するところの本能性をもつて居るにしても、それが專有的な魂でない限りには先づ圈外におかなければなりません。すれば七性本因と云ひ條結局は他の六本因であります。そのうちこの *Buddhi* を除いた他の五本因は、すべて變化状態にあるところの生理的肉體にたよらなければ、その性能をあらはすことができない性質のものであるからして、永久の實在物であると云ふことはできません。併し、この *Buddhi* のみは他の五本因のやうに變化状態にある生理的肉體にたよらなくとも、その性能を持續してゆくだけの本能性をもつてをるものでありますから、生滅の原則に左右せられないところの永久の實在物であると云ふことができる譯であります。

#### △靈魂の本質

扱て、次ぎには *Manas* と云ふ本因について述べておかねばなりません。この本因の本能性は自我。或は自我たるところの觀念であつて、先きに意識的本因と云つてきたのはこの *Manas* の謂であります。ですからして、この本因は他の本因を意識化するといふ働きをもつてをるのであります。併し、假令意識化する働きはもつてをるにしても單獨的に存在してゐては意識化する働きはございませんから、先きに隨從的な本因であると云つておいたのであります。ところがまたこの *Manas* が永久的な本因でない理由は、若し永久性をもつてをる *Buddhi* に同化してそれを意識化した場合には永久的なものとなるけれども、併し變化状態にある肉體に關係してをる *Manas* — 動物靈魂 — に同化してそれを意識化した場合には生滅的の性質をおびてきますから永久的な本因であると云ふことができません。それで、先きには永久的な本因にかぞへなかつたのであります。斯のやうな本能性をもつてをるものが *Manas* でありますから、いま若しこの本因が *Atma* と *Buddhi* との結合體に隨從する場合にはその結合體、即ち靈魂の本素に靈魂としての働きを起さしめるのであります。言ひ換へると、無意識的の靈魂を有意識的の靈魂とするのは實にこの *Manas* の力であります。之を先きの機關車の喻へについて申します



と、蒸氣を機械に動かせてその機械に仕事をさせるところの人に相當するのであります。即ち、無動的の機械を有動的の機械に変化させるところの人なのであります。故に Atma・Buddhi・Manas の三本因が結合した、否結合したと云ふよりも寧ろ融合同化したところのものが即ち完全無缺の靈魂であります。この三本因の結合體——融合同化體——を宗教哲學では The Spiritual Divine Ego (靈性神的自我) と云つてをるのでありますが、此靈魂は全然肉體 Rupa とは獨立的に存在してをるところのものでありますから、假令肉體が解體してしまつても依然として存在し永劫の未來に向つて生の一路を辿つてゆくところの靈體であります。しかし、この靈魂は先き(生活篇)にも云つておいた生滅せない部分の靈魂でありますが、人間には未だこの外に生滅する部分の靈魂もあるのでありますが、その生滅的の靈魂の本體については後に述べることとしておきます。

#### △靈的進化退化の起る原理

扱て、この宇宙間に生棲してをる有情のうちで、進化的境界の有情になればなる程この靈性神的自我の活動能率が大になつてきて、最早進化の究竟地の境界になるとその生活の全部がこの靈性神的自我の活動からしてなされてをるのでありますが、之と正反對にその有情の境界が退化的

になればなるほど、この靈性神的自我が他の諸本因の結合體——人我的自我(後に説明をすることとする)——の爲めに麻痺せられてしまつて、却つて他の諸本因の結合體であるところの人我的自我の活動能率の方が大になつてくるために、その有情の境界は退化的になる譯であります。ところが、この靈性神的自我の活動能率の大小如何んは偏へにこの Manas の權内にあるのであつて、この Manas が淨化的な Buddhi に多く同化してをる場合は其靈性神的自我の活動能率は自然と大になつてきますから、随つてその有情の一切の行爲は淨化的であり未來の世界は進化的に運命づけられる譯であります。併し、この Manas が次ぎに述べるところの不淨化的な Kama-Rupa に多く同化してをる場合には、それが爲めに靈性神的自我の活動能率が減じて却つて人我的自我の活動能率の方が大となるからして、其有情の行爲のすべてが不淨化的となり隨つて來るべき生の世界は退化的に運命づけられる譯であります。すれば、この Manas と云ふ本因は何ぜにその全部が他の本因に同化して仕舞はないで、そのある一部分は淨化的な Buddhi に結合し、又ある一部分は不淨化的な Kama-Rupa に同化したりするのであるかと云ふと、それがこの Manas の性質であるから仕方ありません。若しもこの Manas が淨化的な Buddhi にでも亦不淨化的な Kama-Rupa にでもどちらにでもよいからして、その全部が同化する性質のものであつたなら



ば此の宇宙間には最進化的な有情と最退化的な有情とができてキツパリとするのでありますが、しかしその同化してをる分量が少しづつ違つてをるものでありますから、この宇宙間には種々雑多の境界の違つた有情が生棲してをるのであります。

#### △人間の二重性

扱て先きにも申した通り *Manas* と云ふ本因が他の諸本因と結合して靈體を構成すると必ず其處に二重性を現はす性質をもつてをるものでありますから、人間は誰しも皆二重性を持つてをります。即ち靈性と野獸性、言ひ換へると精神的性質と物質的性質との二重性であります。と云つて、その二重性が平均してをるものは誰もありません。必ず何れかの性質の方が強いか弱いか人々各自異つてをるものであります。仍で、この *Manas* が淨化的な *Buddhi* に多く同化してをる人間は靈性的の人間、即ち淨化的な主觀をもつてをる人間でありますから自然とその言動思想は淨化的であります。隨つてその生の世界は進化的に運命づけられてゆく譯であります。併し、もしこの *Manas* が不淨化的な *Kama-Rupa* に多く同化してをる人間の主觀は自然と不淨化的でありますから、その言動思想は矢張不淨化的であります。隨つてその生の世界は退化的に運命づけられてゆく譯であります。ですから、私共の未來の世界が進化的に運命づけられるか或は退化的

に運命づけられるかは、偏へにこの *Manas* が何れか（プラナ・カールマー）に同化する分量の多い少ないに依つて確定せられるのであります。

#### △如何なる生活を靈的生活と云ふか

仍で、私共がこの *Manas* の全部を *Buddhi* に同化せしめてしまふ——私共の言語思想行爲の凡てが靈性的自我——には二通りの方法手段があります。即ち、その一つは如來の佛力を借りてなす方法と、二つには自修と克己とによつて自分の力をもつてする方法とであります。マア何れの方法によるとしたところが無努力のまゝでは逆も不可能な事でありますから、矢張それ相當の努力をしてゆかねばならないことは決つてをります。しかし、私共の肉體的生命の存續期間と云ふものは有限的なものでありますから、その努力の程度も大抵は決つてをります。しかし、假令その存續期間が有限的なものであつても、その期間を最も有効に且經濟的に使用をして出来るだけ多量に *Manas* を *Buddhi* に同化せしめんとする生活を靈的生活とも亦靈體を養ふ生活とも云ふのであります。

さて、以上に述べてきたところの *Atma*、*Buddhi*、*Manas* の三本因を總稱して宗教哲學では上位の三本因と云ひ、その結合體を *The Spiritual Divine Ego* 靈性神的自我と云つて、少しも生滅的



な不純分子の混つてゐない淨化的な永久的靈體でありますが、之を靈性神的自我といふ代りに、一名眞我とも亦上位の自己とも斯學では云つてをります。

### □生滅的靈體の分解

#### △肉體の性能

扱て、次ぎには先きの上位の三本因に對して下位の四本因と云つてをるところの Rupa. Prana. Linga-Sharira. Kama-Rupa 等の諸本因について申しておきます。仍で先づ第一には Rupa—肉體—についてありますが、この Rupa と云ふ本因は先きの生活篇に於て申しておいた通りに、米や、麥や、獸肉や、魚肉や、野菜や、その外種々雑多なものが生理的作用によつて化學變化をしたものが、物理的結合かまたは化學的化合をして出來上つてをるのであります。併しこのことについて更に精しいことは後に物質組成の原理と云ふことをお話しする時に申すこととしておきます。さればそのやうな原理からして出來上つてをるところの肉體は全體如何なる役目を司つてをるのであるかと云ふと、人間を構成してをるところの靈體の部分や或る期間——進化的にか又は退化的にか何れにせよ——育てゆく役目と、そうして次ぎに述べるところの Prana と云ふ組成本因が活動する

について、その Prana と外界との連絡をとるところの一の媒介者の役目とを司つてをる組成本因であります。

#### △生理的認識作用

すれば、その Prana と云ふ本因は如何なる性能をもつてをる物であるかと云ふと、この本因は獨立的に働きをすることができないで何時も血肉所成の五官、即ち視覚器、聽覚器、嗅覚器、味覚器、觸覚器等にたよつて活動をしてゆくものであります。先づその一二について申しますと、外界のエーテルの波動が視覚器に這入るとそれが視覚神経をへて大脳中の後頭葉と云ふ部分に傳送されます。すると、其處に明なり暗なり赤なり青なり黒なり白なりと云ふやうな認識作用が起るのであります。又外界より空氣の振動が聽覚器に這入るとその振動は、聽覚神経をへて大脳中の額葉と云ふ部分の上部に向つて傳送されます。すると、其處にあの音は大きいとか又小さいとか或は良い音色であるとか悪い音色であるとかと云ふ認識作用が起るのであります。このやうに大脳と神経との交渉によつて起る所の總ての認識作用そのものをさして Prana と云ふのであつて、彼の唯物論者が云つてをるところの太鼓の音、薪木の焰に相當するものであります。又彼のゼームス博士の語を借りていふならば所謂オルガンの音聲そのものであります。又この Prana は



スビー Rupa. Linga Sharira. Kama-Rupa 等の下位の諸本因が働きをするには必ず必要なところの下位の Manas (意識) —— Manas へ Kama-Rupa との結合體 —— の自動力ともなるところのものであります。又次ぎに述べやうと思つてをる Linga Sharira の機關ともなる性能をも持つてをります。

#### △靈 氣 體

それでは、その Linga Sharira (靈氣體) は如何なる本因であるかと云ふと、これは單獨的な性質もあり又隨從的な性質もあつてこの五尺内外の肉體生命の機關であるところの肉體の氣體であつて、この本因は何時も先きの Prana を機關として活動をするものでありまして、一名この本因を斯學では複體とも云つてをりますが、彼の心靈哲學で云ふところの複體とかまたは動物磁氣とか云ふものとは其處に何にらかの類似點があるやうに思はれますが、そのことはモウ一步研究の歩をすゝめてから申し上げる心積りでありますから、この靈氣體と云ふことについては他日にその説明を譲つておかうと思ひます。

#### △生滅的靈魂の本素

それでは、最後に残つてをる Kama-Rupa は如何なる本因であるかと云ふと、之は人間の動物的情慾の中心、言ひ換へると人間の野獸性或は物質性の中心生命でありますからして、先きにも

申しておいたやうにその有情——人間——を退化的境界にひき入れるところの原動力となるものであります。仍で、先きに Manas の本能性を述べる時に一寸申して置いたやうに、Manas と云ふ組成本因はこの Kama-Rupa と同化するところの性質をもつてをりますからして、その Manas とこの Kama-Rupa との結合體を先きの靈性神的自我に對して人我的自我 The Personal Ego 或は有情意識とも云つて、下位の諸本因——Rupa. Prana. Linga Sharira を意識化するところの働きをもつてをるものであります。ですから、上位の Manas が多量に Buddhi に同化してをる場合には此 Kama-Rupa の活動能率が弱くなりますから、言ひ換へると人我的自我 The Personal Ego と云ふやうな不淨化的な靈體の能率が弱くなつて、淨化的な靈性神的自我の靈體の能率の方が強くなりますから、その有情の一切の言語思想行爲がすべて淨化的なものとなる譯であります。随つてその生の世界はその淨化的な靈性神的自我の反影として顯はれるのでありますから、その世界は淨化的な世界である譯であります。併し、この正反對にその有情が退化的になればなる程上位の Manas が多量にこの Kama-Rupa と同化してをりますからして、随つてこの不淨化的な Kama-Rupa の活動能率が大きくなるのであります。故に淨化的な靈性神的自我の靈體はその不淨化的な人我的自我の靈體のために抑壓せられてしまひますから、退化的な不淨化の世界がその



主觀の反影としてあらはれてくる道理であります。

△二種の靈體

扱て、其處で今迄に述べてきました下位の四本因のうちで、肉體 Rupa を除いた他の三本因——Prana, Linga-Sharira, Kami, Rupa——の結合状態と先きの三本因——Atma, Buddhi, Manas——の結合状態とを比較對照してみると恰も符節を合したやうであります。それは Linga-Sharira と云ふ本因は Prana を機關としてその性能を顯はし、又その Prana は Linga-Sharira の機關としての性能をもつてゐて常に結合状態にあります。併し假令それ等の二本因が結合状態にあつたところがそれは全然無意識的なものであります。ところが、その無意識的な結合體に更に Rupa Rupa と云ふ本因が同化するとその無意識的なものが有意識化されるのですから、この三本因の結合體を下位の自己とか又は人我的自我 The Personal Ego とも云つて、一の靈魂——靈體——としての完全性を具へて居ります。併し、この靈體を構成してゐる所の三本因中の Prana は何時も一時的幻影の腦髓組織及び五官に依頼してその性能をあらはしてをりますから、この靈體——靈魂——は腦髓及び五官の支配をうけてをる譯であります。ですからして、若しその生理的肉體が死によつてその組成分子に還元してしまふと、その肉體をたよりとして働きをしてゐた Prana が

その活動力を失つて了ひますから、最早その靈魂——靈體——は靈魂としての完全性を失つてしまふ譯であります。即ち、靈魂が消滅した譯であります。

さて、先きの生活篇に於て私共の靈魂には生滅的部分と不生滅的部分とがあつて、その不生滅的部分の靈魂は不變化状態のものであるから随つて生滅の原則に左右せられないで永劫の未來に向つて存續してゆくけれども、生滅的部分の靈魂は常に肉體に隨從して居るからして随つて變化状態にある爲めに肉體の解體と共に消滅してしまふものである。と云ふことを言つておきました。その不生滅的の靈魂と云つたのは上位の三本因によつて結合されたところの靈魂、即ち靈性神的自我——眞我——を云つたのであつて、この靈性神的自我を組成してをる本因には生滅の原則に左右せられるところの肉體に頼つてでなければ活動をする事ができないと云ふやうな本因は一つも混つてゐませんから、假令肉體は變化生滅しやうとも全然獨立的に不變化不生滅の状態を保つてをります。随つて生滅の原則に左右せられないで未來永劫に永續する譯であります。又生滅的の靈魂と云つたのは、先き程に説明をしておきました下位の三本因の結合體である人我的自我——有情意識(人我)——を指して云つたのであります。この人我的自我は肉體を離れては全然獨立的に存在し得ないものでありますから、年月がたつて肉體が變化するに隨つてこ



の靈魂(靈體)の状態——人我的自我の状態——も變化してゆきますからして、生滅の原則を離れることができないで肉體の死と共に消滅して仕舞ふ譯であります。

△唯物論者の靈魂論も一面の眞理あり

さて、以前に唯物論者の靈魂論を述べておきましたが、彼の唯物論者が云つて居る所の「人間の靈魂は有機的活動の副産物として生じたる自己意識にすぎない」その靈魂はこの下位の三本因によつて構成せられてをるところの生滅的靈魂(人我的自我)をさして云つてをることに、斯學の上から觀ますとなりますからして、彼等が人間の靈魂は有機的活動の副産物であるとか又は人間が死ねば火の消えたやうなものであつて何物も残らないとかと云ふのも無理ならんことであらうと思ひます。その譯は屢々申しますとほりに、Prana と Linga-Sharira の結合體に Kama-Rupa が同化することによつてそれが無意識的から有意識的化され、然も Prana は常に腦髓及び五官を所依としてその性能をあらはすのでありますからして、それを觀ては有機的活動の副産物として生じたる自己意識が即ち靈魂であるといふのも、亦死は斷滅なりと云ふのも最もなことでありませう。故にこの邊からして唯物論者の靈魂論にも矢張り一面の眞理がある譯でありますから、全然それを否定し去ることはできません。しかし、それをもつて全部としてをることは餘りに淺薄

な靈魂論である、と云ふよりも寧ろ彼等唯物論者は未だその外に不生不滅の靈體——靈性神的自我——のあることを知つてゐないものと云ふより外に仕方なからうと思ひます。

さて、以上申し來つたことによつて大略人間と云ふものは如何なる組織になつてをるものであるかと云ふことがお分りになつた事であらうと思ひますが、更に最後におきましてこの宗教哲學の立場からして人間と云ふものゝ定義を下してみますと、「人間と云ふ物は、諸本因によつて活動させられるところの化學的、物理的動力の連關であり、又諸本因の複合體である。」と云ふことができるであらうと思ひますが……。

### 三 佛教に於ける人間の組成觀

人間と云ふこの靈妙な且複雑な活動をするところの宇宙間の一生物に對して、佛教では如何なる研究批判を下してをるかと思ふことを一言しておきますと、凡て人間がこの肉體の殼内に常一主宰の實我とも云ふべきものが内在してゐて、それが恚<sup>イ</sup>した靈妙な働きをさせるのであると思つてをるのは大變な誤りであつて、決して人間には「我なり」と云ひ得る資格をもつた部分は一



つもなく、只一つの寄木細工に過ぎない。されば、その寄木細工の人間が何ぞこのやうに靈妙な働きをすることができるのであるかと云ふと、それは五蘊 Pañca Skandhas の原理によるからである。と云ふのが佛教に於ける人間の組成観であります。仍でその五蘊 Pañca Skandhas と云ふのは、

- 一 色蘊 Rupa-Skandha——五官に感ぜられる対象とその対象によつて生じる力とを云ふのであつて大體に於ては物質の謂である。
- 二 受蘊 Vedana-Skandha——苦樂喜怒などの感情である。
- 三 想蘊 Samjñā-Skandha——客觀に對してそれを心に取り入れる精神作用、即ち思想である。
- 四 行蘊 Samskāra-Skandha——造作するの意味より名づけられたものであつて、この中には前三者及び後一者の殆んど全部が含まれてをる。
- 五 識蘊 Viññāna-Skandha——心の自體をいふ。あらゆる客觀を識別し、了知する作用をなす。等の五種でありまして、若しこれを總括すると物質と精神——肉と靈——との二つに歸して仕舞ひますが、之等は共に生滅すべき所謂有爲法のものであります。

### □物質組成の原理

扱て、前項では靈體の部分は説明したけれども、肉體の部分については餘り説明をせなかつたからして、茲で佛教と物理學との二方面からして聊か説明をしておかうと思ふのであります。仍で、五蘊のうちの第一の色蘊 Rupa-Skandha は此肉體 Rupaの説明であります。すべて此物質——佛教では物質のことを色法といふ——と云ふ物は一定の體積をもつてをりますから、隨つて或一定の空間を占有するところの性質をもつてをるものであります。その性質を物理學では物質の填充性 Extension と云つてをります。斯の様に、すべての物質は一の填充性をもつてをりますから二つの物が同時に同所を占有すると云ふことはできません。仍で、その性質をば物理學では物質の不可入性 Impenetrability と云ひ、佛教では質碍の性質と云つてをります。斯の様に、すべての物質には或一定の體積があると云ふ理由は、所謂佛教で云ふ極微所成の原理によるからであり、また物理學で云ふところの分子引力 Molecular attraction の原理に基づいて上、下、四方の六方位を具備してをるからであります。

ところが、その物質をその性質を失はない程度に於てその體積を無限に細分することができる



か、どうかと云ふことは直接の實驗に依つては定め難いけれども、併し今假りに細分することができるものと假定して、一つの物質をより已上に細分することができないまでに細分したものを更に上、下、四方の六方位と中央との七個に分析してもうこれ已上には何んとしても分析することができないと云ふまでに細分をして、その最後の最小極小の點に達したもので物質の單位となるところのものを佛敎では極微と云ふのでありますが、最早その極微と云ふものになると肉眼でみることのできないのは勿論のこと、どれほどな強度の顯微鏡をもつてしてもみることにはできないものであります。ですから、この極微には最早填充性もなければ不可入性もある譯はありません。ところが、この極微が上、下、四方、中央に七個相集まつた物を微と云ひ、この微が更に七個集つたものを金塵と云ひ、金塵が又更に七個集つたものを水塵と云ひ、水塵が更に又七個集つたものを兔毛塵と云ひ、兔毛塵がまた更に七個集つたものを羊毛塵と云ひ、羊毛塵が更にまた七個集つたものを隙遊塵と云ひますが、この隙遊塵になるとはじめて我々の肉眼でみることができるようになります。斯の様に、漸次に無量無數不可計の極微が相集まつて一つの物質が出来上るのであります。この佛敎の物質組成の原理を物理學では分子説 Moleculantheory と電子説 Electron theory とに依つて説明をしてをるやうであります。即ち、一切の物質は、その物質の性質を失は

ない迄に細分した所の最小の微粒、即ち Molecule 分子より成つてをるものであると假定するのが分子説であります。ところが、この分子は更に Atom 原子と稱する全然性質の異なつてをる一種又は數種の微粒が集つて出来てをるものであります。この Atom 原子とても更に陽電氣を帯びてをる核と陰電氣を帯びてをる電子 Electron と稱する數多の微粒から成つてをるものであると推定するのが物理學に於ける電子説であります。ですからして、佛敎に於ける極微所成説と物理學に於ける分子説——最小極小の單位は電子であるけれども、電子はおろか原子そのものが最早元の物質と全然に性質を異にしてをるからして電子説は佛敎の極微説とは一致せない、故に此場合は分子説をとるのが最も適當してをるやうである。——とはその言葉が違つてをるだけのものであつて、物質の組成と云ふことに對しては共に同じ原理を説明してをるものであると云はねはなりません。さて、一切の物質は斯のやうな原理によつて形ち作られてをるものであります。併しそのやうにして出来上つた物質には大、小、長短、方圓等と各々その形が異つてをるのは何故であるかと云ふと、それはこの極微(分子)がより集つてをる状態が各々異つてをるからであります。すれば、何ぜ一切の物質は極微又は分子がより集つて出来てをるものである、と云ふことを知ることができると云ふと、先づ第一の理由としてはすべての物質は壓縮することが出来



ると云ふことであります。それから、もう一つの理由は水が金・銀・鉛等の實質内に透入することといふ。もう一つには水と酒精との混合液の體積がその成分の體積の和よりも小さい等と云ふことから考へてみても、佛敎の極微説とか又は物理學の分子説等は決して假定的なものでないと云ふことが分るのであります。斯の様にして形ちづくられてをる一切の物質は、その形ちが違つてをるばかりではなく又その性質も各々違つてをるでありませう。仍で、そのいろ／＼な性質をもつてをる一切の物質を物理學に於ては固體 Solid、液體 Liquid、氣體 Gas の三種に大別をしてをります。すれば同じく分子——電子の幾等かがより集つて出來てをるもの——がより集つて、出來上つてをる物質に何ぞそのやうに固體だとか液體だとか氣體であるとか、と云ふやうな異つた性質が生じるのであるかと云ふと、先づ固體としての性質の顯はれるのは、そのより集つてをる分子間の距離が小さくて而もその凝集力——同質の分子間の引力——が強い爲めに各分子が運動を起しても一定の區域を出でないために固體としての性質を保つことが出來るのであります。又液體はその分子の凝集力が固體と比較すると稍々薄弱なためにその分子が運動を起すと一定の區域に止まらないで容易に移動をするからしてそのやうな性質が現はれるのであります。又氣體はその分子間の距離が大きくて而もその分子の凝集力が頗る弱いからして、分子の運動が自在である

爲めに起る性質であります。ところが、その分子の運動と云ふものはその物體を動かしたから起るものでもなければ、また手で振つたからして起ると云ふのでもなくて、その運動は溫度によつて起されるものであります。已上申して來たことが物理學に於ける物質の性質觀であります。佛敎に於ける物質の性質觀は少しその趣きを異にしてをります。即ち、先きに申しておいた極微と云ふ元素そのものには色、香、味、觸等の先天的性質をもつてをる四種の極微があつて、それ等の極微が種々に相ひ集つて物質を作つてをるのであります。仍で、物質が我々の眼に映ずるのは色塵と云ふ極微が混つてをるためであり、鼻に香を感じるのは香塵と云ふ極微が混つてをるためであり、舌に味はひを感じさせるのは味塵と云ふ極微が混つてをる爲めであり、皮膚に觸覺を感じさせるのは觸塵と云ふ極微が混つてをる爲めであると云ふのであります。ところが、又それ等の極微には各々先天的に、堅・濕・煖・動等の性質をもつた四種類がありますが、それを一名又地水火風の四大種(四元素)とも云ふのであります。仍で、それ等の性質をもつた極微(分子)が何時も同一の分量をもつて積集するならば一切の物質はみな悉く同一の性質のものとなるのであります。四大増偏と云つてそれ等の性質を異にした極微(分子)が積集してをる分量は物質を異にする毎に各々違つてをるのであります。即ち、堅性の極微が最も多量に積集した場合には固



體の性質が顯はれ、濕性の極微が最も多量に積集した場合には液體の性質が顯はれ、動性の極微が最も多量に積集した場合には氣體の性質が顯はれるのであります。併し、又其等の固體、氣體、液體等には軽いものもあれば重いものもあり又冷たく感ずるものもあれば温かく感ずるもの等のあるのは、即ち堅性の極微が多量な場合にはその物質は重くなり、動性の極微が多量な場合にはその物質は軽くなり、濕性の極微が多量な場合にはその物質は冷たくなり、慳性の極微が多量な場合にはその物質は温かくなるのであります。斯の様に極微の八の性質即ち、色、香、味、觸、堅、濕、慳、動等が極めて複雑な集りやうをしてをるからして、物質にはいろ／＼な性質をもつてをるものがあるのであります。已上に申しましたことが佛教に於ける物質の性質觀であります。斯う申しますと何んだか解らんことを申した様でありますけれども、この複雑な物質組成の原理を佛教では八事俱生隨一不滅と云ふ簡単な語でもつて言ひ詮はして居るのであります。斯の様に、物質（色法）と云ふものを佛教と物理學との二方面からして考究をしてみると、大體に於て物質が組成せられてをる原理を知ることが出来るであらうと思ひます。

仍で、我々のこの五尺の肉體とても矢張り填充性と不可入性をもつてをる限りには物質 *Dr* でない *Dr* と云ふことは出来ません。すれば矢張り八事俱生隨一不滅の原理、即ち言ひ換へると分

子現象の原理によつて作り出されてをるものであると云はねばなりません。仍で、できたと云ふ現象があるならば即ち生と云ふ現象によつて斯のやうに存在してをるものであるならば、必ず滅の現象即ち還元作用が我々の肉體の上に起つて來ることは物質としての當相でありますから、遁れることはできません。ですからして、もしも私共の身の上に滅の現象（還元作用）が起ると、この肉體はもとの組成分子（組成極微）に還元して仕舞ふからして最早肉體と云ふものはなくなる譯であります。すれば、何んと云つてもこの肉體は一時的幻影のものでありますから、「我なり」と執着するほどのものではありません。即ち、佛教の術語をもつてすると、身具我見の見解を起すべきでない *Dr* と云ふことが説明せられてをるのがこの八事俱生隨一不滅——分子的現象——の原理であります。言ひ換へると、五蘊の第一に上げられてをるところの色蘊 *Rupa-Skandha* の原理であります。これは又宗教哲學に於ける *Rupa* の原理に相當すべきものであります。

#### □ 受 蘊（感情）

扱て、次ぎには受蘊の原理であります。この原理は感情に囚へられた生活者に對してその感情の如何に頼み少いものであるかが説明せられてをるものゝやうであります。仍で、私共はこの



人生を苦の世界と観るでせうか、又樂の世界と観るでせうか？ 成る程人間と云ふものは勝手なものであつて、自分が逆境に當面した場合には無闇とそれを苦にして此人生は苦しい世界である厭な世界であるとして厭世主義に走りますが、併しその逆境が轉じて順境に處したをりには先きに苦の世界であると思つてゐた感じは何處へやらいつてしまつて人生は楽しい世界であるとして享樂主義に走るものであります。併し、人生は苦の世界でもなければ又樂の世界でもなくて、苦樂相ひ半ばした所の世界であります。即ち、この人生は苦樂俱にあさなへる繩の如き状態にあるのが人生の當相であらうと思はれます。ですから、國に萬年の榮もなく人に千年の長壽もなく、又盛んな者は衰へ、衰へたるものは盛んになり、滿てるものは虧け、虧けたるものは又滿つる時節の到來するのが人生の有様であります。にも拘らず、人々は一時の感情に囚へられて順境に處した場合にはその境遇を誇りその幸福を喜ぶけれども、一朝にして逆境の渦中に投げ込まれた場合にはその境遇を悲感しその不幸に泣き悲しむことは、恰も頭燃を拂ふが如しと云ふ有様であります。併し、之は私共の境遇そのものに常につき纏ふところの苦樂觀ではあるけれども、先きにも申したやうに、我々のこの肉體が外界と内界とが交渉關係をするのについての媒介者であるために、苦樂は種々萬端の相をして私共の身體に通つてくるものであります。その場合一々そ

れを知覺してイヤ苦なりイヤ樂なりイヤ憎いイヤ可愛等と云ふ感情作用が鋭敏に働きますが、併しその感情作用は客觀事物を知覺することによつて起るものであつて、人間から若しこの知覺と云ふ生理的作用を取り去つてしまつたならば感情作用は起らうとしても起るものではありません。すれば、人間の知覺作用はどうして起るかと云ふと大脳・神經、五官の三者の間に換されるところの生理的交渉に基づいてをるものであります。斯うして起つたところの知覺作用と或一種の心の自體とが更に又交渉關係を結ぶ事によつて人間に苦樂喜怒の感情が生じるのであります。にも拘らず、人々は我と云ふ實體があつてそれがそのやうな感情作用を起すものであると云ふ誤つた觀念を懷いてをるのであります。即ち、佛教の専門語をもつて言ふと受用我事の見解を起すものですから、それを矯正せんために人間に感情作用の起るのは我と云ふ實體が内在してゐて、それが起すのではなくして大脳と神經と五官との間に起る生理的交渉が起因となつて、或る心の自體が作用をするからして人間には感情作用があるのであると云ふことが説明せられてをるのがこの受蘊 Vedant-Skandhe の意味であります。



### □ 想 蘊 (思想)

斯の様に、肉體は我なりと云ふ資格はない、また感情作用は一の生理的作用によるものであつて我あるが爲めではないと云ふと、人間はほんたうに厄介な動物であつて又他の方面からして「我」と云ふものを見出さうとするのであります。さて、人間として處世してをる限りには十人十色で、その人その人によつてその境遇が違つてをるからしてその嗜好といふものも違つてをります。ところが、その嗜好が違つてをる爲めに自然と其思想と云ふものが違つてくることは自分々々で考へてみればよく解ることでありませう。即ち、甲の人には深く感ぜられることでも乙の人には左程にも感ぜられないことがあります。又丙の人には面白いと思はれることでも丁の人には全然没趣味なこともありませう。併し、これはそのみる物柄(客觀事物)には少しの違ひもないのであるけれども、それを觀るところの甲乙丙丁の各人がその思想を異にしてをるために自然とその見方が違つてくるからであり、また隨つてその言ひ證はし方も違つてくる譯であります。之は只その一例に過ぎないのであります。すべて斯の様に思想を異にするに隨つてその言説が違つてくるものであります。これは偏へにその人の境遇の生産物であると云はなければなりません。

ん。にも拘らず、人間はこの思想言説によつて妄我の見解を起すのでありますから、それを矯正せん爲めに思想は境遇の生産物であり言説は抽象觀念の表號に過ぎないものであると云ふことが説明せられてあるのがこの想蘊 *Samyak-Skandha* の原理であります。

### □ 行 蘊 (爲作造作)

さて、「想ひうちにあれば色そとに現はる」とか言つて、人々の思想が各々異つてをる爲めにその行爲動作も亦十人十色であります。ところが、それを孟子は一體にして性善説を叫んでをります。即ち、

「人の學ばざる所にして、能くするものは良智なり。慮オモハからずして知るものは良智なり、孩提の童子も其親を愛するを知らざるなく、長じては其兄を敬するを知らざるなし」

と云ひ、また

「人皆忍びざる心あり。いま人、孺子の井に入らんとするを見れば、皆述ツツ慚慚オモの心あり。交を孺子の父母にいる、所以にあらず、譽を郷黨朋友に要する所以にあらず。其聲を惡みて然らざるにあらず。是れに由りて之を見れば、惻隱の心なきものは人にあらざるなり。」



とか云つて、人の心は先天的に善であり随つてその行爲も先天的に於ては善であることを主張してをります。ところが、この正反對に荀子は人の心は先天的に惡であり随つてその行爲も先天的には惡であるとして性惡説を叫んでをります。即ち、

「人の性は惡なり。その善なるものは偽りなり。今人の性、生れて好利あり、是れに順ふが故に爭奪生じ辭讓亡ぶ。生れて疾惡あり、是れに順ふが故に殘賊生じて忠信亡ぶ。生れて耳目の欲あり、聲色を好むあり、是れに順ふが故に淫亂生じて禮儀文理亡ぶ。然れば則ち人の性に順ひ、人の情に順はば必ず爭奪を生じ、亂雜して暴利に歸せん。故に必らず、將に師法の化、禮儀の道ありて然る後に辭讓に出で、文理に合して治に歸す。是れによりて之を見れば人の性の惡たるや明かなり。」

と言つてをりますが、併し何れの主張にしてもみな一面の眞理は握られてをるだらうと思ひます。併し、假令人の行爲が先天的に善であらうが又惡であらうが、何れにしても人間はその性の傾向である善惡の行爲その物に染着して、それによつて妄我の見解を起すために、それを矯正せんが爲めに人間の一切の爲作造作は性の傾向に過ぎないものであると云ふことが、即ち専門語をもつて言ふと造作一切法我事の見解を起すべきでないことが説かれてあるのが、この第四の行蘊

Samskara Skandha の原理であります。

### □心識による我執

扱て、「我」と云ふべきものは肉體でもなければ生理的作用によつておこる感情でもなく抽象的觀念でもなく思想言説でもなく又一切の行爲造作そのものでもないとする、其處には我々の肉體の殻内に行爲をさせたり思想をさせたり又生理的作用を起さしめる何物かが存在してをるべきであるとして、そのものと云ふものに拘泥して其處に「我」と云ふものを見出さうとするのであります。即ち、佛教で云ふ彼所依止我自體事の妄執を起してくるのであります。故に佛陀は、成る程我々人間を組成してをる物の中で行爲をさせたり思想させたりする所のものはあるのであるけれども、それは實我と云ふべき資格のあるものではなくて八種の心識がその様に行爲をさせたり思想させるのである。併し、斯う云つたからとて八通りの心識といふ物が存在してをるのだと思つては大變な間違ひであつて、その八通りの心識と云つたのは心の作用を八通りに分類したのに過ぎないのであるからして、その八通りの心の作用をもつて「我」なりと思つてはいけない。と云つて心識に對する實我の妄執を打ち破らんとせられたのがこの第五の識蘊 Vijnana-Skandha



の原理であります。

### □心の作用（心所）

扱て、一般に佛教の心理學では我々の心識を説明して心の自體と心の作用とに區別をしてをります。仍で、心の自體の方はその作用によつて楞伽經の説相によると二種三種または八種に分類せられてをります。それと共にまた心の作用——認識作用——には五十一通りあることが云つてあります。仍で、分り易くするために心の自體の作用を根本的心作用と言ひ、心の作用（認識作用）の方を隨從的心作用と言つて説明をしてゆきますと、唯識論（本の名）では前者（心の自體——根本的心作用）を心王と云ひ、後者（心の作用——隨從的心作用）を心所と言つて説明をしてをります。併し、いまの場合心所について精しく申す必要はないからして、心王（心の自體）について述べる以前に極く簡單にその名稱を列記する程度にとどめておきます。

一、遍行位（根本的心作用と何時も俱に生起するところの心作用）觸、受、想、思、作意の五種あり。

二、別境位（各々別々の對境に對して孤々獨立して生起する性質の心作用）欲、勝解、念、三

摩地、慧の五種あり。

三、善位（善の根本的心作用が起る時俱に生起して惡心を退治せんとする心作用）信、勤、慚、愧、無貪、無瞋、無癡、輕安、不放逸、行捨、不害の十一種あり。

四、煩惱位（吾々の身心を攪亂するところの迷妄の心作用）貪、瞋、慢、無明、疑、不正見の六種あり。

五、隨煩惱位（煩惱位の心的作用に隨從して生起する心作用）忿、恨、惱、覆、誑、誑、害、嫉、慳、無慚、無愧、不信、懈怠、放逸、憍沈、掉舉、失念、不正見、散亂の二十種あり。

六、不定位（心屬の定まつてゐない心作用）睡眠、惡作、尋、伺の四種あり。

これによつてみると、我々の心の作用（心所）には五十一種あると云ふことが分ります。さて、已前に申しておいたことですが孟子は性善説を荀子は性惡説を各々主張してゐますが、いま佛教の心理學の立場からしてこの支那の二大哲學者の主張を批判してみますと、人間の善の心作用は總計十一種あり、惡の心作用は總計二十六種でありますから荀子の性惡説の方が幾分か旗色がよい譯であります。併し、二者俱に人間の先天的性質については其の全部を忌憚なく言ひ詮はして



あると云ふことは出来なからうと思ひます。

### □心の自體（心王）

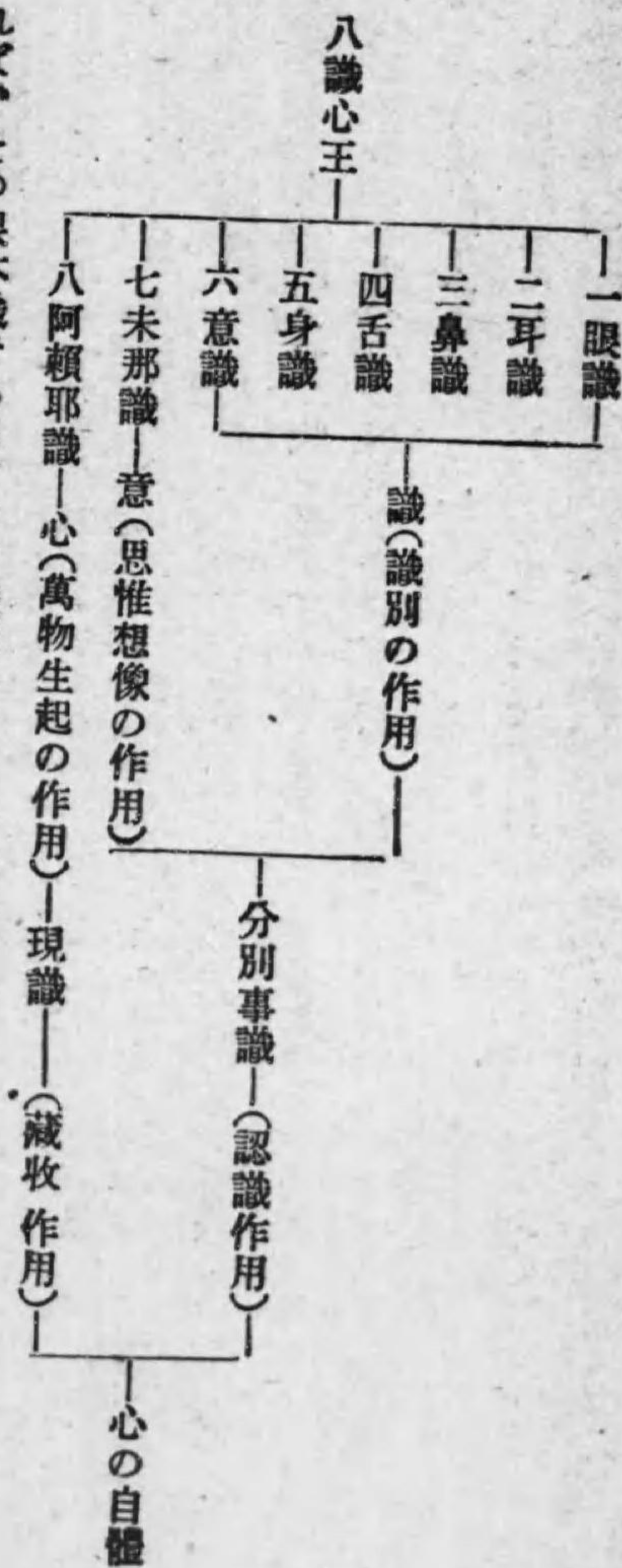
すれば、それ等の五十一種の心の作用（隨從的心作用——心所）を起させる其心の自體とは全體如何なるものであるか、と云ふことについて、楞伽經の説法の時に大慧が釋尊に質問を致しました。すると、其時釋尊は、

「大慧よ、心の自體に八つの種別があると云ふことは、心の作用に八種の區別があるからである。しかし、それを略別すると認識作用をなす心と、萬物が生ずる力を藏めてゐて遠い過去からして萬物を生じて來た、またこれから永しなへに萬物を生じてやまない一大生命力たる心の二つに區別をすることが出来る。併し、大慧よ、認識作用をいとなむ心は常に對象を識別するのであるから、その對象が外界であるかまた内界であるかによつて其心も差別せられるけれども、どちらにしても認識作用には相違ない。その心を「分別事識」と名づけるのである。大慧よ、次ぎに萬物を生ずる心は實に不思議な生命力であつて、萬物の生ずる力はすべてその中に收められてをる。それは丁度鏡にもろくの事象が悉く寫り現はれるやうに萬物はその心の

中に悉く藏められてをる。その心を阿頼耶識と云ひ又現識とも云ふのである。——大慧よ、認識作用をなす心と阿頼耶識とは丁度泥と土とのやうな、または金と金の冠とのやうな關係にあるものであつて、別なものでもなく又同じなものでもない。若し、泥がその要素である土と違つてをるならば泥はできないであらう。と云つて二つが（泥と土）同じものであるならば泥と土とは同じ形のものでなければならぬ。之と同じ譯のものであつて、認識作用をなす心と萬物を生じてやまない一大生命力たるアラヤ識とは、同じなものでもなくまた違つたものでもない。——大慧よ次ぎに心には八種の自體とその作用とがあると云ふのは、視覺によつて外界を識別する心（眼識）と、聽覺によつて音響を識別する心（耳識）と、嗅覺によつて香を識別する心（鼻識）と、味覺によつて味を識別する心（舌識）と、觸覺によつて外界を識別する心（身識）と、内界と外界とのすべての對象を識別する心（意識）と、思惟想像をする心（未那識）と、アラヤ識との八種を云ふのである。」

と、大慧にお話しになつてをります。已上は楞伽經の原文を解り易くする爲めに意譯したのに過ぎませんが、これによると私共の心の自體を次ぎのやうに圖解をすることが出来ます。





すれば、その根本識であるアラヤ識が、どうして認識の作用をなす他の七種の心識に變化をするのであるかと云ふことを、大慧はまた釋尊に質問をしました。すると釋尊は、

「大慧よ、心識の根本であるアラヤ識が認識作用をなす心に變化するのに四つの理由がある。一つには客觀の世界が自心の顯はれであると云ふことを知らずにそれが實在してゐるのだと執着をするために、二つには遠い過去からして客觀の世界を誤りみてきた習慣があるために、三つには認識作用をなす心はその本能性として客觀的對境を識別する爲めに、四つには心が外界

の色々な現象をみようとする欲望をもつてをる爲めに。大慧よ、この四つの理由によつてアラヤ識は認識作用をなす他の七種の心に變化をするのである。或はマナ識に、或は意識に、或は眼識に……。大慧よ、アラヤ識とその現れである他の七識とは同一のものでなく、又違つてもゐない。アラヤ識と諸識とはその作用が各々違つてをるからして同一のものではない。併し、その本質は譬へば海水と浪とのやうで違つたものではない。」

と、云ふ意味のことを楞伽經にお答へになつてをります。ですから、我々の心の自體には八通りあると云ひ條、眞實は萬物を生起する一大生命力であるアラヤ識のみであります。併し、アラヤ識の大海は客觀の世界の風の爲めに煽られて自然と浪が立ちます。即ち、アラヤ識は客觀の世界を造り出すはたらきはもつてゐますけれども、但し、それを識別し或は思惟をするところの作用をもつてゐませんから、それを識別しやうとして眼識、耳識、鼻識、舌識、身識等の五種の心識が生じてきます。しかし、それ等の心識は外界を識別する作用はもつてゐても内界を識別する作用をすることができませんから、今度は内界も外界も共に識別をなす作用をもつてゐる意識が生じてきます。ところが、それ等の心識は客觀の世界を識別する作用はもつてゐてもそれを思惟し想像する作用をもつてゐないからして、今度はそのやうな作用をもつたマナ識と云ふ心識が起つ



てくるのであります。さて已上申したやうな原理に基づいて我々の心の自體——八識心王（根本的の心作用）——と云ふものは作り出されるのであります。併し、作り出された即ち生じたと云ふ事があるならば生滅の原則によつて必ず滅すると云ふことのあるのは當然のことであり得ます。ですから、我々人間にかうして靈妙な働きをさせる心の自體と云ふものも餘りあてになつたものではないやうであります。

### □五識の性能

扱て、私共の心の自體を分類すると、客觀を識別する作用をもつてをる心と、思惟や想像の作用をする心と、萬物を生じてやまない作用をもつてをる心との三種に分類をすることができます。——二種または八種に分類する場合は先きに述べておいた——そこで、客觀を識別する心を識と云ひ、思惟想像をする心を意と云ひ、萬物を生ずる心を心と云ふのであります。それで、先づ第一の識からして説明をしてゆきますと、同じやうに客觀を識別する作用をもつてをる心（識）にも、物質のみを識別する心（識）と、無物質のものを識別する心（識）との二つがあります。それで、物質のみを認識する作用をもつてをる心（識）を前五識と云つて、それには眼識・耳識・鼻

識、舌識、身識等の五とほりの心識があります。ところが、それ等の心識は諸識のうちでも最も生理的機關に縁の深いものでありますから、常に生理的機關にたよつて作用をするのであります。即ち人間として不具者でない限りには誰しもみな完全なところの眼、耳、鼻、舌、皮膚の五官器をもつてをります。ところが、それ等の五官器は心の門戸でありますから、外界の客觀的對象であるところの色、聲、香、味、觸等の五境がそれ等（五官器）の入口から這入ると、次ぎに心の受附とも云ふべき神経へ傳へられる。するとそれが更に神経によつて大脳の各部に傳送をされます。すると、其處に了知識別の心の作用が起つてくるのであります。即ち眼識は、視覺器と視神経と大脳とによつて凡ての外境を了知識別し、耳識は聽覺器と聽神経と大脳とによつて凡ての音聲を了知識別する等の如きであります。併し、之等の識は凡て生理的器官にたよつてその性能をあらはすのですから、その活動範圍は極く狭い譯であります。

### □第六意識の性能

ところが、私共の客觀的對象と云ふものはそんな物質的なもの許りではありません。また私共には現在の世界ばかりではなく過去の世界も未來の世界もあります。すれば、現在のみにか益



だたないのみか物質でなければ識別することができないと云ふやうな前五識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）がどれほど澤山にあつて鋭敏に作用をしてみたところが、無物質のものは識別することができず、過去や未來の世界に對しては少しも間に合はないやうでは不自由で仕方ありません。仍で、私共の心の自體には無物質な客觀の對象を識別して然も過去現在未來の三世を舞臺として作用をする性能をもつてをる第六意識と云ふ心識があるのであります。ところが、この心識はその活動をする範圍が非常に大きいために隨つてその相手方あてかたをみるところの客觀的對象も亦三世に互つてゐて甚だ澤山なものでありますが、その無量無數不可計の客觀的對象を總稱して唯識論（本の名）では法境ほふまきやうと云つてをります。所が、この第六意識にせよ又前五識にせよ、その活動範圍が大きいか小さいか、又はその對境が物質であるか無物質であるかと云ふ遠ひだけのものであつて、やはりそれ等の心識は先きにも申した通りに根本識であるアラヤ識の起伏によつて生じたものでありますから、生滅の原則によつて念々に生滅をくり返してをるのであります。またその客觀の對象であつたところがやはりアラヤ識の中から作り出されたものでありますから、之とても生滅せずにはをりません。ですから、我々の認識作用——知覺作用——と云ひ、またその認識作用を起す心の自體（前五識と第六意識）と云ひ、すべて餘り頼りになつたものでは

ありません。故に、佛陀は知覺作用——認識作用——が餘り靈妙なのに誤間化されてしまつて、その作用を起す心の自體（前五識と第六意識）を信用して頼りにしてゐてはあてがはづれるから、假令その作用は靈妙であつてもやはり生滅の原則に左右せられる一時的幻影的のものであるから、決して頼りにして我の見解を起してはならないと云ふことを教へられてをるのが、先きの五蘊の説明のところで申しておいた受蘊の原理なのであります。

#### □未那識の性能

ところが、また我々の心が作用する状態を考へてみると、先づ第一には物（物質無物質）を知覺し識別をして、次ぎには必ずその知覺し識別をしたところのものに對して色々と思索を廻らしたり、また想像をしたりするものであります。例へば、婦人おんながこのごろ流行の着物を拵らへやうと思つて市中へ買ひに出かけます。而して、先づ第一にはア、此處に呉服屋があると云ふことを知覺する、即ち呉服屋がみつかつたのです。すると、今度は此處の店は高いだらうか安いだらうか氣に入つたのがあるだらうかどうだらうと云ふ想像の心の作用が起ります。すると、それと同時に此店で買つたものだらうかモウ少し彼方へ行つて彼方の店で買つたものだらうかどうしやう、



と云ふ思索の心の作用が起つてきます。而して、思索と想像の結果今度は店に這入ると店員が色々な柄柄のものを前にズラリとならべますと、其時また知覚の作用が起つて此處に澤山な反物があると云ふことを認識します。すると、次ぎには其反物を一々手にとつてみて之がよからうか、あれがよからうか、お隣りの誰れそれはこんな柄柄のを着てをられたやうに思ふ、すればこれにしておかうか等と云ふやうな思索と想像とが廻りかへされます。その結果いよ／＼買ふことに決心をして金を拂つて店を出ると、その時これは我が物なりと云ふ心の作用が起つてきます。已上は只卑近な一例に過ぎませんが、斯のやうに一つの呉服物を買ふにしても知覚と思索と想像との心の作用が交々起るやうに、私共が日常の生活に於て事々に知覚と思索と想像との心の作用が複雑に且敏速に起つてくるものであります。

所が、その知覚作用は前五識または第六意識がその性能に基づいて作用をするからであります。その思索、想像の心の作用は全體どうして起るかと云ふと、それは未那識と云ふ心の自體が作用をするからであります。仍でこの未那識のマナ(Māna)と云ふ語は梵語であつて、之を譯すると「意」と云ふことになります。併し、「意」と翻譯をするからと云つて第六意識とは同じものではありません。即ち第六の意識は知覚と、認識との作用をすることがその性能であるけれども、こ

の未那識は思惟と想像との作用をすることがその性能であります。ところが、我々にこの思惟と想像との心の作用があるからして我が物なり彼の物なり、と云ふやうな我他彼此の見解が起つてくるのであつて、それが爲めに私共の心は始終にかきみだされてをるのであります。ですから唯識大意には、

「未那識は凡夫の心底常に濁つて、前の心(五識及び第六意識)は清く起る時も、我が身、我が物と云ふ差別の執を失せず、心の奥いつとなく醉へるが如くなるは偏へにこの未那識のあるに由つてなり。」

と、云つてあります。併し、またよく考へてみると我々の心に知覚の作用ばかりあつて、若し思惟想像の作用がなかつたならば我々人間には思想と云ふやうなものは全然ない譯です。されば無いものは交換できませんから随つて人間には言葉と云ふものゝ必要はありません、また文字の必要もありません。斯うなつてくると人間社會も随分と殺風景なものになつてきます。斯う申しますと、そんな莫迦なことがあるものかと云ふ人があるかも知れないが、併し順序としてさうなつてゆくから仕方ありません。私共が日常事々に思索をしたり想像をしたりするからして思想もできてくるのです。ところが、色々の思想ができてみれば人々と互ひにその思想を交換してゆかな



ければなりません。併し、その思想と云ふものは無形的なものでもありますから其儘では交換をすることができません。それも、人間がエーテルの感受性をもつてをるものであればその儘でも交換は出来るかも知れませんが、悲しいかな我々は空氣の感受性しかもつてゐませんから、どうしても各自の思想を交換するには、それを何等かの形式の上に現はさなければならぬ、それで古代に於ては繩を色々な形ちに結んで思想の交換をしてゐたさうですが、しかし一々そんなことをしてゐては不便でもあるし、また完全な交換はできませんから、仍で丁度人間が空氣の感受性をもつてをるところからして、それを利用して空氣を振動させて各自の思想を交換する方法が發明されました、即ち語——語とてもあまり完全なものではないけれども——と云ふものができたのであります。併し、その語とてもあまり便利なものでないからして、その不便をおぎなふために今度は文字と云ふものが發明せられたのであります。何んだか話しが横道へそれて仕舞ひましたが、かう云ふ譯で我々人間には思想言説と云ふものができたのであらうと思ひますが、その根元にさかのぼつて考へてみるとやはり我々にマナ識と云ふ心の自體があるからであります。ところが、人間はその思想言説に執着をして間違つた我の見解を起すものですから、佛陀は、人間の思想言説と云ふものは未那識と云ふ心の自體があるからして出來たのであるが、その未那識が

そも／＼根本識であるアラヤ識の起伏によつて生じたものであるから念々に生滅の現象をくりかへしてをるのであるから餘り頼りにする程のものでもないのである。されば、その頼りない未那識が原因となつてできた思想言説であるから、よけいに頼りにする程のものではないのであるから思想言説などによつて我の見解を起すと云ふことは大變な誤りである。と云ふやうな意味に於てお説きになつてをるのが先きに申しておいた五蘊の第三に上げられてをる想蘊の原理ではなからうかと思ひます。されば、次ぎの行蘊の原理もこの想蘊の原理をお説きになつた意味をモウ一步進めて考へてみれば、自然にその行蘊をお説きになつた意味も解つてくることであらうと思ひます。

### □阿頼耶識の性能

扱て、以前に私共の心の自體を大別して認識作用をなす心と、萬物を生じてやまない一大生命力たる心の二つがあることを楞伽經の文によつて述べておきました。仍で、その認識作用をなす心と云ふのは今迄に申してきた七通りの心識のことでありましたが、その一大生命力たる心と云ふのは之からお話しをしやうとするアラヤ識のことであります。それで、このアラヤと云ふ語も



やはり梵語であつて、譯して無没識むぼつしきとも亦は藏識ざんしきとも云ひ、アラヤ(Alaya)を又場合によつてはアリヤとも云ふことがあります。それで、このアラヤ識と云ふ心識について釋尊は楞伽經の說法の時に大慧に向ふて、

「大慧よ、アラヤ識は善不善の一切の原因となつて萬物を創造する。譬へば、魔術師がいろ／＼の物を作り出すやうに、アラヤ識は迷界のもろ／＼の事象を作り出す一の能力をもつてをる。だから、もろ／＼の生滅變化へんげする迷の事象は悉くアラヤ識から生ずるのだけれども、しかし、アラヤ識の自體はすべての相對差別を超越してをるものである。唯かぎりのない過去の世から萬物を差別してきた迷の習性によつて、アラヤ識の清淨な自體を攪亂するからして迷の事象が作り出されるのである。だから、そのアラヤ識の本性が麗しく少しの穢れもないところからして之を「如來藏」とも名づけられる。また迷界の事象を作り出すところからして之を「藏識」とも名づけるのである。……大慧よ、アラヤ識はその本性が本來清淨であつて、動しも生滅變化へんげすることはない。しかし、餘の七識は念々に生滅し念々に變化をしてゆくものである。」と、云ふ意味のことをお話しになつてをりますが、更にこれを唯識大意(本の名)によつてみると、

「アラヤ識は、これ一切諸法の根本なり。諸法の種子しゆじを攝して持てる心なり。この心なくば諸法の種子しゆじをば誰れかこれを持たん、持ち攝しやくむる所なくば何によつてか生ぜん。」

と、アラヤ識について説明がしてあります。故に、これ等の意味によるとアラヤ識と云ふ心識は眞妄和合の心識であつて、この無限大の宇宙は迷界も悟界も俱にアラヤ識の開展であり、またその中に存在してをる生物も無生物も有機物も無機物も、悉くみな一大生命力たるアラヤ識のうごめきに外ならないのであります。のみならず、先きにも申したとほり、私共の心の自體をなしてをる認識作用をなす心(他の七識)も亦このアラヤ識の起伏によつて生じたものでありますから、宇宙間に存在してをる何一物もみな悉くこの一大生命力がみなぎりみちてをると云ふことになりました。この意味からして云へば、宗教哲學で説くところの宇宙魂 *anima* の原理と同一の原理を説明してをるものであると云ふことが解ります。

されば、このアラヤ識は如何なる原理に基づいて宇宙一切の萬象を生ずるかと云ふと、それは、このアラヤ識には萬物を生ずる不可思議力をもつてをるからであります。言ひ換へると、先天的に或る一つの偉大なる潜性的エネルギーをもつてをるからであります。その潜性的エネルギー(不可思議力)——一大生命力(不可思議力)を佛教の心理學では種子と云つてをるのであります。ところが、こ



の種子にも先天的のものと後天的のものがあつて、その先天的の種子即ちアラヤ識が本來具有してをる偉大なる生命力、それを本有の種子と云つて、この種子からして萬象が創造される現象を種子生現行と云つてをります。ところが、この先天的の偉大なる生命力(本有種子)が現起して、それによつて更に新しくまた偉大なる生命力が再びアラヤ識に残されてゆきますが、その後天的の一大生命力を新熏種子と云ひ、さうして後天的に一大生命力がアラヤ識に残されてゆく現象を現行熏種子と云つてをるのであります。この種子生現行と現行熏種子との關係は、喩へば畑に本來埋まつてゐた種が肥料や濕氣や光線等の外縁の力によつて段々に成長し、終にはまた新しい種を結んでその種を畑に残すやうなものであります。斯のやうな現象が間斷なく繰り返へされていつてアラヤ識は測り知ることのできない過去の世から萬象を作り出して來眞理を生み出してきたのであります。また之から永遠の未來に向つて萬象を創造し眞理を生み出してゆくのであります。故に、アラヤ識と云ふものは決して個性的なものではありませんから、私共の五官に觸れるやうな筈もなければ隨つて生滅の原則に左右せられるやうな物でもありません。只創造を性としたところの一大生命力そのものであります。已上はアラヤ識の性能について極くその大略をお話ししたまでのものですから、猶詳しきことは次ぎの轉生篇に於て申し上げる心積りであり

ますが、先づ大體に於てはこれで佛陀が心の自體の作用に迷はされて、衷心の自己を見失ふてをる者の爲めにお説きになつた五蘊 Skandhas の原理がお解りになつたことであらうと思ひます。

#### 四 佛教の心理學より觀たる靈魂

偕て、已上は佛教の心理學で説くところの我々人間の心の自體の説明を申してきました。されば、全體世間で色々論議されてをるところの靈魂と云ふ問題に對しては、佛教の心理學の上からは全體どう云ふ批判を下せばよいであらうか、と云ふことについて聊か愚意を述べてみやうと思ひます。それについて先づ楞伽經を見ると、釋尊は大慧に向ふてかう話されて居ります。

「おん身等もろ／＼の人には常住實在の自我も靈魂もなく、又自己の所有と云ふべき何物の客觀もないことを知らねばならない。人間は只過去の力の轉換相續によつて生をうけ、肉體と精神とを生じて人間の體を構成するのである！」

と、已上は只原文の意味を申したまでとありますが、斯の様に佛教に於ては靈魂と云ふものがあつて、それが未來永劫に轉輾として恰も借家住ひの人間が必要に應じてその住家をかはつてゆく



やうに、再生を繰り返へしてゆくのだ、と云ふやうなことを言はないばかりではなく、靈魂と云ふことさへも言はないのであります。にも拘らず、私共は久遠の過去からして再生を繰り返へしてきた計りではなく、之からも永劫の未來に向つて再生を繰り返へしてゆくものであると云ふ事を教へてをります。すると、其處に何んだか矛盾的な感じが起つてくるけれども其れは決して矛盾でもなんでもないのであります。この理由は次ぎの轉生篇でお話しをする心積りであります。

### □言葉の不完全

右に申したとほりに、佛教に於て靈魂そのものゝ存在を否定してをると云ふことは、靈魂としての性能（何んだか妙に聞えるけれども一應かう云つておく）をもつてをるそのものゝ存在をも否定して了つてをるのではなくて、個性的な靈魂そのものゝ存在を否定してをるのであります。すればその性能とは全體どんなものであるかと云ふと、要するに、生滅の原則に左右せられないで然も萬象が生起し活動するについての原力となるところの性質と能力とを云ふのであります。ところが、さう云ふ性能をもつてをるところのものはさう澤山にあるものではありません。斯ういふと、お前は靈魂と云はれるべきものは、さう云ふ性能をもつてゐるものだと、勝手に決め込

んで仕舞つてゐるが、果してそれで間違ひはないかと、云はれてみると私は實際そのものを手にとつたこともなければ又みたこともないので、断言することはようしませんが、假りにでもかまはないから斯うでも決めてかゝらねば生活篇や本篇の最初に於て申したやうに、色々な矛盾が起つてくるから仕方ありません。さう言ひきるなれば仕方がないが、すればそのやうな性能をもつてをるところのものは、全體どんなものであるか、と問はれてみると、私はかういふ名のものでかういふものぢやと明瞭に云ふことはできません。かう云ふと、またそんなことを言つて責任をのがれやうとするのだらうと思はれる人があるかも知れないが、私が言ひきることが出来るやうなれば、今日までには随分この問題に没頭して研究をした學者もありましたから、それ等の人々がちやんと言つて了つてをります。しかし、云つてをらない限りには我々人間が平常使つてをる語が不完全だから、言ひ換へるとそのものを言ひ詮はすだけの完全な語が人間社會には無いのだと云ふより仕方ありません。しかし、お前の言つてをるそのものは靈魂といつてをるではないか、と云はれる人があるかも知れないが、それはその眞實のものを完全に言ひ詮はした語ではなくて、便宜上その眞實のものに對して名づけた一の記號ではなからうかと思ひます。されば、我々の使つてをる語がどれ程に不完全なものであるかと言ふ證據には、砂糖はどんな味のす



るものかと云ふと、甘い味のするものだと言ふことだけは言へますが、しかし、その甘い味はどんな甘い味ひがするのかわかそれを言つてみよと言はれて、おそらくその甘い味ひを言ひきる人はなからうと思ひます。ところが、眞實はその言ふことのできないものが眞實のものであるけれども、悲しいことにはその眞實のものを知るだけの語が人間社會にはないのだから仕方ありません。と云つて、その儘うつちやつておいては不便で仕方がないからして、そのものに對して砂糖といふやうな一つの記號をつけて、それで用を達してをるのであります。

### 靈魂といふ語は一つの記號に過ぎず

斯ういふ譯ですから、生滅の原則に左右せられないで然も萬象が生起し活動する原力となる性能をもつてをるところの、眞實のものは逆も我々人間の語では言ひ詮はすこともできず、また知ることができないのも最もではないでせうか？ と云つてその儘では不便で仕方がないからして、不完全ながらにでもそれは不可思議なる一大生命力である、とでも云つておけばよからうと思ひます。しかし、斯う云つたからして眞實のものを完全に言ひ詮はしてをるのではないけれども、先づ人間の語をもつてしては完全に近い言ひ詮はし方をした心積りであります。ところが、これ

でさへも餘り語が漠然としてをるために何んだか不自由な感じがするからして、それを更に具體的に不完全化して儒教では靈魂と云ひ、哲學では眞我（靈性神的自我）と云ひ、佛教ではアラヤ識と云つて各々その立場々々によつて勝手に個性的な記號をつけてをるのではなからうかと思ひます。それをその記號——語——に囚へられてあるとかないとかと云つて論議するのは、恰も月をゆびさしてをるその指をみて、月があるとかないとかと言つて騒ぐのと餘り大差はなからうと思ひます。ですから釋尊は楞伽經に、

「言葉とは喉や舌や唇や顎や齒などの輔けによつていろ／＼の音聲を出し、さうして相對峙して談話をなし思想を他に知らしめるものを云ふのであるから、言葉は人と人との間に假りに造られたもので、絶えず相對差別を表はすことを本義としてをる。だから、言葉と云ふものは人をして常に相對の習性をつけ差別の考へを起し増さしめるものである。」

と、云ふやうな意味のことをお仰せられてをります。ですから、靈魂と云ふ語も、丁度善と云ふ語に對して惡といふ語があるやうに、肉體と云ふ語に對して人間が假りに靈魂と云ふ語を造つて一つの記號として使用してをるのでありますから、不可思議なる一大生命力——この言ひ詮はし方も不完全ではあるけれども——そのものを何も靈魂と云はなくとも、もつと完全な言葉があれ



ば、その言葉をもつて記號としても差支へない譯であります。

### □阿頼耶識と靈魂

仍で、佛教の心理學では不可思議なる一大生命力そのものを靈魂と云はないでアラヤ識と云つてをるのであります。斯う云ふと、何もこと更にアラヤ識と云はなくても靈魂と云ふ語が一の記號として使はれてをる不完全なものであるならば、アラヤ識と云ふ語もやはり一の記號であつて不完全なものぢやないかと云はれる人があるかも知れないが、それは最もな言ひ分であります。しかし、このアラヤ識と云ふ語は靈魂と云ふ語よりも餘程言葉によつておこる弊害がさけてある語のやうであります。言ひ換へると、不可思議なる一大生命力そのものを知らせるためには、靈魂と云ふ記號よりもモウ一步進んだ記號であると私は思ひます。それは全體どういふ譯かと云ふと、先きに楞伽經に説かれてある言葉と云ふものゝ意味とその弊害とを申しておいたやうに、言葉といふものは各自の思想を交換するのに便利なやうに、人と人との間で假りに造られたものでありますから、相對差別をあらはすことがその本義となつてをる、隨つて言葉と云ふものは便利たものであるだけにその弊害が多い譯であります。即ち人間に相對差別の習性をつけるのは言葉

の弊害だと云はねばなりません。だから、その弊害を避けるために相對的な言葉を使はなくてもその眞實のものが言ひ詮はせるなれば、その言葉の方が餘程よい譯であります。故に、アラヤ識と云ふ言葉は餘程その弊害が除かれてゐて然も不可思議なる一大生命力そのものを知らせるには靈魂と云ふ記號よりも餘程完全した記號のやうに思はれます。併し、相對味がすくない語であるだけに人の記憶には留りにくからうと思ひます。何んだか語の品くらべをしてをるやうでありませんが、モウ少し品くらべをしておかねばなりません。仍で、靈魂と云ふ語は白に對して黒と云ふやうに肉體(肉)と云ふ言葉に對しての靈魂(靈)と云ふ言葉であるからして、非常に相對味の濃厚な言葉であると云はねばなりません。隨つて、記憶には留り易いけれどもそれだけ弊害は多い譯であります。即ち肉體といふものは個性的なものであつて然も生滅の現象をもつたところのものであるから、不知不識のうちに相對的な觀念が混つて靈魂といふものも個性的なものやうに思はれたり、また生滅の現象をもつたところのものやうに思はれたり等して、靈魂といふものはイヤ個性的なものぢやとかないとか、また生滅すべきものぢやとかないとかと云つて騒がねばならないのであります。併し、アラヤ識と云ふ語になると餘程それ等の觀念がうすらくやうに思はれます。ところが、それを不可思議なる一大生命力とさへ言つておけば、個性的な觀念も起



らないですむのですけれども、それでは了解ができにくいからして、少し個性的な言ひ詮はし方をしてアラヤ識と云つてあるのではなからうかと思はれます。併し、アラヤ識と云ふ言葉は靈魂と云ふ言葉よりも相對味がうすいだけに眞實のものに觸れるには便利であらうと思ひます。斯う云つてくると、思ひ出すのは言葉と云ふものに對する釋尊の説明であります。即ち、

「言葉と眞理とは大差があるけれども、しかし、證りの眞智を得た人はこのやうに言ふであらう」「言葉と眞理とは同一でもないがまた相違もしてゐない」と、だから、若し眞理と言葉とが全く相違してをるものなれば言葉によつて眞理を知ることができないであらう。故に言葉によつて眞理を知ると云ふことは、譬へば燈火をもつて物を照らすやうなものであつて、おん身等は言葉の燈火によつて眞理を知り、また言葉の導きによつて言葉を離れた眞理を證ることが出来るであらう。」

と、云ふ意味のことを楞伽經にお仰せられてゐますが、言葉と云ふものに對してかう云ふ見解をもつて居られた釋尊であるからして、私共に不可思議な生命力の眞實のものを知らせるのに都合がよいやうに、靈魂と云ふ語を使はないでアラヤ識と云ふ言葉をお使ひになつたのではなからうかと思ひます。併し、これは私の憶測ですから間違つてゐたらお正しをして頂きたいのです。

さて、右に述べたやうな譯であるからして、私は世間の人々が言つてをる靈魂とか魂とかと云ふものも、佛教の心理學で云つてをるアラヤ識と云ふものも、その言葉こそは違へ同じく宇宙の不可思議なる一大生命力そのものを指して云つてをるのではなからうかと思ひます。ところが、已前にも申したとほりに、私も皆さんも造物主の手によつて恰も子供が土人形を拵らへるやうにして造られたものでもなければ、また何處からか涌いてきたのでもなくて、この不可思議なる一大生命力(アラヤ識)のうごめきによつて出來上つてをるのであります。即ちお互ひがいろ／＼と思维想像をしたり、またいろ／＼な事物を了知識別なんかするのは、このアラヤ識の起伏によつて生じたところのマナ識、意識、前五識等の心識があるからであります。またこの五尺の肉體が存在してをるのも、釋尊が、

「おん身等が自分の身體だと思つてをる肉體も、またおん身等が用ひてをるもろ／＼の物體も、すべておん身等のものではない。ありとあらゆる一切のものはみな悉く宇宙にみちうごめく心(アラヤ識)の顯はれ影する假りの相である。」

と、楞伽經にお仰せられてをるやうに、この不可思議なる一大生命力(アラヤ識)のうごめきの顯はれであります。のみならず、私共の身邊を取巻いてをる生物も無生物も亦一切の現象もみな悉



くアラヤ識のうごめきによつて生じたのでありますから、私共が現在かうして生活してをるのは宇宙の不可思議なる一大生命力のうごめきによつてであります。ところが、私共の肉體も精神も亦一切の事物現象も、一大生命力のうごめきによつて生じたところのものでありますから、必ず滅の現象がなければなりません。即ち生滅の原則に左右せられてそれらのものは念々に生滅しつゝあるのです。

しかし、それ等のものを創造するところの不可思議なる一大生命力(アラヤ識)は、その生活によつて生じるところの行爲のエネルギーと體用因果の關係を結んで未來永劫にその性能を持ち續けて行つて、生の一路を顯現してゆくのであります。(前項及び後の轉生篇を参照) 故に、言葉を換へて言ふと、無窮に生の一路を辿る靈の實體であるとも云へるであらうと思ひます。

### □アラヤ識と無我

ところが、佛教の心理學で説くところのアラヤ識は釋尊が楞伽經に、

「佛は無智なものが無我的教をきいておどろかないやうにアラヤ識といふものがあると説く、けれども、アラヤ識は無相無差別のものであつて、五官にふれるやうなものではない。佛は無

智の者のために空、無相、眞實、涅槃、不生不滅等の言葉をもつてアラヤ識を説明してゐる。だから、おん身等及び之から後の世の人々は自我に執はれてはならない。譬へば、陶器師が泥をもつていろいろな器をつくるのに、人工、水、棒、輪、繩等の力をかりるやうに、佛も無我的教をとくには、智慧の力をかりて、或はアラヤ識なりと云ひ、或は眞實なりと云ひ、或は涅槃なりと云ふのである。だから、予が説くアラヤ識は無我的教であるが、自我に愛着してをる人々を引き入れて、その謬見を離れしめ、解脱を得させて速かに佛の悟りを成ずることができらるやうに、自分はアラヤ識の教をとくのである。」

と、いふ意味のことをお仰せられてをるのをみても、私共の靈の實體といふ物は決して個性的なものではなくて、宇宙的の不可思議なる一大生命の力であるといふことが解るのであります。にも拘らず、それを個性的な言ひ方をしてアラヤ識——世間では靈魂——と云はれてをるのは、私共人間が相對差別の習性によつて個性的な觀念が強いものであるから、その間違つた思想を利用して宇宙的の一大生命力に觸れしめんために、個性的な言ひ方がしてあるのではなからうかと思ひます。言ひ換へると、自我の觀念にとらへられてをる私共に、その自我的な觀念より離れしめて無我 Anātman の眞生命に觸れさせやうとする、一の方便に外ならないのであります。



仍で、一言しておきたいのは自我と無我とについてであります。私は無我と云ふ語に對しては自我と云ふよりも寧ろ有我と云ふ方がよからうと思ひます。ところが、これをモウ一層完全に言ふと、有限我に對して無限我と云ふ方が餘程了解がしやすくなからうかと思ふのであります。全體私共が我 *Atman* と思つてをるものは、時間的には僅かに五十年内外に、空間的にはほんの五尺足る足らずに制限せられてをるところの一時的な心理的の限りのある我であつて、その外のものに對してはすべて差別的に私有的に計量的に他と云ふ觀念でもつて支配をしてをるのであります。ところが、それが有限我であつても亦無限我であつても何れにしても、要するに我の可愛くないものはありません。假令それが無生物であらうが生物であらうが、我を愛する状態といはるか作用といはるか、要するに我を愛する働きの現はれてゐないものはなからうと思ひます。されば、全體その愛とはどんなものと言ふのかと云へば、生命保存の要求そのものが即ち愛であります。ところが、私共人間の生命といふものは、五蘊が結合状態にある間は生命があるのであつて、それが解體して了へば最早生命はありません。——その他の動物は我々人間とその五蘊の結合状態が少々違つてゐるだけのものであつて、生命の有無はやはり五蘊の結合解體にあるのであります。——また、之を無生物について考へてみると、彼の化學でいふところの元素間の親和力、

物理學でいふ分子間の凝集力などによつて、すべての物質はその生命の存在を保つてをるのであります。が、もし一旦その親和力または凝集力がなくなつて了へば、元素または分子は各々離散してしまふから最早その物質は存在しません。即ちその物質の生命がなくなつたのであります。ですから、先きに申しておいた言葉の本義に基づいて言へば、愛によつて生命は保存せられ憎によつて生命は失はれると云ふ事になります。仍で、我々人間が自分々と云つてこの五尺内外の有限我を可愛がるのは如何なる譯か？ それには色々の理由があらうけれども、要するところは五蘊の結合状態を何時までも保たせたい、即ち死にたくないから可愛がるのであります。また、彼の犬が骨肉の一片を奪ひ合ひ、豚が泥の中で食物をあさるのも死にたくないからであります。また、これを無生物の上について觀ても、化合物は其化合物状態を出来るだけ長く續けやうとする傾向を持ち、固形物は其固形状態を成るべく長く維持しやうとする性質をもつてをるのをみても、この宇宙間に生存し存在してをる一切の生物無生物はみな悉く愛に燃えてをる、言ひ換へると熱烈なる生命慾をもつてをることが分るであります。ところが、生滅の原則として結合したものは離散します。即ち生じたものは滅せずにはゐません。すれば、それ等の生物無生物がどれほどに生命の保存を要求してみたところが、何時ぞにはその生命を失はねばならぬでせう。と



ところが、そのやうに生命慾に燃えてをるものを生滅の原則の中において惨めにもその生命を失はさせるのはこれ誰の罪でせう。言ふまでもない我々の罪であると言はねばなりません。かう言つて仕舞つては一寸お分りにならないだらうと思ひますから、少し話を後へもどして申しますが、凡ての生物無生物はみな悉く不可思議なる一大生命力（アラヤ識）のうごめきによつて生じたものであります。ところが、このアラヤ識は丁度鏡のやうな静かな海水のやうに本來は無相無差別清淨無垢なものであるにも拘らず、波が起る即ち迷界の事象（宇宙的）の一切の生物無生物及び現象を生ぜしめるといふことは、我共が有限我——自我——に愛着して相對差別の風を起すからであります。しかし、若し私共が相對差別の風さへ起さなければ、アラヤ識の海はその本性として何時迄も鏡のやうな静けさの状態にありますゆゑ、隨つて迷界の事象（波）を造り出す譯はありませんから、私共の身邊をとりまいてをる一切の生物無生物を不生不滅の状態にあらしめて無限の生命を與へてやることのできる譯であります。されば、その相對差別の風を起さないやうにするには如何にすればよいかと云へば、ありとあらゆる生物無生物の中にも不可思議なる一大生命力がみち／＼てをることを知つて、その生命力を愛してゆく即ち一切の生物及び無生物のなかに自己を見出して、その見出し得た自己の分子を愛し育て、ゆくことに心懸けねばなりません。即ち自

我の觀念を脱して無我の天地に到ることに努力せなければなりません。ですから、言葉にとらはれて無我と云へば我といふものがなくなることを言ふのだと思つては大へんな間違ひであつて、無我と云ふのは時間と空間との束縛を脱してをるところの無限的の我を云ふのであります。ですから、自我の生活者は眞實の我——自己——の影法師をこれが我である自己であると思つて、それを愛してをるのでありますから、實は眞實の自己——我——を見失つて、すべてに幻惑された囚はれた生活をしてをります。しかし無我の生活者はそんな影法師の我——自己——は愛しません、眞實の我——自己——をよく知つてをりますから、その眞物の自己を熱烈に愛してゆきます。隨つて、その生活は周圍に幻惑されない囚はれない生活であります。ですから、どちらかと云へば、自我の生活者には我がなくて、無我の生活者に却つて我がある譯であります。

#### □靈的生活の本領

ところが、我々は悲しいことには、時間と空間とに束縛をせられてをる有限我（眞實の自己の影法師——一時的幻影の我）は愛する氣になれます、否熱烈に愛してをるのであります。それが爲めに、自分達の身邊をとりまいてをる一切の生物無生物の中に自己の分子のあることを見出し



得ないで、それ等のものをすべて差別的な計量的な觀念をもつて他なりと批判して、影法師の我——有限我——を愛する程にそれ等のものを憎しんでをるのであります。ところが、愛によつて生命は保全せられ憎によつて生命は失はれると云ふことは先きに申しておいた通りであります。ところが、我々は影法師の有限我をトコトン愛しながら、眞實の自己である無限我を愛さないと云ふことは、自分は可愛々々と云つて可愛がつてをるやうであります。その實は可愛がつてをるのではなくて自分勝手に自己の眞生命を惨めにも奪つてをるのであります。ですから、屢々申すところ生理的生活の奴隷になつてをる人は惨めにも衷心の自己を殺しつゝあるのだ、と云ふことになつてきます。しかし、無限我の一部分でもよいから即ち有限我の中に幾分でも眞實の自己を知ることができたならば、今日迄影法師の我を愛し眞實の我を憎しんでゐたために、その眞實の我は傷手を負ふて今にも生命を失はんとしてをることに氣付くであります。すれば、今度はどうしてその眞實の我を愛して生命力の回復に努力せすにゐられませうや。言ひ換へると、今まで相對差別の觀念をもつて他なりとみてをつた一切の生物無生物の中に自己の分子を見出すことに努力せすにゐられませう。しかし、もと／＼それ等の生物無生物の全體が可愛自己であるのですけれども、どうも仕方ありません、今日迄他なりとみてきた習性によつてどうかするとやは

り他なりといふ觀念が起つて憎しみの想ひをもつやうになつて仕方ありません。併し、其處に私共が眞生命に生きんとする努力の生活が起つてくるのではないでせうか。斯くして我々ができるだけ相對差別の觀念を排除して行つて、ありとあらゆる生物無生物の中にできるだけ多く自己の分子を見出してそれを理解し愛してゆくところに、私共の愛は益々擴く、益々深められてゆくのであります。しかし、斯う云ひつゝもやはり相對差別の習性に捕はれて、何んだか他を愛してやるのだ愛してゆくのだといふやうな氣持になります。それでもよろしい兎にも角にも他を愛することがとりもなほさず自己を愛してをることになるのであります。その自己を愛することが即ち眞實の自己を育て、ゆくことが無量壽を獲得せんとするところの靈的生活であり宗教的生活であります。しかし、先きにも申したとおり、私共はどうしても相對差別の觀念を一時に除き去ることができませんから、隨つて一切の生物無生物が一時に其儘自己になりきつて仕舞ふといふことは全然ありません。仍で、努力の生活によつて漸々に自己を擴張し深めてゆかねばなりません。そのやうにして自己が擴張せられ深められてゆけばゆく程慈愛の精神は擴く且つ深められてゆくのであります。斯くなつて往くところに自己の生の世界は段々に進化的に淨化的に運命づけられてゆくのであります。仍で、宇宙そのものが自分になりきり隨つて慈愛の精神が宇宙



全體に及ぼされた生活が即ち無量壽の獲得者たる佛陀の生活であり、其處に現はれてくる生の世界が即ち極樂淨土なのであります。言ひ換へると、全然の無我の生活者が佛であり、その生活者の世界が淨土なのであります。すれば、全然の無我の生活者が何ぞ無量壽の獲得者であるかといふと、相對差別の觀念にとらへられた自我の生活者の我そのものは時間と空間とに束縛せられてをる我でありますから、如何程にその我を愛しても生滅の原則として其我の生命には限りがあります。随つて、その生の世界には斷えず生滅の原則が繰り返へされるべき譯でありませう。しかし、無我の生活者の我そのものは時間と空間との束縛を脱して仕舞つてをるのですから、その我は生滅の原則に左右せられるやうなことはありません。随つて、その我の生命は無量壽であり、その我の能力は無量光であります。また、その生の世界とても生滅の原則に左右せられるやうな世界ではなくて常住の世界であります。だから、私共が無我の生活を段々に擴め且つ深めて往くことが、とりもなほさず衷心の自己を愛し育て、ゆく靈的の生活であり、また時間的には無量壽を獲得し、空間的には無量光の所有者となつて、常住の世界の生活者となる所以であります。

#### □現實生活の尊き所以

ところが、その無我の生活を段々深め擴めて往くためにはやはり肉體的の生命がなければならず、またその肉體の生命を養はんためには喰つてもゆかねばならず着てもゆかねばならず住むもしてゆかねばなりません。ところが、只ボンヤリ手をつかねてゐては誰も食べさせてもくれず着せてもくれず住はせてもくれませんから、それが爲めにはやはり働かねばならず金も蓄へねばならず智識もみがいてゆかねばなりません。ですから、現實の生活そのものは決して兒戲同然なものではなくて、蓄財、修養、學問はみなこれ衷心の自己を育て、ゆくについては無くてはならぬ生命の糧なのであります。にも拘らず、自己を見失つてをる人々はその糧を蓄へることのみに腐心して、その腐心して得た生命の糧を衷心の自己に喰べさせないで、自分勝手に糧を持ちながら自己を餓死させてをるのであります。しかし、それは最もなこととせう、何を云つてもその糧を喰べさせる肝腎の自己を見失つてをるのですから喰べさせたくても喰べさすことができない譯であります。随つて、何んの益にもたないけれども折角苦心して得た糧ですから、最後には焼いて灰にして仕舞ふ、此五尺の身體にでも消費させなければ仕方がなくなるのです。ところが、世間にはそれも充分になし得ないで只無闇と山程に積むことを楽しみにしてをる人間もあります。人間もかうまで成つて了つては何んとも仕方ありません。しかし、思つてみれば可笑しな話



しぢやありませんか？ 斯う云ふ類の人間は丁度倉の中へ食べるべき米を一杯につめてゐながら、それを食べずに餓死をするのと同じ類のものであります。ところが、そんな人かもしあつたとすれば、さぞ世間の人々は馬鹿な奴ぢやと言つてキツト笑ふに相違ありません。しかし、人のことを笑ふ以前に先づ自分をみつめて見ませう。倉の中に米を一杯つめてゐながら、それを食べずに倉の前で餓死をしてゐないでありますか？ 私はこんな類の死骸がいまの世にはゴロ／＼転がつてをるだらうと思ひます。否そんな死骸が段々にふえてゆきつゝあることを斷言して憚りません。

扱て、右に述べたやうな譯で此現實の生活が尊いものになり、生理的生活も必要になつてくるのですが、私共が限りのない過去の世から習慣づけられてきた相對差別の習性は、逆も五十年や百年の短期間では取り除くことはできません。すれば、その習性は無量劫に涉つて矯正してゆかねばなりません。その間假令幾分でも相對差別の習性の不純分子をもつてをる間は、私共の生の一路には絶えず生滅の原則が繰り返へされてゆく譯ですから、隨つて生は限りなく轉回されてゆきます。すれば、その生が無限に轉回されてゆくのは如何なる原則に基づいてでありませうか？ その原理を次ぎの轉生篇に於て聊か申しておく心積りであります。

## 轉 生 篇

### 一 宇宙の必然性

私共の生が永劫の未來に持續してゆくのは(進化的にか或は退化的にか)物理學的方法で、若しくば生物學的方法で繼續する計りではなくて、宇宙の必然に基づいて私共の一舉一動が因となつて果を生み、その果がまた因となつて果を生みして限りなく連續していつて終に斷えると云ふことはないであります。それは丁度燃焼せられたところの石炭は灰となつて了ふけれども、その間に起されたところの力エネルギーの爲めに水は湯となつてをります。その湯は又更に相すがたを變へて蒸氣となつてをります。それは水が死んで湯と生れ變りその湯が死んでまた蒸氣と生れ變つたのであります。かうして生れてきた蒸氣は假令消散して死んで了つてもその間に起されたところの力エネルギーの爲めに、大船は幾百海里の大海を航海して船客は遠い彼方へと運ばれてゆくやうなものであります。これと同じく、私共の毎日の言動の上についても精到に因果の交渉關係を調べてみる



と、一言の微も一行の細も因果の原則に基づいて、その形は變りその相は異つてゆくけれども決してそれが斷滅してしまふと云ふやうなことはなく、永劫の未來へと繼續してゆくものであります。故に大聖釋迦牟尼世尊は淨土の大無量壽經に、

「人、世間の愛欲の中に在て、獨り生じ獨り死し獨り去り獨り來る。行にあたりて苦樂の地にいたり越く。身自らこれをうくるに、代る者あることなし。善惡變化して殃福とところを異にす。あらかじめ嚴待してまさしひとり趣入すべし。遠く他所に到りぬれば能くみる者なし。善惡自然にして行を追ふて生ずるところなり、窮々冥々として、別離すること久しく長し。道路同じからざれば相見ること期なし。甚だ難く甚だ難し。また相ひあふことを得んや。——省略——かくの如きの世人、善をなせば善を得、道をなせば道を得ることを信ぜず。人死して更生じ、惠施して福を得ることを信ぜず。善惡のことすべてこれを信ぜず。之を然らずとおもふて、終に是とすること有ることなし。——省略——吉凶禍福競ふてこれをなせども、一として怪しむものなし。生死の常の道うたゝ相ひ嗣ぎてたつ。或は父は子を哭し、或は子は父を哭す兄弟夫婦かはるゝ相ひ哭泣す。顛倒上下して無常根本なり。皆まさし過去にすぎ去るべし、常に保つべからず。教語を以て開導すれども、之を信する者は少なし。是れをもつて生死流轉

して休止することあることなし。かくの如きの人、瞋冥衝突にして經法を信ぜず。心に遠き慮りなくして、各々意を快くせん欲へり。愛欲に痴惑せられて道德をさとらず。嗔怒に迷没して財色を貪狼す。之によりて道を得ず。當に惡趣の苦に更へりて生死窮りやむことなし。哀れなるかな甚だ傷むべし。」

と、お仰せられて居る如くに、佛教に於ては今日の私共の境遇——生の世界(果)——は過去の宿業(因)によつて作り出されたものであり、また現在の一擧手一投足は因となつて私共の未來の境遇——生の世界(果)——を造り出すものであると云ふことを教へてをるのであります。

### □因果の原理

扱て、因果と云ふ語は便宜上簡略した語でありますから、頗る簡單ではよいけれども未だ宇宙の必然性を完全に言ひ詮はしてはゐません。仍で、之を完全に言はうとするならば、因緣 Hetu Pratyaya に依つて果を生じると云はねばならないのであります。その譯は、原因だけでは何んとしても結果を生じる譯にはゆかない、必らずその原因に緣と云ふものが働かなければ結果を生じないのであります。之を一つの例によつて申すとよく分りますが、彼の稻と云ふ結果から云ふと



穀は原因であります。所で、穀だけが其處にあれば何時でも稲になり得るものであるならば百姓程結構なものはありません、何も苦勞して土地を耕したり雑草を取り除いたり又高い金を拂つて肥料をやらなくとも、僅に二三升の穀を其處らあたりに撒きちらしておきさへすれば、五斗六斗と云ふ澤山なお米がとれる譯ですから世間にこんな結構なことは他にはありません。併しこんなうまいことは何處を探しまはつたところがあるものでない。田舎の百姓家の倉の中には澤山な穀が積んであるけれども未だ倉の中に稲が生えたと云ふことを聞いたことはありません。すれば、穀からしてどうして稲が生じるかと云ふと、誰でもよく知つてをるとほり田を耕やして其處へ穀を蒔いて、適當な濕氣と、溫度と、光線とを與へ未だそれでも完全に稲は成長せないからして必要に應じて有機物、無機物をそれに與へてこそ初めて完全な收穫を得ることができるのであります。兎にかく斯の様に種が芽を出して成長する爲めには水や、日光や、肥料等の如きものゝ力が手傳はなければならぬ、即ち種(因)に縁の力が働かなければ實(果)はできないのであります。仍で、佛教に於ても因・縁・果と云つて因 Heiun に縁 Pratyaya の力が働いて初めて果を生じるものであると云ふことを教へてをるのであります。否佛教に於て斯う言ふのではなくして、之が宇宙の必然的の原則なのであります。

### □ 因 縁 Hetupratyaya

斯の様に、因が果を生じる爲めには縁と云ふものが必要であります、併し縁と云つたところで只一口に縁と言つてしまふことは出来ない。仍で、無量無數にあるところの縁を佛教では四種に大別して四縁と云ふことを教へてをるのであります。即ち先づ第一には因縁と云ふ縁であります、之は因そのものが即ち縁であると云ふ意味であるが、さらば因が何ぞ縁になるかと云ふと、因が果を生じる即ち種が實を結んだその結果からして種を觀ると、その實を結んだと云ふことに對してはその種は確かに一つの大きな力となつてをるのであります。即ち果の上から觀るとその因は果を生ぜしめる爲めには正しく一つの助力となつてゐますから、因が即ち縁となる譯であります。故にこの種類に屬したところの縁を總括して因縁と云つたのであります。

### □ 増 上 縁

さて、その次ぎには増上縁と云ふ縁であります、先づこれを一例について申しますと、假令種を蒔いたところがその種の自然的發育力即ち種の機械的エネルギーの發動を妨げるやうな不順



な天氣、又は雜草のやうなものはその種が發育する爲めの助力になるとは云へません。併し、順當な天氣や又は肥料を施したり雜草を取り除く等のことは、その種の自然的發育力を増進させる爲めの助力となるであります。言ひ換へると、種の機械的エネルギーを誘導する一つの力となつてをるであります。之と同じ理由であつて、因の自然的開發力を助けるところの凡ての力は正しく果を生じる爲めにとつては立派な一つの縁であります。故にこの種類に屬した縁をば佛教では與力不障の増上縁と云つてをるのであります。

さて、已上に申した二種の縁は物質上に於て言つたのでありますが、因果の法則は常に物質界のみに於て行はれるべきものではなくて、精神界に於てもやはりこの因果の法則は秩序整然として繰り返へされてをるものでありますから、隨つて精神上に於ても縁と云ふものがなくてはならない譯になります。

### □等無間縁

仍で、その精神上に於てもやはり二種の縁があります。先づその一つは等無間縁とうむかんねんと云ふ縁であります。之は私共の胸の中に刹那々に起つてゐる種々萬端の心の作用その物が一つの縁にな

つてをると云ふ意味のものであります。洵に、我々の心の變化してゆく有様は、夏の空に底氣味そこきみの悪い様な形をして現はれてくる夕立雲が刻一刻とその形が變つてゆくよりも未だ急速に變化をしてゆくものであります。即ち前の一刹那に思つてゐたことは今現在の一刹那に思つてゐる事と違つてゐました。又今現在の刹那に思つてゐることは來る一刹那に最早違つてをるのが私共の心の有様であります。故に佛陀は私共の心の有様を散亂龜動と言つてをられますが、斯の様に刹那々に變化してゆく心の上にも、やはり因果の原則の規律正しく行はれてをると云ふ事は、私の今現在一刹那に於ける心は來る一刹那に起つてくる心の爲めに現在刹那の位を讓つて過去の世界へと去つてゆきます。すると來る刹那の心はその讓られたところの位をみたす爲めに現在刹那の心となつて現はれてくることは、恰も川の水が不斷に一つの流れを形ち作つてをると同じ原理によるものであります。かう云ふと何んだかまどろしいやうですが、この變化状態が極めて急速に駁々として行はれてをるのが私共の心の現起してくる有様であります。仍で、後念が起るにいては現在刹那の位を讓つたところの前念は、その後念が生起する爲めには正しく一つの助力となつてをる譯であります。即ち縁となつてをります。而もその前念と後念との間一髮を容れる餘地がありませんからして、これを等無間縁と云ふのであります。



## □所縁縁

斯のやうに、後から後へと恰もフィルムが回轉してゆくやうに種々様々の心が起つてくるのは勿論前念も縁となつてゐるけれども、併し其處に客觀的對照となるところのものがなかつたならば心の作用と云ふものが起る理由はありません。人が當世流行の着物を着て歩いてゐるのを見たなり、又呉服屋の陳列棚に飾つてあるのを見たりするからして自分もできる事ならあのやうな着物を着たいものだ、今時に流行らないこんな着物を着てゐては人が笑ひはせんか知らんと云ふ様ならくでもない心が起つてくるのです。若し豆腐屋へ三里油屋へ一里と云ふやうな山間の片田舎に住ひをしてゐたら、人が着て歩いてゐるのを見ることがなければ又呉服屋の陳列棚を覗きたうても覗くことが出来ないからして、此頃はどんなものが流行してゐるのやらそれさへも知らないで済んで了ふのです。随つてあんな着物が着て歩きたいと云ふやうな心が起りさうな筈もありません。斯の様に人間と云ふものは色々なものを見たり聞いたりするからしてあゝもしたいかうもしたい彼奴があゝいふた此奴がかういふた等と云つて、色々煩惱を燃すのであります。ですから、みたり聞いたりしさをせなければ欲しいと云ふ心も起さなで済むであらうし腹も立てずに

済むのであります。斯う云ふ譯ですから、私共の身邊に羅列してゐるところのすべての客觀事物は確かに私共に色々のことを思はせる縁となつてゐるでありませう。故に佛教に於てはこの種の縁を總稱して所縁縁と云つてゐるのであります。

## □因果は宇宙の必然性なり

さて、先きにも述べておいたやうに因と云ふものは自然的開發力と云つて、何かの縁に觸れさへすれば果を生じやうとする性能をもつてゐるものであります。それは丁度、高いところにある水が低いところへ流れやう流れやうとするやうなものであります。併しいくらその様な性能をもつてゐる水であつても、邪魔物があつては低いところへ流れてゆくことはできないけれども、その邪魔物を取り除くと云ふ縁の力さへ働けば何時でも低い方に向つて流れてゆくやうに、假令因果を生じる機械的エネルギーがあつても、そのエネルギーを誘動するところの四縁（因縁、増上縁、等無間縁、所縁縁）のうちの何れか一つが、その場合々々に應じて働かなければ果を生じることはできないのであります。仍で、佛教に於ては因・縁・果と云ふことを教へて、私共を中心として起る宇宙的一切の現象はもとより凡ての物質にいたるまで何一つとしてこの因・縁・果の原則



を離れて起り、また生じるものはないと云ふのが、佛教に於ける因・縁・果の原理であります。否  
佛教に於ける原理ではなくてそれが宇宙の必然性なのであります。

## 二 Kharma 業とは如何なるものか

偕て、宇宙の必然性を抽象的に説明をしてあるのが因・縁・果の原理であり、それを更に動的観  
察をして生命論的に言ひ詮はしてあるのが Kharma 業の原理であります。すれば、全體その業  
Kharma とは如何なるものであるかと云ふと、一口に云へばそれは一種の力——エネルギー——  
でありまして、あらゆる存在物が迷界に流轉するのはこの業——力——の爲めであります。仍  
で、佛教ではすべて宇宙を動的に觀察して宇宙は「一つの力のうごめき」であるとして、あらゆる  
存在物が生滅起伏するは、只その力（業 Kharma）の轉換によつてあらはれるのであると教へ  
てをるのであります。

### □ Kharma 業の作業

ところが、只 Kharma 業と言つたところが、語があまり簡略せられてゐますからしてその眞意

を知ることは一寸難かしからうと思ひます。仍で、これを解るやうに言はうとするのには業因・  
業縁・業報の原理と云はねばならぬだらうと思ひますが、一々こんなまどろしいことは言つて  
をられないからして普通は業 Kharma と言つて了つてをるのであります。ところが、それを業因  
業縁・業報といふからと云つてそんなものが一つ一つ別にあるのだと思つては大へんな誤りであ  
つて、それは何れも同一物をさして云つた語ではあるけれども、併しその作用をみる立場が違つ  
てをるからしてその言ひ詮はしかたも違つてくる譯であります。それは丁度食事をする内容その  
ものには少しのかはりもないけれども、朝の食事を朝食と云ひ、晝の食事を晝食と云ひ、夕方の  
食事を夕餉と云ふやうなものであります。それを朝の食事を晝食と云ふ人もなければ晝の食事を  
夕餉と云ふ人はなからうと思ひます。

之と同じ譯のものであつて、私共の生活の行爲を現在を立場としてみる時には過去に爲した行  
爲を業因と云ひ、現在の生活の行爲をば業報と云はねばなりません。また未來に立脚して現在の  
行爲を云ふ時には業因と云はねばならず、未來の生活の行爲をば業報と云はねばならない譯であ  
ります。ところが、假令業因は業報を現はすところの能力はもつてゐても、それに縁の力が働か  
なければ業報を現はすことができないことは先きにも述べておきました。仍で、その業因を育て



るところの行爲は業因ともいへなければ業報とも云ふことはできない、やはりそれは別に業縁と云はなければなりません。ですから、只一口に業 *Karma* と云つて仕舞ふことは不完全な言ひ方であるといふのであります。併し一々こんな面倒なことは云つてをられないからして、その内容の同一なところからして、それ等を總稱して業 *Karma* といふ名稱をふしてをることは、朝食も晝食も夕餉もその内容は食事をするものであるからして、それを總稱して食事と云ふやうなものであります。併し、その食事といふなかには朝食も晝食も夕餉の意味も含まれてをるやうに、業 *Karma* と云ふなかには業因の作用も業縁の作用も業報の作用もふくまれてをるのであります。

#### □物理学上より觀たるカルマ

扱て、物理学におきましては力学の基礎としてニュートンの運動の三定律といふことを教へてをりますが、今この *Karma* 業の原理の上にこの三定律を應用するとその意味が一層明瞭になるであらうと思ひます。先づ、ある一つの物體に或一つの力が働くと、その物體は常に同一の方向に向つて同一の速度をもつて運動を續けてゆく所の一つの性質をもつてをるやうに、私共の魂の本質——不完全な言ひ方であるけれども今一應かう云つておく(靈魂篇参照)——も久遠の過去から

して永劫の未來に向つて、宇宙的生命の力即ち進化の原則に基づいて法性の都をさして生の一路を同一歩調をもつて進化的に運動をつゞけてゆくところの性能をもつてをるものであります。ところが、この *Karma* 業——一種の力——と云ふものは魂に一つの加速度を與へるところの新しい力でありますから、私共の毎日の一舉一動は絶えず魂に一つの加速度を與へてをるものであります。仍で、その行爲(業——力)が常に眞如の世界の方向にむかつて魂に加速度を與へてをりますれば、その加速度の爲めにより早く究竟の目的地に到達することができるべき道理でありますけれども、私共の行爲は色々な方向に働くものですから魂はもとの方向を失つてその力が働いた方向に加速度を得て生の進路をとります。ところが、我々が毎日やつてをることを觀ると、自分の魂に本來の方向にむかつて加速度を與へてをる場合は非常に尠ないやうに思ふのであります。その多くはみな最早もとの方向をあやまつて間違つた方向に向つて魂に加速度を與へてをりはせないでありますか? 即ちある人は人間の方向に向つて加速度を與へてをるでせう、しかしこれは未だ上等の部類であります、或人は地獄の方向に、或人は畜生の方向に、或人は餓鬼の方向等に加速度を與へてをる人が多いやうであります。この事は今のうちによく省察して若しその方向が間違つてゐたならば、さつそくに本來の方向に向つて加速度を與へなほさなければ大



變なことになるであらうと思ひます。仍で、その魂に働く力即ち行爲は業因であり、その力の働いた方向に向つて魂が一定の加速度を得て進んでゆくことが即ち業報でありますから、若し善の力（行爲）が働くときはその魂は善の方向に加速度を得て進む譯であります。しかし惡の力（行爲）が働いた場合には魂はどうしても惡の方向に加速度を得て進むべき道理であります。これを所謂善因善果惡因惡果と云ふのでありませう。

以上はニュートンの慣性の定律と運動の定律との上からして業 Karma と云ふことを説明したのでありますが、またニュートンの三定律の一つとして反作用の定律と云ふ事を物理学では教へてをりますから、更にその反作用の定律の上からして業 Karma と云ふものを觀ますと、先づ手で一つの物體を押しますと手もやはり反對の方向に押されます、又馬が車を曳いてをるのをみると馬もやはり車の爲めに一旦後の方へひかれてからして後車を曳いて行くであります。このやうに、ある一つの物體に力が働くと、その力を働かせたところの物體もやはりそれと同量の力を反對の方面に受けなければならぬといふことは、作用に對する反作用の原理によるからであります。いま我々が宇宙と云ふ一つの物體に——宇宙を一つの物體であると假定をする——或一つの力（行爲）を作用させると、その作用に對する反作用として一つの作用を受けなければならぬ

いが、その力をはたらかせる作用は業因であり、反作用は業報であります。ところが反作用の原理として、その作用と反作用との大いさは常に等しいものであり、その力の働く方向は反對でありますからして、いま我々が惡の業因（惡行爲）をはたらかせたならば何時ぞには屹度それと同量の業報——反作用——を受けて苦しまねばならないし、又善の業因（善行爲）を作用したならば假令人がそれを見てゐても見てゐないでも何時ぞには反作用の原理によつてそれと同量の業報——反作用——を受けて幸福な境遇を得る事のあるのは明かな事でありませう。例へば他人の家に放火して人を困らせたならば、國家の法律によつて放火罪といふ罪名のもとに監獄に投じられてそれ相當の苦しみをせなければならぬと云ふことは、作用に對する反作用の原理によるからであります。之は只現世の一局分について云つたのであるが、三世に亙つて私共の行爲の上には常にこの反作用の原理が繰り返へされてゆくのですから、私共の世界もやはりこの反作用の原理によつて造り出されるのであります。故に釋尊は大無量壽經に、

「世に常の道、王法の牢獄あれども、肯て畏れ慎みず。惡をなして罪に入りてその殃罰を受け、解脱を求望すれども免出を得がたし。世間にこの目前に見ることあり、壽終りて後の世にもつとも深くもつとも劇し。その幽冥に入りて、生を轉じて身を受く。譬へば、王法の痛苦極



刑さだめの如し。故に自然の三途無量の苦惱あり。』  
と、お仰せられてをります。

### □勢力消散法の原則より觀たるカルマ

扱て、誰れでも子供の時分にはよく面白半分にやることではありますが、あの静かな鏡のやうな池の眞中へ小石を一つ投げ込みますと、波源を中心として四方に輪狀の波紋が生じるでありませう。ところが、その波紋は物理学で云ふところの勢力消散法の原則にもとづいて、一旦は周圍の岸にまでひろがるけれども亦その反作用としてもとの波源に還つて池はもとの静けさになるであります。之は一つの例稱として申したのでありますが、その小石を水面に投げる作用が所謂業因であり、その生じたところの波紋がもとの波源に還る現象が即ち業報であります。

### □業 Karma の定義

この様に、すべて業因と業報とはかくの如き關係をもつたものでありますから、ある佛書には「たとひ百劫をふるとも、所作の業亡びず。因縁會遇するのとき、果報還つて自ら受く。」と述べ

てあります。又この意味をボールは「人は蒔きたる物を收むべし。」と云つてをりますが、之等の意味からして Karma 業と云ふことを定義してみますと「業とは、宇宙の物質界の不均と、精神界の不調和とを絶えず回復しやうとする調和の法則である。」と、いふことができるであります。かういふ譯ですからして、カルマそのものには我々を賞したりまた罰したりするやうな權威もなければ力も持つてゐないのであるけれども、自分自らが自分の行爲に對して物理學的の原理によつて賞したり罰したりしてをるのであります。それは丁度蠶が繭を作り、蛾が燈火にとび込んで自ら自分の生命をなくするのと少しも違つたところはないのであります。

### □二種の業因

さて、話しが少し横道へ這入るやうであります。先きに靈魂篇に於て申しておいたとほり、人間の靈體を組成してをる Manas といふ一本因は、その本能性として一部分は Buddhi に同化して靈性的意識となつて進化的の心作用の根本原力となり、残りの部分は Kama-Rupa に同化して動物的意識となつて退化的の心作用の根本原力となるものであります。またこれを佛敎の唯識論の上から云ひますと、私共の胸中には十一種の善心と二十六種の惡心とが晝夜不斷に相ひ對陣



してゐて、善心は常に悪心を征服しやうとし悪心は何時も善心を抑壓しやうとしてゐますから、私共の胸中は何時も善心と悪心との争闘によつて一大修羅場を演出してをるのであります。しかし、悪心が堅固であれば善心も亦堅固に陣營をかためてゐますから、其處に勝劣のあることはまぬがれることはできません。即ちある時は善心が悪心を抑壓しますが、また或時は悪心のために善心が麻痺せられることもあります。斯のやうに、善心と悪心とが不斷に争闘を續けてゆく間に我々の運命は因果の理法によつて、善惡の何れかに行爲の上に於て或ひは思想の上に於て決定せられつゝあるのであります。

仍で、この業 *Karma* を人間の問題として申しますと、業を分つて思業と思已業との二つとします。それで、その思業と云ふのは生きんとする力でありまして、思已業と云ふ方はその力によつて表はされた行爲その物であります。仍で、生きんとする力は人間としては本然のものであります。この本然の欲求が我々にあるが爲めに人間は生れたり死んだり、またはあらゆる存在が構成せられたりするのであります。この生の欲求によつて生れたところの人間はまたその行爲を積集することによつて再び新しい勢力を造ります。解り易く云ひますと、我々がかうして人間に生れ出てきたのはその本然の「生きんとする欲求」によつて生れたものであります。而もさう

して一度生れて人間として生存したならば、その生存の行爲によつてまた更に新しい勢力を造るのであります。而してその新たに造られた勢力は更に來る生の世界を構成する要素となるのであります。斯のやうな手續によつて生れ變り死に變りして生は限りなく永劫の未來に相續してゆくのであります。それは丁度高いところにある水は水車を回轉し、その水車は更に機械を運轉させるが如きであります。斯のやうに、エネルギー不滅律によつて或る一つの力が無窮に持續してゆく爲めに我々は絶えず迷界に流轉するのであります。

### □業の時間的分類

併し、假令業因が生の世界を構成する機械的エネルギーをもつてゐたところが、それに何等かの縁の力が働かなければその業因の機械的エネルギーは何時までも潜在的のものとして應報の仕事させないことは、丁度穀を倉庫の中に積んでおいては何時までたつても芽を出さないと同じわけであります。仍で、その業因に縁の力が働く時の遅い早いによつてその機械的エネルギーが應報の仕事をする時刻に差異を生じる譯でありませう。故にこの邊からして業 *Karma* と云ふものを佛敎では分類をして順現受業、順生受業、順後受業、順不定受業の四種のカルマがあるこ



とを教へてをります。と云つて四通りの異なつたカルマ——業——があると云ふのではなくして、只その應報の現はれる時刻に遅速のあるところから分類をしたのに過ぎないのであつて、その内容はいづれも或る一種の力であつて少しも違つてはゐないのであります。

扱て、その順現受業じゆんげんじゆじやうと云ふ Karma はその仕事をはじめるのが最も早いものであつて、この世で造られたところの行爲——業因——の機械的エネルギーがこの世に於て應報の仕事をはじめる業であります。次に順生受業じゆんしやうじゆじやうといふ Karma はこの世でなされた行爲（業因）の機械的エネルギーが次ぎの世で仕事（業報）をはじめるものであり、第三の順後受業と云ふのはこの世でなされた行爲の機械的エネルギーが第三世目に於て應報の仕事をはじめるものであります。ところが、第四の順不定受業じゆんぶんじやうじゆじやうといふ Karma 業は未定的のものであつて此世でなされた行爲（業因）の機械的エネルギーが何時の世に應報の仕事をはじめるのか一向解らない業なのであります。このやうに、業因の機械的エネルギーが應報の仕事をする時刻に遅速があるものですから、此世で悪事ばかりをしてゐるにも拘らずその悪事が一生暴露せないで否假令暴露したにしても生涯を幸運に送る人ができたり、また之と正反對に正直で勤勉にたち働いてゐながら案外にも不幸な境遇に悩まされて一生を送る人等色々の境遇の人ができてくるのであります。しかし、それらの有様

をみて因果應報などといふやうなことがあつてたまるものか、その證據には彼の人は一生涯あれ程に悪事ばかりをして人を困らせたり泣かせたりしてゐても一生幸福で終つたではないか、若し因果應報といふことがあるのなれば彼んな人間こそ一番に不幸な境遇を受けなければならないはずだ、などと云つて因果の理法——宇宙の必然性——を否定する人が往々にしてありますが、それ等の人々は只この人生五十年の一局部のみについて観てをるからして、そのやうなことを言つたり思つたりせなければならぬのであります。若し一旦局面を轉回して三世に亙つてこの宇宙の大局を観たならば、如何に因果の理法を否定してゐた人でも成る程とその一絲亂れない嚴肅さに驚くにきまつてをります。

### □同時に二種の應報は起らず

すべて、同一物の上に同時に二つ以上の現象が起るといふことはないのであります。即ち我々が睡眠と歩行とを同時にすることができないやうなものであります。しかし、夢をみてをる時は歩いたり走つたりすることがあるではないかと云ふ人があるかも知れないが、それはどこまでも夢であつて事實に於ては睡眠といふことだけしかできてゐないのであります。ですから、私共



が二つの應報を同時に受けると云ふことは絶體にないのであります。故に、假令此世で悪事ばかりを働いてをる人でも、その人が若し二世または三世まへの世に於て善い行爲（業因）をしてゐたならば、その善因の機械的エネルギーが現世に應報の仕事をしてゐるのなれば、假令この世で悪事をはたらいて人から悪人と云はれやうが何んと云はれやうが、過去世の善因の反作用としてこの世では幸福な境遇をうけることは當然なことであります。しかし、その幸福が何時までも続くものであると思つてゐては大變な間違ひであつて、過去世の善因の機械的エネルギーが應報の仕事をしてその人に幸福な境遇を與へてゐるのでありますから、その人が幸福な境遇を受けつつあるだけそれだけづつ過去世の善因の機械的エネルギーが時々刻々に消費せられつつある譯ですから、何時かはそのエネルギーが盡きて仕舞つてその善因が能力を失つて仕舞ひますからしてその人の身の上から幸福な境遇は去つてしまふ譯であります。ですから、幸福は何時迄も続くものではないと云ふのです。所が、エネルギー不滅律によつて過去世の業因の機械的エネルギーは現在の悪行爲——悪因の機械的エネルギーと姿を變へてをりますからして、過去世の善因のエネルギーが消費せられて仕舞つてその能力を失つてしまふと、すぐに此世で爲したところの悪行爲（悪因）の機械的エネルギーが應報の仕事をはじめだしますから、その人は以前とうつてかはつて不幸な

境遇をうけて苦しまねばならないことになるのです。以上は此世で悪行爲をしてゐながらも幸福な境遇を受けてをるところの人の應報の手續を申したのでありますが、更に此世で善行爲をしてゐながら不幸の境遇に沈んでをる人の應報の手續を申しますと、その人が二世三世過去の世に於て造つたところの悪因（悪の業因）の機械的エネルギーが今現在この世で應報の仕事をしてをるために、その反作用を受けて不幸な境遇に沈んでをるのであります。しかし、その不幸とても何時までも続くものではなくて時々刻々にその悪因の機械的エネルギーは消費せられつゝありますから、何時ぞにはその悪因も能力を失つて終にはその人の身の上からして不幸の境遇は取り去られてしまふ譯であります。ところが、やはりエネルギー不滅律によつて過去世の悪因のうちにあつた機械的エネルギーは今度は姿を換へて善因（善の行爲）となつてをるからして、過去世の悪因がその能力を失ふとすぐにその善因の機械的エネルギーが應報の仕事をはじめますからして、その人は以前とうつて換つて幸福な境遇をうけることができる譯であります。

さて、以上は業因がその機械的エネルギーによつて應報の仕事をしてゆく順序を極く大體に於て申したのでから、まだく説明の仕方は不十分ではありますが、と云つて説明の責任をのがれやうとするのではなくて、迎もこの複雑な應報の手續は筆や言葉をもつてしてはお知らせする